明かに謝眺が北樓たるを提醒し、以て題意を足す。他が意到り筆隨ひ手に任せて奇構を成すを看んと要す。

臨洞庭

孟浩然

八月湖水平。　涵虛混太清。　氣蒸雲夢澤。
波撼岳陽城。　欲濟無舟楫。　端居恥聖明。
坐觀垂釣者。　徒有羨魚情。

晩唐の皮日休、孟浩然を推稱する所以のもの備さに至る。その言に曰はく、明皇の世、章句の風大いに建安の體を得たり、論ずる者李翰林・杜工部を推して尤なりとす、その間に介して能く愧ぢざるものは惟、我鄉の孟先生なり、先生の道、景に遇うて韻に入る、奇を拘し異を抉し、巉巉として人口に束ねしむるものにあらず、涵涵然として平大の風あり、公輸氏が巧に當つて用ひざるものゝ如し。北齊の人、蕭愨が「芙蓉露下落。楊柳月中疎」（秋思）の句を美なりとす、先生には「微雲淡河漢。疎雨滴梧桐」の句あり、又、樂府に王融が「殘日霽沙鎭。清風動高泉」の句を美なりとす、先生には則ち「氣蒸雲夢澤。波撼岳陽城。」の句あり、謝眺の詩句精しきものを「露濕寒塘艸。月映清淮流」（興胡興安夜別）とす、（これ何遜の詩なり、皮日休以て謝眺とせるは一時の誤記なるべし）。而して先生「荷風送香氣。竹露滴清響」（夏日南亭懷辛大）の一聯あり、これ古人と勝を毫釐に爭ふなり。是に稱するもの衆く、悉く數ふべからず、嗚呼

先生の道復た何をか言はんや、貧と謂ふも則ち身に於ては天爵あり、死と謂ふも則ち文に於ては不朽なり、士たるの道亦已に至れり盡せり。先生は襄陽の人なり、日休も亦襄陽の人、既にその名を慕ひその貌を覩る、蓋し文王を思ふときは則ち昌勳を嗜み、仲尼を思ふときは則ち有若を師とす、吾、先生に於て之を見る云云と（皮氏文藪卷七鄧州孟亭記）。その推稱せること此の如し、特に此のみならず、同時の張九齡・王摩詰等口を極めて之を贊揚し、李・杜二家の集中に在つても亦贈酬の作極めて多く、少陵が如きは「吾憐孟浩然。短褐即長夜。賦詩何必多。往往凌鮑謝」（遣興）と云ひ又「復憶襄陽孟浩然。詩句句盡堪傳」（解悶）と云ふに至る、以てその如何に重きを當代に置かれしやを知るべし。然れども全集に就いて之を審するに、他が得力の處は惟、五言の短章に在り、陶淵明を學んでその簡遠の處を得たれば、歸趣略、王摩詰とその宗派を同じうす、故に摩詰と交尤も厚し。摩詰曾て金鑾殿に入直せし日、私かに浩然を邀へ入れて風雅を商搉す、適、玄宗、殿上に臨御あり、浩然、倉皇錯愕して床下に伏匿す、摩詰肯へて隱さず實を以て奏聞す。玄宗曰はく朕、この人を聞くこと久しと。因つて召し見てその近製を進めしむ。孟浩然則ちその「歲暮歸南山」の作を誦す、曰はく「北闕休上書。南山歸弊廬。不才明主棄。多病故人疎。白髮催年老。青陽逼歲除。永懷愁不寐。松月夜窓虛」と、玄宗之を聞いて曰はく、卿自ら朕を棄つ、朕何ぞ卿を棄てんやと。因つて命じて南山に放ち歸さしむ。浩然の遭際是を以て終に偃蹇し、一山人を以て終る、一棄字の愼まざるに坐すると雖も、亦安んぞその平生五字に沈潛せるを以て、精神之がために局縮し、遂に詩窮の否運を招きたるに非ざるを知らんや。蘇東坡は曰はく、孟浩然の詩、韻高けれども才短し、內法の酒を造るの手ありて材料なきに苦しむものに似た

りと、未だ以て失當の言と爲す能はざるなり。而して臨洞庭の一篇の如きは、神氣充塞して司空圖が所謂「積健爲雄返虛入渾」の妙を具す、これ渠が集中に於て實に僅かに其一あるものなり。

岳陽・洞庭は東南山水の壯觀を占む、騷人墨客題詠のもの一にして足らず、然れども之が冠冕として愧ぢざるものは實に浩然がこの作と、少陵が「昔聞洞庭水」の一篇あるのみ。浩然がこの作氣象雄張にして、曠然としてその壯觀を目前に見るが如し。前半は景を寫し後半は懷を寫す、渠が偃蹇不遇の恨亦言外に隱約せり。之を題位に對照すれば前半は「洞庭」の實景、後半は則ち「臨」の字の意なり。「八月湖水平。涵虛混太清。」起し得て已に渾灝偉大、以て前聯「氣蒸雲夢澤。波撼岳陽城。」のために勢を作し聲を振ふ、巨刃天を摩するの觀あり。舟楫の句、尙書說命の語を借用す、蓋し波濤連天の偉觀に對して覺えず自己が況遇上に感憤するなり、要路に登らんと欲して正に津筏なし。卽ちこの洞庭の水を濟らんとするも舟楫なきが如く、徒らに端居安逸して聖明の世に素餐の恥を貽せるのみ。董仲舒言へるあり、淵に臨んで魚を羨まんよりは、退いて網を結ぶに如かずと(漢書本傳)、我、今坐して垂釣のものを觀て轉た羨魚の情に禁せず、寧ろ仲舒の笑ふ所と爲る毋らんや、以て深く功名の爲し難きを歎ずるなり。舟楫・垂釣・羨魚、借つて以て自家の衷曲を抒ぶと雖も、仍ほ洞庭の風物を脫せず、語意雙關の妙、唯、神解を待つのみ、五律起句本來韻を押せず。初唐の人時に一たび之を爲すものあるも終に正格に非ず、浩然に到つて更にその變態を極め、起句の下三字平間仄の例に準じて別に一種の音節を成せり、卽ち「八月湖水平」「北闕休上書」等これなり、然れども若しこの體に依るときは、上二字は必ず入聲を用ふべし、これ音節の至理に關す、學者の知らざるべからざるものなり。

題義公禪房

義公習禪寂。結宇依空林。戶外一峰秀。
階前衆壑深。夕陽連雨足。空翠落庭陰。
看取蓮花淨。方知不染心。

首句はこれ義公、次句はこれ禪房、前後聯みな義公禪房の景を寫す、而して其間亦少しく運庭あり、蓋し前聯は禪房所在の位置を言ふ、所謂空林の景これなり、後聯は禪房所見の風概を言ふ、所謂結宇の景これなり、七八は禪房所見中の物に就いて以て、義公が禪心の高深なるを形はし、第一句の意を足して收束となせるなり。

「一峰秀」なるものは以て義公が道德の超邁なるを表はすべく、「衆壑深」なるものは以て義公が禪學の淵深なるを見はすべし、二句固よりこれ寫景の語と雖も、人境相應して始めて其妙を見る。雨足は猶ほ雨脚の如し、張協が詩に「雲根流八極。雨足灑四溟」(雜詩)とあり二字此に基づく、蓮花は汚泥に出でゝ汚泥に染まず、華嚴經に蓮花の世界はこれ盧舍那佛が成道の國なりと見ゆ、佛家の之を貴む良に以あり、この清淨無垢の蓮花を見て、愈〻義公が峰秀壑深の地に愧ぢざるを知る、淨住子に「心常無碍空有不染」と云ふ、用ひ得て靈活なり。

第二句「依」の一字を平聲にしたるは第一句の「習」、第三句の「一」、並に仄聲に依つて拗調となしたるに由る、前人筆に隨つて變化し肯へて拘束せざるも、亦斷じて規矩の外に超越し縱に失律を成すに非ず、必ず然らざるを得ざるものあつて存するを研尋すべきなり。

終南山　王維

太乙近天都。　連山到海隅。　白雲廻望合。
青靄入看無。　分野中峰變。　陰晴衆壑殊。
欲投人處宿。　隔水問樵夫。

王摩詰、中歳より頗る道を好み佛を奉ず、平生蔬食素衣、妻を喪ひしより再び娶らず、その詩自然の處固より淵明に得たる多しと雖も、所謂妙品上上なるものは亦實に之を禪理に參して開悟したるに出でずんばあらず、東坡は云ふ、摩詰の詩を味はへば詩中に畫ありと、山谷は云ふ、この老の胸次定めて泉石膏肓の疾あらんと。蘇・黄二家の語を觀て摩詰の本領蓋し思ひ半に過ぎたり、その塵埃の外に蟬蛻し萬物の表に浮游せる一段の高情遠致に至りては、則ち直ちに造物と相表裏す、獨り詩中の畫のみに非ざるものあり、五言短篇に於て尤もその神理を見る、萬古寫景派の宗とする所、此を捨てゝそれ誰に適して歸せんや。余既に五言古詩に於て細かに興會と根柢の別を剖析し、之が爲にその妙緒を標擧したり、彼此參觀せば得る所益〻多からん。

終南山は道書に之を太乙山と謂ふ、蓋し太乙はその一峰の特に秀出せるものゝ名にして、終南はその總稱なり、起句はその高きを提出す、天都は原とこれ星の名、太乙も亦星の名なるが故に、之を湊合し兼ねて終南山の長安に在るを表はしたり、この處故らに星名を用ひたるもの亦決して徒爲に非ず、神氣は早く第五句に貫注せり、細心に尋繹すべし。次句はその廣きを提出す、終南山は東西凡そ四縣の地に連亙し、東海の隅に至つて止まる。この二句既に終南山の高廣なるを概す、故に中二聯に於て幽玄・奥妙の景語を以て細かに之が分解を施したり。

「白雲廻望合。青靄入看無。」とはこれ起句を承けて高意を形容するなり、後顧すれば白雲跡を封じて見えず、前看すれば青靄天を拂つて全く無し、山の高く雲靄の上に挺出したればなり。故に此二句歸着する所は只是れ一箇の高の字。

「分野中峰變。陰晴衆壑殊。」とは是れ次句を承けて廣意を形容するなり、天に十二次あり、地に十二辰あり、保章氏、星土を以て九州を辨ず、是を分野と謂ふ、終南の山その北は禹貢の冀州に屬し、その南は梁州・荆州に跨る、而して冀州は廿八宿中、井・鬼の分野に係り、梁・荆は翼・軫の分野に係る、これ一峰の中と雖も已にその分野を異にせり、況んや衆壑の間或は陰り、或は晴れ、「東邊日出西邊雨」（側禹編・竹枝詞）の奇觀あるは固より當に然るべき所、山の廣に非ずして、何ぞや、故にこの二句、歸着する所は只これ一箇の廣の字。

結二句に至つては、その深邃にして人境に遠く、偶〻來往するものは只樵蘇に過ぎざるを言ふ。既に高く既に廣し、前六句を誦して深邃の意早く讀者の意中に在り、是を以て餘筆乃ち之を點醒す、快妙言ふべから

ず、麻姑の長爪を倩うて痒處を搔くとは、卽ちこの謂なり。

過香積寺

不知香積寺。數里入雲峰。古木無人徑。深山何處鐘。泉聲咽危石。日色冷青松。薄暮空潭曲。安禪制毒龍。

題して香積寺を過ぐと曰つて、起語則ち香積寺を知らずと云ふ、逆筆斗峭人を驚かす、詩の落筆を爭ふ所以なり。又、何處の鐘ぞと云ふは仍ほこれ「不知」の意なり、然れども既に鐘聲を聞く、則ち寺あるを知るは言はずして自ら明かなり、故に後聯接手して寺中の幽景を寫す、詩の過渡の處力を費さゞるを看るべし。

香積寺は終南山中子午谷の北に在り、雲峰數里の間、古木無人の逕、前詩の高廣深邃なるを以て之を想像するも、應にこれ實況なるべし。泉聲の石に激し、日色の松に掛る、想ふに亦これ寺中の實景、然れども石を形容して危と云ひ、泉聲を狀して咽と云ふ、松を形容して、青と云ひ、日色を狀して冷と云ふ、則ち鍊字の極則にして、幽峭の態、刻畫を待たずして自ら現はる、これ斯道に於て當に潛思沈念、鏤腎鑄肺を要すべきの第一義なり。

法苑珠林に曰はく、西方に不可依の山あり、甚だ寒く、四時雪を絕せず、山中に池あり、毒龍之に居る、

昔、五百の商人池側に止宿せしに、龍怒つて商人を泛殺す、槃陀王之を聞き、婆羅門の咒を學んで、池に就き龍を咒す、龍化して人と爲り、その過を懺悔す、王乃ち之を舍すと、これ詩家習用の禪語毒龍の故事なり、彼の李洞が「沙中彈舌授降龍」と云へるが如きも全く此に依據せり。又、大智度論に曰はく、昔、大力の毒龍あり、眼を以て人を視るときは弱きもの卽ち死す、氣を以て人に噓するときは强きものも亦死すと、これ毒龍を以て人慾煩惱の作用に喩へたるなり。本篇用ふる所の意は寺側に空潭あるがために槃陀王の故事を思ひ到り、因つて此に安禪して煩惱の慾念を去らんとするの意を述ぶ。落想の由つて來る所は法苑珠林に據り、その本義は大智度論の譬喩に取りたるものと知るべし。安禪とは坐禪の者、先づ心身を調して安穩を得しめ、然る後始めて禪定に入る、故に安禪と曰ふなり、毒龍の事甚だ疣贅に似たれども、詩人の故典を運用するは斷然その原文の一章一節に死拘すべからざるを示さんため特に此を具錄す。

登辨覺寺

竹徑從初地。蓮峯出化城。窗中三楚盡。林外九江平。嫩草承趺坐。長松響梵聲。空居法雲外。觀世得無生。

首句將に登らんとす、次句正に登る、三四既に登つて先づ見る所の遠景を寫し、五六に至つて則ち專ら寺

に粘してその傍近の事物を寫せり、結二語は禪理を以て遊寺の意を申明す、仍ほこれ題位收住法なり。

初地とは菩薩十地の第一着歩にして楞嚴經に見ゆ、今借つて以て寺に登るの路口を言ふなり、化城も亦法華經の語、今亦借つて寺の稱とす。詩に由つて之を推すに、寺は蓋し連峰の頂に在り、之に登らんとするには先づ竹篠叢生の小逕よりせざるべからず、之を經て寺に入る、その位置既に高ければ目に觸るゝ所必ず遠し、窗に倚つて一覽すれば三楚の風煙盡く眉睫に集り、潯陽九江の水淼淼として林木の上に平らかなり、僧あり、結跏して坐し、安禪して定に入る。嫩草之が席を侵すも。背へて動かず。只梵鐘の長風と相和して松梢に響くを聞くのみ。承の字下し得て尤も妙、山僧より着筆せずして嫩草より立言したるがためなり。この二聯前きに太白が條下に引用せる李空同の語「闊大者は半必ず細」と云へるに適中す、參觀すべし。

「空居」は猶ほ空寂の居と云ふが如し、「法雲」は所謂菩薩十地の總稱、雲の字恰も山上に切なるがために之を用ひ、且つ起句の初地に相對照す。この二句贊歎の意、蓋し「嫩草承趺坐」の一語より線索を引く、この空居の中に於て冥目潛思し世界種種の相を觀じて以て、無生寂滅の域に到ることを得るは、料るに難事にあらず、我亦願はくは、この僧と共に長くこの地に在つて、禪理の奥旨を極めんことをとの意なり。

送平淡然判官

不識陽關路。　新從定遠侯。　黃雲斷春色。
畫角起邊愁。　瀚海經年別。　交河出塞流。

須令外國使。　知飲月支頭。

判官なるものは幕府の佐相・將軍の屬官なり。平淡然則ち新たに此に宦し、出塞の將軍に從つて遠く胡地に赴く、この詩專ら送別の意を述べ、結ぶにその能く中國の威嚴を保ちて外侮を招かしめざるの意を以てす、立言頗る妙と稱す。後出、劉司直が一篇の結語と並び推して雙絶と稱するに足るべし。

「不識陽關路」一句反挑して中二聯を起す。殊に力量あり、定遠侯は借つて以て淡然が主事する所の將軍を指す。玄陰窮朔、その雲色每に黃なり、寒氣凜烈にして一年霜雪を斷たず、故に「斷春色」と云ふ。角聲は悲栗固より邊愁を起し易きものなり、瀚海は古敦煌の地、肅州衞の西北に在り、其境殆ど今の朝鮮（新疆の誤なるべし――校訂者）に接す、一たびこの地に出づる、經年せざれば、再び中國に歸る能はず、交河の水源天山に出で、亦肅州衞の西北に流る、「經年別」「出塞流」の下三字は各〻上文の邊愁を承けて設下す、故に瀚海交河の地を說くに出づるとも、その中自ら絶塞の愁・流年の悲を含蓄して、送別の情を抒ぶるものと知るべし。凡そこの二聯は首句に陽關の路を識らずと云へるより、生出したるものなれば、淡然此に去つて、始めて出塞の道程征途の艱難を知り始むると云ふの義と做して看んと要す。結末は一轉して以て外胡に對するの道を述ぶ。昔、匈奴王、月支國と戰つて之を破り、その王の頭顱を以て飲器と爲したること漢書に見ゆ。これその故事本來は匈奴の事なれども、今之を借用して以て中國の威を示すに比す、隨手用事肯へて粘滯せざるの妙あり、文義は絮解を費すを須ひず。

送劉司直赴安西

絶域陽關道。胡沙與塞塵。三春時有雁。
萬里少行人。苜蓿隨天馬。蒲萄逐漢臣。
當令外國懼。不敢覓和親。

この篇陽關を以て起り外國を以て結ぶ、措詞・立意倶に前詩と相髣髴す、選家に在つては宜しくその一を擇んで以て之を概するを可と爲すべし、而して于鱗却つて故らにその類似せるものを并擧す、想ふに取つて以て初學の模範に資する意なるべしと雖も、畢竟邊塞悲涼峭直の音は王・李七子等が刻意に摹倣せんと欲する所のものにして、その集を繙くときはこの種のもの十毎に八九に居る、此を以て渠が此等を採擇したるは阿好を免れざるを證すべし。首句各〻陽關を用ふと雖も、彼は逆勢を作し此は順敍に屬す、唯〻潛心研思のもの始めて倶に箇中の消息を語るべきのみ、「三春有雁」「萬里少人」これ胡沙塞塵の迥かに中國と異なるを見る。「時有雁」と云ふものは時に一たび之ありの義にしてその甚だ少きを言ふなり、苜蓿・蒲萄倶に漢武開邊の故事を用ひ、安西使者の事に切ならしむ。武帝大宛に名馬ありと聞き、李廣利を遣はして之を征服し、馬及び苜蓿、蒲萄の種を携へて歸る、曰はく「隨」曰はく「逐」この二字の作用に依つてこの故事劉司直が身上に緊切し、使者の功を奏して歸るの日刮目すべきの意となり、以て送別の題面に入れり。外夷を御するの道、唯〻彼をして中國に長懼せしめ肯へて邊境を侵害せしめざるに在り、若し和親を覓むと云はゞ彼則ち已に我を輕侮するの意を生ず、外國に使するものは必ずこの心を持せざるべからず、故に此を以て結語となせるなり。

送邢桂州

鐃吹喧京口。風波下洞庭。赭圻將赤岸。
擊汰復揚舲。日落江湖白。潮來天地青。
明珠歸合浦。應逐使臣星。

題して送邢桂州と云ふ、是れ邢氏桂州の治守と爲り、將に舟に乘じて發程せんとす、故に此詩を賦して之を送るなり、桂州は明代、廣西桂林府に屬す、禹域西南の海陬なり、詩、京口驛より舟に乘じて發するに落筆し、第六句まで一氣に連下して、その途次の景致に及び、七句に到りてその任地卽ち桂州を點し、八句邢氏その人を以て結とす、題面一點も漏れず、極めて法とすべし。

京口驛は揚子江に臨む、邢、將にこの驛より舟に都して發せんとす、故に衆役人みな鐃を鳴らし笛を吹きて之を護送す、其聲正に喧し、鐃は小鉦の類にして、古へは之を用ひて以て鼓聲を止むと云ふ。邢已に舟に登る、此よりして風に乘じ、波を凌ぎ、路を洞庭湖に取り、南下して海に入るなり、其間の風景殊に乏しか

らず、赭圻の城、太平府繁昌縣の西に聳え、赤岸の山、揚州の城邊に突兀たり、この間を經行して汰を擊ち鈴を揚げ、進んで洞庭湖中に入れば、水廣く波平らかにして、縱望正に空濶、日脚西に落ちては江湖一色淼として白く、潮頭遙かに來りては天地相連なりて茫茫として青し、此二句水天寥濶の景を寫す、神妙の域に躋れるを覺ゆ。合浦は廣西の地にして古來明珠を產す、漢の時一太守貪穢なりしかば珠徙つて他境に之き孟嘗の守と爲つて廉介なるに及び、珠復た故の合浦に還れり。使星は後漢李郃が事にして、郃、もと天文に精しく、夜二使星の益都地方に向ふを見たり、已にして果して蜀の使者を發遣するの事ありしと云ふ。今、二事を併用して邢の賢德あるを稱す。その意蓋し君去つて廣西に行かば、彼の一たび他境に徙りし明珠も、使臣星光の爛漫たるを逐ひて復た合浦に還るの事あるべしとなり。「珠」の字「星」の字と自ら相映發す、是れ文字上の針線なり。

「赭圻將赤岸。擊汰復揚鈴。」此句赭圻を以て赤岸に對し、擊汰を以て揚鈴に對す、之を當句對と謂ふ、杜必簡(審言)が「伐鼓撞鐘驚海上。新妝袨服照江東。」杜子美の「桃花細逐楊花落。黃鳥時兼白鳥飛。」(曲江對酒)みなこれと同例なり、蓋し聯句若し必ず花に對するに柳を以てし、紅に對するに綠を以てするときは、庸熟に陷りて數見不鮮の弊を生ず、故にこの種の異樣對を作りて板中に活を求む、然れども之を屢〻するときは、則ち又陳套と爲り、且つ疎率の病に入り易し、學者の尤も注意を要すべき所なり。「將」の字は「兼」の字と同じく、俱に「與」の義なり、擊汰は楚辭(離騷)「齊二吳榜一以擊汰」に基づく、注に曰はく汰は波なりと、鈴は船の窗戶あるものなり。

後聯の妙、口之を言ふ能はず、閉目一想してその光景を思はゞ、水煙淼茫、杳然無際の狀恍として目前に

浮ぶ、所謂造物と相表裏するものなり。

使至塞上

單車欲問邊。屬國過居延。征蓬出漢塞。
歸雁入胡天。大漠孤烟直。長河落日圓。
蕭關逢侯騎。都護在燕然。

是れ摩詰自ら出使して塞外に出づ、彼の送別の作の專ら想像に成るものと同じからず、その寫景の妙、衆作に較ぶれば更に一倍を加ふるもの良に所以あり。首一句、出使と身の出使の地とを五字中に領起してその端を發し、第二句は出使の地を承けて之を言ひ、水名を一點して豫め、七八の蕭關燕然と相對せしむ、居延は卽ち水名、甘州に在り、その側の城砦を居延城と曰ふ、亦水に由つて之を名づけたるなり、三四は出使の情狀を述べ、隨手時序を逗出す、五六は卽ち塞上所見の景なり、七八又兩地名を用ひて、自己が當に使命を畢るべきの地卽ち都護府の所在を明かにして結としたり。

已に單車と曰ふ、則ち跟從のもの無し、獨り使命を奉じて邊境を問はんと欲す、その客況蕭條に堪へざるの意早く此中に見ゆ、故に五六の景語に至つて一層の淒味を加ふ、所謂逼出の法此に於て之を悟るべし、已に邊境に到る、復た中國の土に非ず、是れ胡人降附の屬國たり、居延の河を過ぎて望めば愈〻蕭索を感ず、

この句又五六のために一襯す、所謂長河は卽ち居延たるを知るべし、故に順文を以て言へば、五六の景直ちに第二句に接して寫すを可とする如くなれども、然るときは神に入るの妙句も終に直率の病を傷むなからず、忽ち三四の二語に由つて之を間隔して始めて靈動異常なるを覺ゆ、句法固より錬らざるべからざるも、章法錯綜の理決して之を等閑に附するを得ざるを知るべきなり。

三四は未だ塞上の景を寫さゞる前に於て、先づ出塞の情狀を寫し、第一句單車問邊の意を足し、而して蓬と云ひ雁と云ふ、時序の節物自然に言表に見ゆ、漢・胡の二字を用ひたるは亦兼ねて第二句屬國の意を申明せるなり、身は征蓬と爲つて漢塞を出で、終に歸雁と與に胡天に入り、この居延河畔を過ぎて望む所のもの將た如何ぞや、五六卽ち之を寫して蒼茫極まりなく、人をして神遠からしむ、畫工の名手と雖も豈に能く眞に逼る是の如きなることを得んや。

知らんと要す、五六はこれ一篇の精神なり、前四句に寫す所の事は步步みな勢を蓄へて五六の精神に注射したるものなるを。大漠長河、彌望千里、人家草木の眼を遮るものなければ、一道の炊煙雲に連なつて直なる、西下の落日水に接して圓なる、みな見ることを得べし、一直字、一圓字、廣漠無邊の景象、我、殆ど何の語を以て之を寫して始めて適切なるやを知らざらんとす、五律を作るもの摩詰を奉じて正宗と爲すは、寔に職として此等に因由せるなり。一望の中、煙直く日圓なり、已に人家を見ざれば一路來往の人を見ざるは固よりなり、故に行いて蕭關に至つて、始めて一騎の我を迎候するものあるに逢ふことを得たり、此に就いて訊問し因つて以て都護府の現に燕然山に駐劄するを知れり、末二句前、居延の地名を用ひたるに就いて之を收束するものなれども、亦「限りなく遠くも來にけるかな」と俯仰延佇するの態あり、以て五六の景語を結ぶ、是を餘波と謂ふ。

摩詰詩中の畫、今人往往幽細雅淡のものに就いて之を求む、知らず他、固より雄偉斉健この篇の如きものあり、暫らく本選載する所のものに就いて之を言ふに、種種の景語固より神妙自然の致ありと雖も、窈かに未だこの煙直・日圓二句の上に駕するものあらずと謂ふ。學者それ此種を三復して神悟する所あれ。

觀獵

風勁角弓鳴。　將軍獵渭城。
雪盡馬蹄輕。　忽過新豐市。
回看射雕處。　千里暮雲平。

草

帥枯鷹眼疾。
還歸細柳營。

淡海の詩僧大典、この詩を解釋するに、二句毎に四字を以てしたり、極めて肯綮に中れり、今之を擧げんに、曰はく

一二は　行裝嚴整
三四は　馳聘便儇
五六は　進退捷疾
七八は　原野掃蕩

今之に倣うて作法を言へば左の如し。

一二は　正に獵す
三四は　獵時の景
五六は　正に獵し罷む
七八は　獵後の景に由つて獵時の景を想ふ

夫れ獵は秋多の際、草木凋落して鳥獸伏身の處なき候に宜し、即ち北風正に勁く蘇栗として我が角弓を吹き鳴らしむ、獵意勃然として何ぞ抑遏すべけん、是に於て將軍乃ち出でゝ渭城の郊外に獵せり、故に曰はく正に獵すと、而してその行裝の嚴整なるは自ら「風勁角弓鳴」五字中に含有するものと知るべし。繁草蕪沒せば俊鷹の悍鷙と雖も輒く生口潛匿の所を發見する能はず、而して今や枯れたり、鷹眼益〻疾利にして一擊獲ざる無し、積雪路に堆かければ、名馬の桀驁と雖も、縱横馳突するに難し、而して今や盡きたり、馬蹄愈〻輕捷にして任意に盤旋するに足る、是れ獵時の景なり、而して眼疾蹄輕と曰ふときは、所謂馳騁便儇の態筆先に躍如たり。是を前半段とす。

馬輕く鷹疾し、以て京郊に獵す、則ち出沒自在にして蹤倪すべからず、忽ちにして遠く新豐の市上を過ぐれば、又、忽ちにして近く細柳の營中に歸る、進退捷疾にあらずして何ぞや、而して已に「還歸」と曰ふ、則ち正に獵し罷むなり。この詩題して觀獵と曰へば、この兩句は畢竟觀者の眼中なるを知るべし、新豐・細柳幷に長安所在の地、第二句之を總括して渭城と云へるに由り、故らに之を用ひたり。既に營に歸つて顧みて今一箭翔空の雕を射落したる處を看れば、千里雲平らかにして狐兎一掃して空し、所謂原野掃蕩なるもの、即

ちこれにして、千里雲平は是れ獵後の光景、回看して之を見る、則ち之に由つて獵時の景を追念するの意あり、結七字、心眼共に之が爲に一曠す、是れ宕出遠神法なり。通體高逸字字鏘鏘として響く、一懈筆あるを見ず、五律是に至つて實に游・夏の徒一辭を贊する能はざるものなり。

郎梅溪、詩法を王阮亭に問ふ、曰はく律中の起句は平易に渉り易し、宜しく何の法を用ふべきやと、阮亭答へて曰はく、古人謝元暉の發端に工なるを稱す、宜城集中の「大江流日夜。容心悲未央」（奉使下都夜發新林至京邑贈西府同寮）の如きは是れ何等の氣魄ぞ、唐人起句尤も警策多し、王摩詰が「風勁角弓鳴。將軍獵渭城。」の類の如く、未だ枚擧し易からず、杜子美尤も多しと（帶經堂詩話卷廿九答問）。又、沈確士は言ふ、五律の起手は突兀を貴ぶ。王右丞が「風勁角弓鳴。」杜少陵が「莽莽萬重山。」（秦州雜詩）「帶甲滿天地。」（送遠）岑嘉州が「送客飛鳥外」等の篇は、直ちに高山の墜石その由つて來る處を知らざるかと疑ふ、人をして驚絶せしむと、兩家のこの詩に嘖嘖たる啻一再ならざるものあるを見ても、この詩の絶唱たる知るべし、此を以て之を求めば餘師あること疑ふ可き無きなり。

送張子尉南海　岑參

不擇南州尉。高堂有老親。樓臺重蜃氣。
邑里雜鮫人。海暗三山雨。花明五嶺春。
此鄉多寶玉。愼勿厭清貧。

起調亦逆勢を作して下る、捷快比なし、南海は今の廣東廣州府の地方なり、已に僻遠に屬す、況んやその人縣尉の微官を以て、遠く荒陬の任に赴く、凡手に在つて常情を寫さば、殆ど將に之を慰むるに詞なからんとす、看る他が輕々に之を提起して絶えて力を費さず、一言に喝破して勢、破竹の如し、曰はく、地の近遠官の崇卑を擇むに暇あらずして之に就くものは高堂の老親を安慰するがためのみと、唯〻この十字、幾千萬言の回護文字を陳ぬるに勝り、送らるゝものをして開卷感泣せしむるに足れり、三四はその海陬遼遠の地たるを申言す、樓臺あるも是れ蜃氣の重疊して成す所に過ぎず、邑里の間も半ば鮫人の窟穴と相雜居せりと云ふ、以て人類の棲息すべき所にあらざるを見る、鮫とは卽ち俗に所謂人魚の類なり、此等と雜居す、寧ろ堪ふべきか、五句は仍ほ三四を承けて海陬荒隅の狀を寫し、六句に至つて一轉して蠻荒の地も亦目を怡ばしむるに足るものなきに非ざるを言ひ、七句を逼出す、南州の臨海に番山・禺山あり、之を三山と謂ふ、五嶺は大庾・始安・臨賀・桂陽・揭陽の五嶺にして以て中原に界域するものなり、南方炎荒溽暑雨多し、海天ために暗くして三山を辨ずる能はざるは固より往往之あり、然れども五嶺の春風・萬花早く開く、庾嶺の梅花の如きは千古に豔稱する所なり、何ぞ客愁を消遣するなしと言はんや、七句より一歩を進めて、南州の產物に及び、八句に於て第一句の意に繳還し、薄官微祿と雖も愼んで清貧自ら守り、貪穢の行ある可からずと叮嚀に規戒を寓す、古人贈言の誼、眞摯なる是の如し。蓋し南海には明珠寶玉を產す、古へ貪穢の吏ありて珠、合浦より徙る、以て鑑となすべし、故に之を張が官を擇ばずして、孝養の志を遂げんとする初心に訴へ、寶玉を見ると雖も、意を動かすことなく、能く廉行の行を保持せんことを勸むるなり。前句に「多寶玉」と曰ひ、後句に「勿厭清貧」と曰ふ、則ち之を貪る勿れの意は、言下に躍然たるも、肯へて說破せず、圓轉滑脫の筆なり。

寄左省杜拾遺

聯歩趨丹陛。　分曹限紫微。　曉隨天仗入。
暮惹御香歸。　白髮悲花落。　青雲羨鳥飛。
聖朝無闕事。　自覺諫書稀。

至德二年、杜少陵正に長安の賊中より逃れて、鳳翔の行在所に至り麻鞋して天子に謁見し、左拾遺の官に拜せらる、是れ他が一生の遭際にして、その年六月、裴薦・韋少游等の同僚と與に、連署して岑參の用ふ可きを上奏す、その文に曰はく、臣等觸かに見るに、岑參は識度淸遠にして議論雅正なり、佳名早く立ち、時輩の仰ぐ所、今や諫諍の路大いに開けたるも、獻替の官未だ備はらず、恭んで惟れば近侍は實に茂材に藉れり、臣等謹んで閤門に詣り、狀を奏じて陳薦し、以て聞す云云（寄遺補闕岑參狀）、肅宗之に因つて岑參を擧用し、右補闕の官を授けらる、此よりして後、彼の有名なる大明宮早朝の諸作の如き杜・岑二家の唱和極めて多し、本篇の如きもその一なり。

唐の制度、補闕の官は中書省に屬し、拾遺の官は門下省に屬す、同じく供奉・諷諫の事を司ると雖もその出仕する所は各〻相異なり。「聯歩趨丹陛。」と云ふものはその同朝に事ふるを喜ぶなり、「分曹限紫微。」と云

ふものは同朝に事ふと雖も終にその曹署を異にし、晨夕事を共にする能はざるを謂ふなり、紫微はもと帝座を云ふ、唐世、中書省を謂つて紫微とす、「限」と云ふものは參、已に中書省に出仕す、則ち規律の限る所となり、容易に門下省と相往來するを得ざるなり、この二句自他を雙含すと雖も此篇もと杜拾遺に寄するの詩たれば、以下は專ら杜に就いて之を言ふものなりと知るべし、然れどもその下心は仍ほ自己の身上に寓感す、切に一邊に死粘する勿れ。「曉隨天仗入。暮惹御香歸。」身、禁闕に咫尺するを云ふ、然れども拾遺・補闕の官は固より顯要の地に非ず、披廷に出入すと雖もその資格は甚だ卑し、爾我已に老いて此に官す、落花の地に委するを見ては、未だ遲暮の感なき能はざるを免れず、況んや鳥の高く、天外に飛翔するを見ては、何ぞ青雲の表に羨慕を致さゞるを得んや、青雲の字もと二義あり、一は官位の高顯なるに喩へ、一は神仙の世外に逍遙するを謂ふ、此に用ひる所は實に二義を兼該す、蓋し表面にはその高尚の思一日も早く官爵の羈絆を脱して、邱壑・林泉に放浪せんことを思ふの義と爲して、杜が人品を高からしめ、一面には白頭にして纔かに補闕の官を拜し、下僚に屈沈して遽かに榮顯を望むべからざるの義となして、以て自己が況遇を悲しむなり。「聖朝無闕事。自覺諫書稀。」と謂ふも亦此に準じ、杜の身、拾遺の任に居りて而して諫書を呈するの稀なるは、聖明の朝自ら闕遺あるなきに坐すとの意を表面とすれども、實は諫書ありと雖も用ひられざるの慨を致す、何ぞ婉にして多諷なるや、杜が「春宿左省」の詩の結尾に曰はく「明朝有封事。數問夜如何」と、この詩の末二句と對觀して、出語は全然相反すと雖も、命意は實に相通ぜるを見るべし。

杜少陵この詩を得て、乃ち答詩一篇を賦す、亦參考に資くるに足るものあり、曰はく、

窈窕清禁闕。罷朝歸不同。君隨丞相後。我住日華東。冉冉柳枝碧。娟娟花蕊紅。故人得佳句。獨贈白頭翁。

丞相は中書省に居る、故に岑參を謂つて「隨丞相後」と云ふ、宣政殿の兩廡に門あり、東を日華と謂ひ、西を月華と謂ふ、門下省は東に在り、中書省は西に在り、故に杜自ら謂つて「住日華東」と云ふなり、この詩前半は、岑が「分曹限紫微。」と云へるに對して、之に答へ、後半は「白髮悲花落。」と云へるに對して、兼ねて謝意を伸ぶ、而して岑が一篇を主意とせる所の青雲諫書の二事に至りては、故らに避けて一字を提せず、自ら謙りて肯へて此に居らざるの意を不言中に示せるなり。杜の詩、彼に在つては固より到れるものにあらざるも、古人贈答應酬の作、亦一字を苟も下さゞるを見るに足る、之を對照してその語に分寸あるの處を玩味するは、決して無益の事に非ざるを知る、前に引く所の春宿左省の詩は下文に詳見すれば、此に疏剔を加へず。

登總持閣

高閣逼諸天。登臨近日邊。晴開萬井樹。愁看五陵烟。檻外低秦嶺。牕中小渭川。早知清淨理。常願奉金仙。

岑嘉州、慈恩寺の浮圖に登つて云はく、「秋色從西來。蒼然滿關中。五陵北原上。萬古青濛濛。淨理了可

悟。勝因夙所宗。誓將掛冠去。覺道資無窮。」（本書五言古詩ノ條　廿一頁所載）と、この詩の命意、彼と分毫を差せず、則ち彼を解する所以のものを以てこの詩を解せば、瞭として諸を掌に指すが如し、亦何ぞ呶呶を用ひんや、今聊かその作法を疏して評釋に代ふ。

起、承並に閣の高きを領起して、日邊の字兼ねてその帝京に在るを現はし、下の萬井・五陵を開き出す、三四は登覽の平遠、五六は位置の高敞、而して造語は則ち王右丞が「渚中三楚盡、林外九江平。」と同じ、結二句は游寺に由つて佛に奉事せんことを思ふ、亦右丞と同意なり、此種の作、想ふに一時の風氣、人人競つて之を作る、必ずしもその意の相似たるを忌まざるなり。「愁看」の二字着意の在る所、蓋し天子の尊と雖も、究竟五陵一片の煙たるを免れず、無常迅速電の如く露の如し、淨理に歸依せざるを欲すと雖も得べからざるの義なり。

送劉評事充朔方判官賦得征馬嘶

高適

征馬向邊州。蕭蕭嘶未休。思深常帶別。聲斷爲兼秋。岐路風將遠。關山月共愁。贈君從此去。何日大刀頭。

征馬嘶を詠じて以て劉評事が朔方判官に充てらるゝを送るは、猶ほ岑參が胡笳を歌ひて以て顏眞卿の河隴に赴くを送ると一般、然れどもかれは古詩なり、縱横にその意思を暢發するの餘地あり、これは則ち八句に束し、聲律對偶に拘す、その難易固より辨を待たずして明かなり、而してこの題を賦する更に三難あり、何をか三難と曰ふ、馬嘶を詠ずと雖も必ず送別の意を離れざらんことを要す、一難なり、已に送別を離れず、而して又、步步その朔方の地たるを忘れざらんことを要す、二難なり、已に馬嘶を詠ず、則ち泛然馬を詠ずると同じからず、必ず句句是れ馬の嘶聲たらんことを要す、而してこの馬已に征馬たれば、字字亦その嘶聲の征馬たるの意を見んことを要す、是れ三難中尤も難の難なるものなり、能くこの三難を具備して又一意之を串き、始めて稱題の作と爲すことを得、請ふ高達夫（適）が如何んかこの至難の詩を結構せるかを見よ。

征馬にして今や邊州に向はんとす、是を以て蕭蕭として嘶き休まざるなり、邊州の字既に朔方たるを破題す、征馬に非ざれば邊州に向ふべからず、邊州に向はざれば又嘶いて休まざるの理なし、首十字、題面に對して洵に一字を損益すべからざるなり、二聯は正面に嘶聲を寫し、側面に別意を寫す、而してその馬必ず征馬、その別必ず朔方たるを申言す、工妙なること之を言詞に形はすべからざるものあり、「思深常帶別。」は上文「蕭蕭嘶未休。」の意を解釋せるものにして、征馬たるが故に悲思自ら深く常に離別の意を帶び、蕭蕭として人を動かすなり、送別の別意亦箇中に雙關す、「聲斷爲兼秋。」は明かにその嘶聲の凄斷なるを點じ、またこれを解釋して秋聲を兼ぬるが故に、更に一層の悽絶を增すものなりとす、「岐路風將遠。關山月共愁。」は馬にして岐路に臨む、是れ征馬なり、人にして岐路に臨む、是れ送別なり、風に將ち去られて遠きは、その嘶聲なり、關山は征馬の當に跋涉すべき處、而して笛に關山月あり。是れ邊塞の音、その音と共に愁ふ、是

れ征馬の嘶聲、却つて又、朔方の地に切なり。以上征馬嘶を詠じて送別を興ず、語略〻此に盡きたり、因つて七八に至つて劉評事に送るの題位に歸り、その還鄉を眺望するの意を以て終結とす。大刀頭は古樂府の隱語、刀頭に環あり、環・還音通ず、末二句甚だ上文と相隔離せる如くなれども、その實、線索を「關山月共愁。」の句より引く、何となれば古樂府の原辭に「何當大刀頭。破鏡飛上天。」とあり、破鏡は月なり、故に月の字を根據として結尾に大刀頭を用ひたるなり、粗心の者與に此を言ひ易からず。

送鄭侍御謫閩中

謫去君無恨。閩中我舊過。大都秋雁少。
只是夜猿多。東路雲山合。南天瘴癘和。
自當逢雨露。行矣愼風波。

已に謫遷を送る、則ち之を慰め之を勉むの意筆先に在り、「謫去君無恨。」の一句直ちに貫穿して末句に到る、一氣呵成の妙之を天纐に得たるものとす。首句先づ慰意を破る、閩中は古へ南荒の地、然れども我亦曾て之を經過すと云へば、則ちその所必ずしも到り難きを憂へざるなり、次句「我舊過」と云ふもの蓋し亦之を慰むるのみ。前聯十字は正に「我舊過」の三字より生出す、南嶽衡山の陽に回雁峯あり、雁此に到りて敢へて復た南飛せず、閩中は更にその南に在れば、秋時と雖も雁到ること甚だ少し、唯〻所所の林中夜猿の悲聲

を放つて、號叫するを聞くあるのみ、これ蓋し我が曾て親しく見聞する所のもの、君今行く、而してその見聞する所料るに大都是の如くならんのみ、東路の雲山は深く合して見えずと雖も、南天の瘴癘は今幸に和融して激しからず、此際能〻自ら風波の險を愼まゞ、自然に雨露の恩赦に逢うて歸來の日あることを得んと。慰勉交〻至り深情自ら見ゆ、「瘴癘和」の三字を以て雨露を點出し、雨露に由つて思うて風波に到る、句法・字法の細密なる、尤も玩味に値すべし。

使清夷軍入居庸

匹馬行將夕。征途去轉難。不知邊地別。
祇訝客衣單。溪冷泉聲苦。山空木葉乾。
莫言關塞極。雨雪尙漫漫。

清夷軍は居庸關外に在り、題して「入居庸」と云ふは、則ち猶ほ未だ清夷軍に到らざるなり、首二句、薄暮行旅の困難なるを提起し、以下專らその情狀を分疏したり、「不知邊地別。祇訝客衣單。」先づ反語を以て苦寒の神理を虛攝し、次に「溪冷泉聲苦。山空木葉乾。」正面より苦寒の狀を實寫す、上聯は下聯を待つて始めてその解釋を得、下聯は上聯のために大いにその活動を加ふ、上聯はその語甚だ斗峭、下聯はその調甚だ和緩、兩兩相倚つてこの奇構を成す、殊に章法の工を見るなり、一結、首二句に應じ、正に猶ほ未だ到らざる

の意を帶びて收束す、題位に於て必ず此の如くならざるべからざるが故なり。

「不知邊地別。」別は是れ殊別の別斷じて別、離の別と做すを休めよ、この兩句の意、蓋し苦寒の甚だしきを言はんと欲して反跌してその勢を增すもの、空際に向つて一筆を虛描す、靈妙非常なり。邊地の內地と異なる此の如しとは思ひ到らず、却つて是れ客衣の單なるがために苦寒の人に逼るを覺ゆならんと自から訝るなり。用字緊急にして味あり、若し一字を增益せは索然として盡き易し、我、之を釋せんと欲して終に意の如くなる能はず、洵に亦此に坐す、讀者それ自ら細心にその眞味を尋釋せよ。

自薊北歸

驅馬薊門北。北風邊馬哀。蒼茫遠山口。
豁達胡天開。五將已深入。前軍止半廻。
誰憐不得意。長劒獨歸來。

高適、哥舒翰の幕に事へて、書記となり出でゝ邊境を征す、これ想ふに爾時の作、詩意に據れば戰適〻利あらず、失意して歸營せるの作なり、前半は自己が出馬して、正に山口に到り、胡天に向はんとするに邊馬悲鳴するの事を述ぶ、その中既に敗意あり、後半は前軍の諸將敵に破られ歸るもの僅かにその半に過ぎず、此に由つて到底進擊の益なきを知り、悵然として歸り來るの事を述ぶ、敗狀顯然たり。五將は漢の宣帝の時、田廣明等の將五人をして塞を出でゝ匈奴を伐たしむるの事あり、今借り用ひて前鋒の諸將を指稱す、この篇聲律頗る古拗、蓋し亦板中求活の一法、その體を今にしてその聲を古にしたるなり、時に一たび之に倣ふ、固より妨なきに屬す。

醉後贈張九旭

世上漫相識。此翁殊不然。興來書自聖。
醉後語尤顚。白髮老閒事。青雲在目前。
床頭一壺酒。能更幾回眠。

張旭の事、已に飲中八仙歌に見ゆ、この詩醉後贈酬の作、意義自ら了然、復た解を費すべきなし。「漫相識」は泛交多きを謂ふ。「此翁殊不然」は此翁と我との交誼は泛情に同じからずとの義なり。三四、二語は是れ飲中八仙歌中の本事なり。「白髮老閒事。青雲在目前。」この二句舊解少しく謬まるものあり、謂へらく閒事とは書を善くし、酒を好む等の事を指すと、終にこの句を讀んで「白髮老閒事」となし、書酒に耽りて老に到るの義となしたり、知らず閒事とは唐時の俗語「ムダコト」の義より一轉して之を「不經意」の場合に用ふ、宜しく「白髮老閒事」と讀み、白髮種種として老將に至らんとするも毫も意に介せずとの意なりと釋すべし。彼の韋蘇州が「司空見慣泝閒事。斷盡筵前刺史腸。」（此詩は劉禹錫の作なり。）と云ふも正に此

と同例にして彼は杜韋娘が美貌を述べ、司空は見慣れたれば全く介意せざるも、筵前の刺史は始めて相見しが故に、ために柔腸を斷ち盡せりとの義なり、以て余が說の强ひて異を立つるに非ざるを證すべし。又「青雲在目前。」の句を解して、青雲の高位目前に在れども、羨む所無きを言ふとすれども、これ亦甚だ辭を費したり、曩に述べたる如く青雲に二義あり、必ずしも榮顯要路の義にのみ限るべからず、神仙逍遙の樂目前に在り、今こそ床頭一壺酒に沈醉すれども、いつかは登仙自在の域に到り得べしとの意なりと見るを可とす、然らざれば七八に向つて一貫の氣脈を缺けり、而してその裏面には仍ほ榮顯の意ありて、終に醉眠を以て終るものに非ずとの義を隱躍せしめたるものなるは固より說明を待たざるなり。

高適が詩は氣質を以て自ら高うし、胸臆間の語多しと傳に見ゆ、此に錄せる數首は所謂胸臆間の語是れなり、初唐は論なし、則ち之を王・孟の諸家と並讀するに全然として同じからざるものあり、杜少陵が五律縱橫、排奡を整密の中に藏して、獨り畦徑を闢けるものに視れば、固より洪纖の別ありと雖も、鞭を執つて以て之が先驅と爲るは適に於て蓋し餘あり、その功偉ならずと謂ふ可けんや。

登兗州城樓　杜甫

東郡趨庭日。　南樓縱目初。　浮雲連海岱。
平野入青徐。　孤嶂秦碑在。　荒城魯殿餘。
從來多古意。　臨眺獨躊躇。

少陵の五律屈伸變化、縱橫意の如く讀者をして測ること莫らしむ、而して兗州城樓の一首は、獨り謹嚴を以て稱せらる、故に杜律を學ぶものは多く、此を取つて正式と爲せり、明代七子の刻意摸倣する所のもの、亦端に此種に在りと謂ふも妨げなし、夫れ謹嚴の反は必ず拘定に入る、一たび拘定して神氣索焉たり、是れ七子が譏を膚廓に貽す所以なり、少陵がこの詩結構の謹嚴なるは實はその壯年の作たるが故にして、固より初學の津梁と爲すに足るものなりと雖も、單に此を以て少陵の精髓なりとし、變化不測の作を擧げて之を變體に置くときは、刻舟求劍の譏を速かざる少し、尤も學者の注念すべき所なり。傳に據るに、少陵、玄宗の開元二十五年に當つて、年甫めて二十有六その父閑、時に兗州の司馬たりしを以て之を省せんため齊魯の間に游べり。詩集蓋し此時に昉まる、而して本篇筆を提げて先づ「東郡趨庭日。」と曰ふ、東郡は秦時の置く所にして、卽ち兗州に屬せり、則ち兗州省親の時の作たるを顯知すべし、然ればその獨り能く謹嚴なる所以、亦縷辨を須たずして知るに足るのみ。

この篇全篇の關目は「縱目」「多古意」の字眼に在り、縱目は是れ經、懷古は是れ緯、以て一詩の結構を組成し、末「臨眺」の二字を以て仍ほ縱目の上に繳還す、次第秩序井然として紊れず、謹嚴と稱する所以なり、二聯は古來之を解するものみな能くその意を得たり、李夢陽は曰はく前景は寓目、後景は感懷なりと、沈德潛は曰はく三四は形勢を寫し、五六は古跡を寫す、故に其の下恰も好し懷古に接すと。浦起龍は曰はく三四は橫說して縱目を緊說し、五六は竪說して古意を轉出す、局勢開拓の妙を得たりと。この三なるもの、語を出す同じからざるもその見る所は則ち一なり、之を三復して以て全詩と對照し、細かに玩味を加へば詩法眞に悟り難からず、故に特に之を開列す。

海は東海なり、岱は岱嶽なり、以て青州・徐州に對す、一望千里の觀あり、嶧山の北に絶巖あり、秦の始皇、禮を魯に觀てその上に登り、李斯に命じて大篆を以て嶂壁の間に勒銘せしむ、是れ「孤嶂秦碑在。」の事、「荒城魯殿餘。」と云ふものは、所謂魯の靈光殿、巋然として獨り存すと云ふ是れなり、俱に齊・魯間の物たれば、兗州城樓より望見するに足れるなり、一結の意自ら明、復た解釋を煩はさず。按ずるに杜審言が襄陽城に登るの詩に云はく「旅客三秋至。層城四望開。楚山横地出。漢水接天廻。冠蓋非新里。章華只舊臺。習池風景異。歸路滿塵埃。」と結構極めて相類似す、故に趙汸は少陵のこの作實に其祖に基づくと謂へり、亦以て我が曩に少陵の五律は多く祖法より變化して出づと云ふもの決して妄謬に非ざるを證すべし。

房兵曹胡馬

胡馬大宛名。　鋒稜瘦骨成。　竹批雙耳峻。
風入四蹄輕。　所向無空濶。　眞堪託死生。
驍騰有如此。　萬里可横行。

高都護驄馬行に於て「此馬臨陣久無敵。與人一心成大功。」と謂ふ、而してこの詩亦云はく「所向無空濶。眞堪託死生。」と、馬の精神・采思を寫す、奕奕として生きんと欲す、眞に控前絶後の作なり、詠物家區區とし

て摸寫體貼を事とし、刻畫して、皮に粘し、骨を帶び、以て自ら工なりとす、何ぞ俱に箇中の妙機を語るに足らんや。この詩、題面の正位は是れ房兵曹の胡馬なり、一二句之を提起し、三四はその英爽を言ひ、五六はその功能を言ふ、七八は房兵曹この良馬あり、以て萬里に横行して功を立つべきを言ひ、馬を詠じて、終に之をその人に歸したり、然れども馬の英爽は卽ち房兵曹の英爽なり、馬の功能は卽ち房兵曹の功能なり、前半專ら馬の骨相を寫して、而して房兵曹の骨相自ら見え、後半兼ねてその性情に及んで、而して房兵曹の性情從つて知るべし、この首亦是れ少陵が年少氣盛の時の作、その房兵曹胡馬を寫す所以のもの、適〻借つて以て自己の爲に寫照するのみ、故に「所向無空濶。眞堪託死生。」の語、一幅の血性を顯出して、字字凌厲、その鍊句の奇峭なる、一氣飛舞して下ると浦二田は評せり。

批は斜削の義「竹批雙耳峻。」とは耳の尖にして鋭なる竹筒を削れるが如きを云ふなり。拾遺記に云はく、曹洪が乘ずる所の馬一たび走るときは唯〻耳中の風聲あるを覺え、脚地を踏まざるに似たり、時人之を乘風行と名づくと、是れ風入五字用ふる所の典なり、「所向無空闊」は猶ほ罅隙の乘ずべき無しと云ふが如し。「驍騰有如此」の一句、上六句を束住し、下句忽ち開いて房兵曹の身上に推し到る、兎起鶻落の妙あり。要するにこの作孤情迥出し、健思潛捩す、作者の氣骨を相るに亦萬里に横行すべし、文家の所謂沈着痛快なるもの、蓋しこの上に出づるなからん歟。乾隆の御批その妙緒を抽繹する此の如し、故に余之に贊同し肯へて一字を易へずと云爾。

春宿左省

花隱掖垣暮。　啾啾棲鳥過。　星臨萬戸動。
月傍九宵多。　不寢聽金鑰。　因風想玉珂。
明朝有封事。　數問夜如何。

少陵已に拾遺に官す、拾遺は門下省の屬官、門下省は掖廷の左にあり故に之を左省と曰ふ、詳かに岑參が詩中に見えたり、是れ春夜宿直の作、故に首句先づ花の字を點して、以てその春たるを提起し、而して隱、而して暮、正に是れ昏黑辨色すべからざるの光景、啾鳥の棲に歸るの聲を聞く、確かに掖垣中の情狀なり、已にして夜に入る、「星臨萬戸動。月傍九霄多。」十字、但、是れ寫景と雖も、而して帝居高迥の氣象全く已に繪出す、左省の春夜、是に至つて盡きざるの景なし、因つて後半は專ら宿直に貼して說き、反つて「不寢」の二字を用ひて忠勤國の爲にするの意を翻出す。「聽金鑰」と云ふものは天門鎖鑰の開啓するを待つなり。「因風想玉珂」は風聲を聽いて恍惚中已に早朝の珂馬あるかと疑念するの意なり、宿夜假寐して旦を待つの情態畢く筆底に露はれたり、七八に至りて卽ちその「不寢」の本意を逗出し、以て自己が夙夜に奮勵して肯へて暫くも怠忽せざるの意を見る、諫臣の心事只當に此の如くなるべきなり。唐時職官の制を按ずるに、拾遺補闕の官は已に御前に供奉して諷諫するの事を主どれば、大事は之を廷諍し、小は則ち封事を上るとあり、然れば七句は是れ拾遺が當行本色の語、之を他處に假借し得ず、故に尤も剴切なり、胡應麟、この二句を以て杜詩五律結句の最上なるもの丶中に數へ、矯健振勁にして錚錚たる細響に非ず（詩藪）と謂ふは當れり。

暮色に由つて夜景、夜景に由つて不寢、不寢に由つて明朝、語勢順流して下るが如し、而して結句仍ほ夜の一字を點す、明かに知る是れ夜直の詩、是れ早朝の詩に非ざるを、若し妄人之を學べは則ち全然題位を把つて忘了す、正に是れ使ひ得ず。

自來箋釋家多く附會の說を作して卻つて詩の微旨を得たりと誇稱す、其墮殊に笑ふべし、本篇三四の句の如きは純然たる皇宮春夜森肅の景語なり、然るに之を解して民、勞するときは則ち星動く、月は陰象に屬すれば、女子小人の時を得て進むに喩ふと云ふものあるに至れり、沈確士極めて之を詆り、峭刻の深心を以て詩人敦厚の旨を測るものなりとす、善いかな言や。

秦州雜詩

鳳林戈未息。　魚海路常難。　候火雲峯峻。
懸軍幕井乾。　風連西極動。　月過北庭寒。
故老思飛將。　何時議築壇。

杜少陵が秦州雜詩は、渠が五律中實に第一等の鴻製にして、縱出橫飛今を涵し古を茹す、詩凡そ二十篇、大抵家國身世の感を敍べ、事に卽き意を命じ景に觸れ文を成す、感ずる所一事に非ず、その作亦一時に非ずと雖も忠誠蘊結し情文傍暢す、乃ち一串の氣ありて能く之が條理を成す、斷じて右劃左裂してその神理を阻喪

せしむべからず、玆に選する所は、則ちその第十九章にして、專ら當時吐蕃の警洊に至るがためにして發するものに係る、僅かにこの一章を錄す、一欄固より美なりと雖も、豈に以て全鼎の味を領略するに足らんや、乃ち詞采を以て論ずるも、前賢が劈立萬仞の勢ありと做して、稱贊口を措かざる、彼の「莽莽萬重山。孤城山谷間。無風雲出塞。不夜月臨關」（秦州雜詩）の諸作の如き擧げて之を不問に附す、選者の肺腸實に解すべからざるものあり、然れども二十篇の妙緒一一之を此に抽尋する能はず、暫く仍ほ本篇に就いて之を解析す、讀者唯〻秦州雜詩の變化多端なる、獨りこの一篇を以て之を概すべからざるを知らば則ち可なり。

少陵の秦中に行くは、肅宗乾元二年の事にして、房琯を救ふの一事、肅宗の意を拂ひたるがためと、加ふるに關輔饑饉に瀕し、その生頗る艱なりしが故とを以て終に官を棄てゝ之に赴く、實に已むを得ざるに出でたるなり、且つ房琯が事の因由を推せば、全く陳陶斜の一敗地に塗れしに出で、この敗あるを致せしは强胡中原を攪擾して唐室播遷の禍を蒙りしに職由す、況んやこの年春三月、九節度の師鄴城に潰え、萬匹の戰馬僅かに三千を存す、身窮境に淪するの時に當りて家國の慘警偏に又此の如し、豈に痛惋悲憤慨を胡戎に致さゞるを得んや、鳳林は關の名、黃河の側にあり、もと中原の地、而してこの時已に吐蕃に併せらる、魚海は河州衞の西にあり、卽ち吐蕃の國界なり、「戈未息」は是れ兵戈一層、「路常難」は是れ險地一層、前聯は卽ち險地行軍の難を狀す、是れ兩層を合して之を承接したるなり、烽火の擧る所は雲峯殊に峻しくして人馬攀援に苦しみ、懸軍の入る所は幕井全く乾いて一軍飢渴に逼る、その我が爲に不利なる往往此の如し、是を以て風、西極に連なつて悲聲盡く動き、月、北庭を過ぎて殺氣正に寒し、西極・北庭とは吐蕃を指斥するなり、風動き月寒し、慘

憺滿目殆ど名狀するに忍びず、故に中原の故老は一日も早く漢時の飛將車の如きを得て壇を築きて拜して大將と爲し、この大亂を掃蕩せんことを翹望して止まずとなり。この時郭子儀、亦讒を蒙り罷めらる、故に一說に、飛將を以て子儀に比し、以てその再用せられんことを望むなりと解す、是れ或は當に然るべきなり。要するに亂を憂ひて以て良將を思ひ國家を念ふの概は至性中より出づ、少陵の詩の貴むべき所此に在り。

送遠

帶甲滿天地。胡爲君遠行。親朋盡一哭。
鞍馬去孤城。草木歲月晚。關河霜雪淸。
別離已昨日。因見古人情。

驚心動魄の語、筆下乃ち風雲色を變ずるを覺ゆ、是れ何等の起手ぞ、此種の作、復た起承轉合を言ふべからず、唯〻その沈鬱頓挫の處を玩味して少陵の況遇と當時の形勢とを想像するに餘あらば則ち可なり。夫れ帶甲天地に滿つ、往くとして干戈ならざるはなし、此際に當つては惴惴として骨肉相倚らんことを圖るも仍ほその失散を保すべからず、之を如何してか忽ち相別れて遠行せんとするや、嗚呼此の如きの天地にして而して又この別を成す、その再び相見るの日は千萬之を生前に望むべからず、親朋たるもの寧ろ盡く慟哭せざるを得んや、乃ち之をしも顧みずして、鞍馬蕭然獨り孤城を去らざるを得ず、その胸中の悲抑、又如何ぞや。

看よ他が層々寫し來る飄離遠別の情況、眞に聲淚俱に絶するの想あるを。第一句より此に到りて其詞愈〻促迫、其思愈〻痛切、殆どその絶頂に達す、忽ち筆を轉じて、別時の景物を開出し終に結ぶに別後の相憶を以てす、其語漸く緩にして其悲益〻深し「別離已昨日。」は江淹が擬古別離に「送君如昨日。簷前靄已團。」の句あり、因つて此を引用して別離の情緒古今一轍なるを見はしたるなり。

題して送遠と曰ふ、然れども「別離已昨日。」の語に視れば、是れ既に別るの後、詩を作つて此に贈るなり、則ち前半は別後より送時の情狀を追敍したるものと知るべし、浦二田の「心解」獨りこの作を以て少陵人を送るの詩に非ず、是れ自ら送るの作なりと謂ふ。頗る創解に屬す、前半の感慨悲歌滴滴、血淚を帶ぶるを見ればたとひ人を送るの詩と雖も、實は他人の酒觴を借つて自家の磊塊に灑ぎ、以て滿腔の悲鬱を一吐したるものなるは疑無ければ、直ちに看て自送の詩と做すも何の不可かあらん。故に予は二田のこの解能く詩意を得たるものなりと斷言するに憚らず。但、彼、結末二句に於て仍ほ自送の解に拘泥し、故人と曰はずして、古人と曰ひたるは、今時人情の冷落、古人の親誼に及ばざるを慨したるものなりと云へるは可笑の說なり。箋註に由つて詩を言はんとするものは、宜しく擇ぶ所を知るべし、若しその一端の偶〻深く會心の處あるがために盡く之に信據するときは、大謬に陷らざるもの鮮し、尤も心すべき事なり。

題玄武禪師屋壁

何年顧虎頭。滿壁畫滄洲。赤日石林氣。青天江海流。錫飛常近鶴。杯渡不驚鷗。似得廬山路。眞隨惠遠遊。

玄武は山の名にして、蜀の梓州に在り、以下は、卽ち少陵入蜀後の作なり。玄武禪師は想ふに玄武山中の高僧、その屋壁に題すと云ふは卽ち僧房壁上畫がく所の山水の上に題するなり、上半は畫を寫し、下半は禪師を帶んで之を言ふ、而して結二句は作者自ら道ふなり、通篇題畫に就いて意を命じたれば禪師を說き、自家を說くも總べて畫中より筆を着す、一にして纖ならず奇險にして能く渾融、故に讀者遽かにその工と奇險とを覺えず、洵に超妙の作なり。

已に題畫より命意す、故に首句先づ畫師の姓字を點す、而してその上斗然として「何年」の二字を着け、この畫師の姓字をして、流走飛舞して以て下文の氣脈と相串下せしむ、今人の詩稍〻虛字を陳排するものあれば、則ち曰はく斡旋なりと、知らず所謂斡旋とは此種活動の處に於て、始めて之を稱することを得、徒らに虛字を以てその字數を足すもの〻如きは、是れ死文のみ、是れ泛濫のみ、何ぞこの美稱を僭することを得んや。顧虎頭は晉時の名畫手、名は愷之、虎頭はその小字なり、少陵許八拾遺が江寧に歸るを送る詩の篇末に「虎頭金粟影。神妙獨難忘」の句あり亦顧愷之を指す、宋時箋詩のものこの義を曉らず、或は虎頭は僧相なりと云ひ、亦維摩の相なりと云ふ、誕妄笑ふべし、故に藝苑雌黃援いて以て曉談に充てたり。「滿壁畫滄洲。」明かに壁上畫がく所は是れ海山平遠の景、一本滄洲を「瀛洲」に作るは非なり、王荊公が詩に

「畫史雖非顧虎頭。還能滿壁畫滄洲」とあり、彼、正にこの詩を用ひたり、以て證とすべし。

「赤日石林氣。青天江海流。」二句は是れ滄洲畫中の遠趣、林巒返照の色、波濤接天の勢、自ら十字中に活現す、是れ詩を以て畫の神理を奪ふものなり、「氣」の字尤も妙、本來は當に「色」と謂ふべし、然れども若し色と謂へば卽ち唯〻敍景の語にして題畫の作に非ず、故に略〻一字を換へて兼ねて、畫力の活動を見る、何等の工思ぞ。

「錫飛常近鶴。杯渡不驚鷗。」は錫飛・杯渡並に高僧の故事、鶴鷗俱に畫中の物、而して常近と云ひ不驚と云ふ、分明に言下に於てその畫たるを鈎醒す、この二句所謂禪師を帶んで之を言ふものにして、禪師が平素この屋に坐臥し、壁上滄洲の畫に對して錫を鶴邊に飛ばし、杯を鷗外に浮ぶるの興あること、猶ほ宗少文が臥游の趣に彷彿たるべしとの意なり。梁の武帝の時、高僧寶誌、白鶴道人と俱に潛山の風景を愛してその麓に卜居せんとす、武帝因つて命じて各〻物を以て之が表記を爲さしむ、誌公は錫を以てし道人は鶴を以てす、鶴先づ飛んで山麓に至り將に止まらんとするに、忽ち空中飛錫の聲を聞く、錫遂に鶴に先だつて山麓に卓立したり、因つて寶誌をしてその所に室を築かしむ、是れ飛錫の故事、而して其事又鶴と密切の關係を有す、點化神に入れり。又、西域の聖僧に杯渡比丘あり、その名姓を知らず、嘗て一大木杯を海上に浮べて之に乘じ、風棹を借らずして行くこと飛ぶが如し、因つて之を杯渡と名づく、是れ杯渡の故事、而して其事又恰も滄洲渺瀰の景に協へるを以て、兼ねて列子が海客隨鷗の語を參用す、湊合尤も奇なり、この二句に由つて畫と禪師と並に絕頂に超ゆ、復た着詞すべき所なし、故に七八は作者自身の興會を述べて而して雙雙之を收束したり。

晉の惠遠法師、廬山の東林寺に住して蓮社を結ぶ、此を借つて以て禪師に喩へ、自家の今日禪師と相見て日夕縱橫するは眞に惠遠に隨游するの想ありと謂ふ、卽ち禪師を收束せるなり、而して妙は「似得廬山路」の句仍ほ畫中の光景より抽象して出したるに在り、蓋し所謂赤日石林の狀、宛然として廬山の路を得たるに似たりとの義にして、勢を趁うて壁畫を收束せり、畫に於ては之を「似」と云ひ、人に於ては之を「眞」と云ふ、亦造語の細密にして一泛構なく、斷じて意に任せて掃刷し去りたるものにあらざるを見るなり。

玉臺觀

浩劫因王造。平臺訪古游。綵雲蕭史駐。
文字魯恭留。宮闕通羣帝。乾坤到十洲。
人傳有笙鶴。時過北山頭。

玉臺觀は唐の高祖の季子滕王元嬰、閬州の刺史たりしとき造築せる所の道院にして、閬州北山の巔に在り、上に滕王亭子あり、是れその游醼の所、少陵此に游び題詠する所各〻二首あり、その一は皆七言律詩なり。七律は專ら觀の壯麗を述べ、この詩に到つて進んで滕王を帶言したり。七律本篇を評釋するに當りては、頗る參核を資くるに足るものあり、而して滄溟七律の選終に此に及ばざれば彼此對照を爲すに由なし、因つて先づ之を左に錄す。

中天積翠玉臺遥。　上帝高居絳節朝。
遂有馮夷來擊鼓。　始知嬴女善吹簫。
江光隱見龍鼉窟。　石勢參差鳥鵲橋。
更肯紅顏生羽翼。　便應黄髮老漁樵。

觀の高處に在りて壯麗を極めたるの狀この詩に由つて之を想像すべし、故に本篇にも亦「宮闕通翠帝。乾坤到十洲」の句あり彼此互に注脚とするに餘あり、亦七律中「嬴女吹簫」を點じ、本篇又蕭史の事を言ふ、唐仲言因つて之を疑うて、玉臺觀は恐らくは滕王がその女を携へて朝眞したりし所ならんと謂へり、この事史傳に攷ふる所なしと雖も、唐時宗室の女子は多く女道士と爲るの例、諸書に散見すれば、理に於て當に然るべきの事なり、況んや七律の轉句「紅顏」の字ありて、本篇の結末「笙鶴」の語隱諷する所あるが如きより考察するも、この觀の女道士の居たるは疑なきが如し、因つて唐仲言が臆解を以て、姑くその事實を得たるものとして之に從ふ。

首二句は點題にして三四は觀中の遺事、五六は形勢に就いて虛描し、七八仍ほ人地より收合せり、「浩劫」は佛語にして無窮の世を言ふ、道書にも亦元始浩劫の語あり、本篇用ひる所は之を古昔の義に取りたり、「因王造」とは觀は滕王の造する所なるを以て斯く言へるなり、平臺は梁の孝王宮觀の名、同じく王子の建築に出づるを以て借つて玉臺觀を指稱したり、二句その人その地并せて之を領起す、故に點題と云ふ。簫史の故事は人の徧く知る所、魯恭王は漢の王族にして盛んに宮室を治め、終に孔子の舊宅を壞ちて以てその居を廣めんと欲す、中に鐘磬琴瑟の聲あるを聞き、驚いて之を搜檢するに終に壁中に於て古今尙書及び論語を得たりと云ふ、是れ四句用ひる所の典なり、滕王の女已に女道士たらば、鳳凰を引き彩雲に駕するの蕭史來つて、この山巔に駐るの事あるは、必然の數にして、而して「文字魯恭留。」と云へば滕王が手澤の珍書の仍ほ觀中に現存したりし事亦推知すべし、是れ所謂遺事なり。

觀の崇麗なる一に七律の言ふ如くなるときは、則ち宮闕縹緲として直ちに上帝の座に接し、赤帝・白帝等五方の翠帝日夕其中に來往するあるべく、此に倚つて望を騁するときは乾坤眉睫に聚まりて遠く十洲の神山を延攬するに足るべし、所謂形勢に就いて虛描するもの、曰はく翠帝、曰はく十洲、俱に是れ想像の詞、實に其事あるに非ず、卽ち虛描是れなり。

七八、仍ほ人地より收合するものは、笙鶴は是れ人、北山は是れ地、以て起手と相首尾するを謂ふなり、この句故らに「人傳」の二字を用ひて敢へて斥言せざるは、大いに微詞あるものゝ如し、想ふに觀已に女道士の居にして、防閑密ならず、時に男子の媟近するものあり、是を以て隱に之を譏諷するか。唐時の貴主自ら請うて出家し而してその行大いに修まらざるは、歷歷として徵すべきものあり。則ち武則天・楊太眞の如きもその初はみな曾て女道士たりしものなり。笙鶴は周の靈王が太子晉の故事、亦借つて以て滕王に一暎せしめたるなり。

觀李固請司馬題山水圖

方丈渾連水。　天台總映雲。
人間長見畫。

老去恨空聞。　范蠡舟偏小。　王喬鶴不羣。
此生隨萬物。　何處出塵氛。

少陵無韻の文は艱澁鉤棘にして殆ど讀むべからざるものあり、本篇の題目の如きも亦その類にして意義太だ明晰を缺けり、從來說くもの多く、讀んで「李固請司馬が題せる山水の圖を觀る」と爲せども、本集實は「題」を「弟」に作れり、故に浦二田が心解題下に於て、一請字を着くるを觀れば當に是れ新たに畫がきしものなるべしと注記したり、この說を信とせば、則ち宜しく「李固が司馬弟に請へる山水の圖を觀る」と讀むべし。要するに詩は唯、山水の圖を觀るを以て意を命じたればその餘は必ず穿鑿せず、之を不解に附する亦可ならんのみ。

本集この題凡そ三首あり、細かに之を攷較するに、圖は蓋し海上仙山を畫がきしものにして、詩の着意は之を觀て高隱の思を動かし、自家の況遇上に感を發して、世亂を厭ひ、仙游を慕ふと云ふに在り、而して玆に選する所はその第二首にして、專ら畫に題するの一邊に就いて言ひたるものに係れども、仍ほ處々にその本意を見はしたれば、必ず先づその本意を領知し置きて然る後之を讀むべきなり。

首二句、先づ畫たるを言はずして、單に畫中の山水を拈出して起勢を成せり、方丈天台水に連なり雲に映じ茫淼として涯涘を見ず、卽ち已に望むべくして、卽くべからざるの意あり、第三句に到つて始めてその畫たるを點醒し、之に接するに久しく方丈天台の勝概を聞くも、身未だ曾て親しくその實境に臻る能はず、徒らに畫を見て神馳に勝へざるの意を以てす、而して曰く「人間」、曰く「老去」、轉た風塵漂泊の恨に堪へざるものあり、以て末二句のために遙線を牽けり。

舟鶴の二物、亦畫上の有る所、因つて此を借つて以て仙游の路を尋ねんとするの意となし、隨手之を范蠡の五湖、王喬の緱山に綰合せしむ、落想頗る工なり。「偏小」「不羣」の用字亦不言の中に畫たるを點醒するの意あり、王喬は太子晉の字、玉臺觀の篇末に用ひる所と同一の故事なり、結二句は跌宕の筆を以て之を飛開し、此生已に俗に入れば萬物に隨つて羈絆せられ、復た仙游の路を得て、この塵氛の濁を汙脫出するに由なきを寄慨す、此に至つて前聯の意愈〻明白と爲り、作詩の本意覺えず畢露す、沈痛の筆なり。

禹廟

禹廟空山裏。　秋風落日斜。　荒庭垂橘柚。
古屋畫龍蛇。　雲氣生虛壁。　江聲走白沙。
早知乘四載。　疏鑿控三巴。

方輿勝覽に禹廟は忠州臨江縣南岷江を過ぎて二里許の處にありと見ゆ、この作結體極めて嚴整にして、而も雷碌砰礌の勢あり、禹が治水の大業「江聲走白沙。」の五字に由つて千秋の下猶ほその汨天襄陵の狀を想見せしむ、此等の筆力、知らずその重厚幾萬鈞なるを。首、「空山裏」の三字已に中聯の景物を胚胎し、自

ら神靈森爽の氣の紙表に溢出するを覺ゆ、三四は是れ廟中の實景、而して自ら大禹の事に切なり、何をか大禹に切なりと謂ふ、尚書の禹貢に「厥の包は橘柚」の語あり、又孟子、禹が事を述べて「蛇龍を驅つて之を菹に放つ」（滕文公下）と見えたり、故に宋の孫莘老（覺）極口之を擊論し、その能く經語を用ひたるを贊揚したり、然れども詩の妙は決して經語を用ひたるに非ず、全く之を運化渾融して寫景の語と做しその禹が本事を用ひたるも有意無意の間に在りて所謂鏡花水月象模すべからざるの處に在り、故に乾隆帝批して學者此を知らば乃ち、使事の三昧法を得んと謂ふ。この二句を言ふもの多しと雖も、その竅要に中れるはこれを以て最とすべきなり、五六是れ廟外の實景、而して雲氣散ぜず、禹の神靈儼然として在るが如く、江聲滾滾、禹の大功居然として見るべし、二句は正に虛描を以て神理を見る、李商隱が聖姑祠の一聯「三春夢雨常飄瓦。盡日靈風不滿旗。」はこの神理を學んで未だ到らざるものと謂ふ可き歟、末二句は「江聲走白沙。」一句の脈理を承けて禹功に就き之を收束す、その意は蓋し禹が四載に乘じて以て水を治せしは、固より早く知る所なれども、その疏鑿の大觀に至つては必ず親しく三巴に到りてその實際を目擊するに非ざればその絶代の偉業たるを知る能はずとの義なり、この時、少陵正に蜀を出で峽水を下りて、荊南の地に赴かんとす、故に禹の功を贊揚するの中に於て略〻一たびその意を露はしたるなり、四載とは禹治水の時、山には樏に乘じ、泥には輴に乘じ、水には舟に乘じ、陸には車に乘ず、之を四載と謂ふなり。

二聯俱に實景を寫して、而して一は禹の事に切に、一は禹の功を見る、此等の工夫化境に臻らざれば悟る能はず、況んや之を作るをや、嚴滄浪（羽）詩を以て禪に喩ふ、然れども禪家の奧義果して能くこの微妙の諦を具するや否や、論じて此に到れば余は窃かに詩理の高妙禪理の上に超ゆと謂ふ、未だ當否を知らず。

旅夜書懷

細艸微風岸。危檣獨夜舟。星垂平野闊。
月湧大江流。名豈文章著。官應老病休。
飄颻何所似。天地一沙鷗。

起筆二句夜泊の景を寫す、而して獨夜舟の三字卽ち書懷の根なり、三四蒼茫の景に由つて曠遠の懷を開く、その著語の雄傑なる、所謂洪鐘纖響なきもの、當にその眞力瀰滿せるに由つて一たび筆に涉れば乃ち爾く寫し得て廣大幾ど能く測ること莫きなるべし。劉辰翁は曰はく、等閒の星月、一の「湧」字を著けて氣象寔然として同じからずと、これ能く鍊字の苦を知る、然れども余を以て之を觀るに「垂」の字の妙なる、正に「湧」の字に亞せず、一本「垂」を「隨」に作る、氣味索然たり、故に本集に就いて訂正を加へたり、後半は書懷の正文、而して結二句仍ほ夜泊の卽景を離れず、以て起承と相表裏せり、「飄颻」「沙鷗」獨夜舟より生出す、喫緊自然、筆筆高老を極めたりと稱すべし。

「名豈文章著。官應老病休。」杜老の精神二句に活現す、胸に經濟を懷く、故に名豈に文章を以て著はれんやと云ふ、而して言下には則ち名終に文章を以て著はるゝを得ざるは、胸中の經濟を展放すべき所なきに由るとの意ありて、深く自ら況遇を傷むなり、少陵が官は事を論じ忌に觸れしに由つて罷めらる、而して一

筆もこの意を露はさず、老病の身なるを以て固より應に休むべしと云ふ、何ぞ溫厚なる是の如きや、風人の旨是を極則と爲す。

「細草微風岸。危檣獨夜舟。」二句もと寫意に入らず、然れども語次自然に悽絶なるものあり、細と云ひ微と云ふ、暗に「官應老病休。」の謙抑の詞と相照發す、則ち危檣獨舟、亦、自ら世路危險を慨するものと做して解するを得べし。此の如く細心に看去れば蕉根を嚼むが如く、愈〻之を剖析して愈〻之が神味を覺ゆ。若し杜を學んで徒らにその疎放雄闊の字句を模するに止まらば、語甚だ似たりと雖も一覽して盡き易し、近世口を開けば則ち曰く老杜・老杜と、而して能くこの病を免るゝものは絶えて無しと謂ふも過當に非ず。

「官應老病休。」一本應を因に作る、意義に於て大差なきも「應」の字の婉曲なるに如かず、故に之に從ふ。

船下夔州郭宿雨溼不得上岸別王十二判官

依沙宿舸船。石瀨月娟娟。風起春燈亂。
江鳴夜雨懸。晨鐘雲外溼。勝地石堂煙。
柔艫輕鷗外。含悽覺汝賢。

船に乘じて夔州に下らんとし、途次雲安の郭外に夜泊す、偶〻驟雨の至るに逢うて岸に上り、その友に見る能はず、因つて詩を作つて之に寄せ告別すと、是れ仇兆鰲本題を解釋するの言なり、此に據るときは「船下夔州郭宿雨溼不得上岸別王十二判官」と讀むを可とす、この詩の意は題面已に盡きたれば別に箋疏を成すの用なし、唯〻その層次の密と線索の清なるを玩すれば則ち足れり。

沙に依りて舸船を宿す、是れ郭宿の光景なり、石瀨月に映じて清輝娟娟たり、是れ先づその未だ雨ふらざる以前の景、一筆を寫して以て後面の雨溼を反跌し出せるなり、既にして風起れり、舟中の春燈之がために亂搖せらる、是れ雨將に到らんとするの兆なり、既にして果して雨至る、雨聲、江聲と相雜りて、竟夜騷然たり、天明に至つて猶ほ未だ止まず、故に雲外の晨鐘猶ほ餘濕を帶べり、雲外猶ほ然り地下は知るべし、以て岸に上るを得ざるを形出す、天已に明、乃ち郭中を望見すべし、雨意猶ほ濕ふ、故に唯〻これを煙霧中に見る、而して神は早く注いで王十二判官の處に到れり、是を以て結二句詩を寄せて遙かに告別するの意を以て一篇の收束とす、その柔艫・輕鷗は首句の依沙宿船を帶んで之を言ひ、兼ねて船の曉に乘じて發するの狀を述ぶ。含悽とは正に江淹が所謂黯然消魂なるもの、覺は猶ほ憶と言ふがごとし、王十二判官は蓋し曾て杜がために恤貧濟窮の勞ある者、故にその賢德を追憶して今日面別する能はざるを惜しむなり、その中又自己は棲々として寧處するに暇あらざるに、王は此地に宦して優游自適することを得たるを羨むの意を含みたるものと知るべし。

登岳陽樓

昔聞洞庭水。今上岳陽樓。吳楚東南坼。

乾坤日夜浮。新朋無一字。老病有孤舟。
戎馬關山北。憑軒涕泗流。

劉辰翁は曰はく、氣は百代を壓す、五言雄渾の絶たりと、唐子西は曰はく、岳陽樓を過ぎて子美の詩を觀るに、四十字に過ぎざるのみ、氣象閎放にして涵蓄深遠なり、殆ど洞庭と雄を爭ふ、所謂富なる哉言やなるもの是れなり、杜詩は小なりと雖も大なり、餘詩は大なりと雖も小なりと。

蔡絛（字は約之、號は百納居士）は古來洞庭岳陽の名句「水涵天影闊。山拔地形高。」「四顧疑無地。中流忽有山。」「鳥飛應畏墮。帆遠却如閑。」等の句を擧げ、孟浩然に到つて氣象雄張にして衆作を壓倒するに足る、而して杜子美の詩に至つては氣象更に又然らず、「吳楚東南坼。乾坤日夜浮。」と云ふは正に少陵が胸中に幾雲夢を呑むやを知らずと謂へり。

苕溪漁隱、詩眼の言を引いて云ふ、老杜の詩は凡そ一篇みな工拙相半ばす、古人の文章類ね此の如し、みな拙なるは固より取ることなし、然れどもそれをしてみな工ならしめば則ち甚だ峭急にてし古氣なし、この詩「吳楚東南坼。乾坤日夜浮。」既に高妙にして力あり、洞庭の大を言ふ此に過ぎたるは無し、後來の文士力を極めて之を言ふも終に限量あり、益〻その及ぶべからざるを知る。而してこの詩先づ此の如し、故に後面に「親朋無一字。老病有孤舟。」の句あり、相配して恰も好結構を成す、若し前兩句なくしてみな後兩句の如くならば健なりと雖も終に工ならず、後世の學者之を知らざるべからずと。

黃生（字は扶孟）は曰はく景を寫すこと此の如くに闊大にして自から敍する亦此の如くに落莫なり、前後聯詩境の闊狹頓に異なり、故に結語湊泊すること極めて難し、因つて戎馬の五字を轉出して始めて胸襟氣象の一等相稱ふを覺ゆと。

方回（賀鑄）は曰はく、予嘗て岳陽樓に上り、門壁の左に孟浩然が詩を大書し、右に杜少陵が詩を大書したりしに、後人のここに來るもの敢へて復た題する者なし、劉長卿が岳陽の詩に「疊浪浮元氣。中流沒太陽」の句あり、雄偉ならざるに非ず、而して世甚だ之を傳へず、則ちその他は知るべきなりと。

沈確士（德潛）之を評して以爲らく、三四は古今に雄跨す、五六情を寫す黯淡たり、この一聯を着けて方に板滯ならず、孟襄陽が詩に比すれば更に高きこと一層なりと。

浦二田（起龍）も亦以爲らく、前聯闊ならざれば後聯の狹處苦ならず、後聯能く狹にして前聯の闊境愈〻空し、然れども三四の語を玩ぶに亦已に暗に遼遠漂流の象を逗出して遙かに七八の地を作せり、之を孟浩然が詩に較ぶるに彼、殆ど遜色を見ず、然れどもその結句「坐看垂釣者。徒有羨魚情」と云ふは稍〻活氣に乏しく、終に本篇の爲にその擅場を奪はれたりと。

而して乾隆帝之を批斷して、元氣渾淪、泊湊すべからず、千古の絶唱なりと曰ふ。洵に確切移易すべからざるの言なり、この作已に絶唱たれば、前賢の之を論ずるもの洵に一にして足らず、爰にその一斑を擧げて本篇の精神氣象殆ど闡發せざるの微なきを覺ゆ、之を參酌せば讀者已に神得する處あらん。必ず余が絮辨を煩はさゞるなり、故に肯へて續貂せず。

王西樵（士禎）は漁洋の兄なり、曾て「潮勢汨三韓」の句を得て一時に傳誦す、或は汨字の出處を疑

ふものあり、汪蕓峰之を辨じて曰はく、杜詩に「吳楚東南拆。」とあり、拆の字、汨の字、共に獨造を以て奇と爲すと、この言洵に然り、此等の處若し出處あるの字を以て之を塡めば句は化して平淺と爲り、復た警策と稱するに足らず、又、既に他が獨造を以て奇と爲す、則ち宜しく他が獨擅を讓るべし、若し再び之を襲用せば愈〻以て我が拙を形するに過ぎざるのみ、是れ詩家の祕蘊なり。

王灣

次北固山下

客路青山外。行舟綠水前。潮平兩岸闊。
風正一帆懸。海日生殘夜。江春入舊年。
鄉書何處達。歸雁洛陽邊。

王灣は開元十一年の進士にして、當時の學士蓋母潛と契交尤も深く、文名亦之と相上下し、天下の稱する所たり、北固山は鎭江府の北にありて、その下揚子江の大河に臨み、懸崖峭壁高さ數十丈、その勢頗る險固なるを以てこの名あり、この詩は卽ち山下に舟泊せしの作にして、一二先づ題位を點明し、三四長江の景を寫し、五六に到つて舟泊の光景を述べ、兼ねて節序を帶言す、七八は旅泊を承けて轉じて客懷に入り、遠神を搖曳して之が收結としたるなり、張燕公(說)深くこの詩の後聯十字を愛し、手づから一幅を書して之を政事堂に揭げ、能文の士に示して楷式と爲さしめしと云ふ。灣がこの句固よりこの賞識に値すと雖も、燕公愛才の殷

なる亦洵に感歎すべきなり。

「潮平兩岸闊。風正一帆懸。」二句長江風なく波面極めて平らかに、只一帆を煙靄渺瀰中に見るの景狀、眞に人をして身を其間に置くの想あらしむ、此等所謂神來の句にして天然湊泊すべからざるものなり、近代の詩人に於ては我王阮亭の外能くこの神趣を解せしものあるを見ず、一本「闊」を「失」に作り「正」を「止」に作る亦頗る妙思あり。

「海日生殘夜。江春入舊年。」海天空闊にして五更已に日出を覺る、江鄉溫煖にして臘底早く立春に入れり、二句固より眼前の事物に過ぎず、及び難き所のものは、各〻五字を以てこの眼前の事物を寫し盡し、絕えて詞晦意窘の處を見ざるに在り、今人にして此等の狀を寫さんと欲せば、必ず一句を以て之れを括綜する能はず。勢ひ數句を累ねて而して仍ほこの簡練の句の十分にその意を盡したるに及ばざるを發見すべし、燕公の擊節する所以決して阿好に非ず、蓋し之を杜審言が「雲霞出海曙。梅柳渡江春」の句と千秋に並傳して、以て五字の極詣と稱するに足るなり。

江南旅情

楚山不可極。歸路但蕭條。海色晴看雨。
江聲夜聽潮。劍留南斗近。書寄北風遙。
爲報空潭橘。無媒寄洛橋。

祖詠

商璠嘗て祖詠の詩を評して曰はく、剪刻省靜にして思を用ひる、尤も苦なり、氣高からずと雖も調は頗る俗を凌ぐ、稱して才子と爲すに足ると、詠少くして王維と吟侶たり、則ちその宗風の在る所已に想ひ見るべし、詠はもと洛陽の人なり、流落不遇にして江を渡り、吳楚の間に客游す、この篇卽ち當時の作、前半は旅情を寫し後半は鄉思を寫す、而して南斗覆橋渾て江南の風物を帶定して之を言ふ、步步題位を離れず、是れその章法なり。

「一起凄然として、人の心脾を感動す、多く語を着せずして客況堪へざるの情、言表に溢滿したればなり、歸路と云ふものは楚を去つて吳に還るを謂ふ、齊しく是れ江南の旅情、その鄉に歸るの謂に非ざるなり、楚山の何が故に極むべからざるを明言せずして、歸路に於て「但簫條」と云ふ、白氏琵琶を詠じて「此時無聲勝有聲」（琵琶行）と曰ふ、移して以てこの首二語を評するに足れり。海色冥濛晴ると雖も仍ほ雨、江聲颯沓夜を徹して潮を聞く、是れ亦止、蕭條の景色を寫して而して蕭條の情緒自ら見ゆ、洵に深婉の筆なり。

「劍留南斗近。書寄北風遙。」二句の意は正に身は江南に留滯して書を江北の洛陽に寄すと云ふに過ぎず、その語は豫章の雷次宗が妙に緯象に達し、斗牛の間に異氣あるを認めて、寶劍の豐城獄底に埋藏せるを知りし故事と、李陵・蘇武に寄する書中の胡馬北風・越鳥南枝の文字とを借用してその意味を率直ならしめざるに力めたり、その中又暗に劍氣の星象を動かすを以て自己が抱負ならざるを形出するの意あり、橋は江南の名產、之を北邊に移せば則ち化して枳と爲ると傳ふ、故に書は故鄉に寄すべきも橋に至つては之を洛橋に達すべき由なきを言ふなり。「爲報」と云ふものは書中蓋しこの意を書してその親朋に致したりとの義なり、「無媒」の字味はふべし、自己江南に淪落して憔悴殊に甚だしければ長く故鄉に歸るの望なきこと、譬へばこの空潭の橘の如し、これを以て故人に報ず、則ち暗中大いにその資助して還鄉の媒援を爲さんことを望むの意ありと知るべし。

蘇氏別業

別業居幽處。到來生隱心。南山當戶牖。
灃水映園林。竹覆經冬雪。庭昏未夕陰。
寥寥人境外。閒坐聽春禽。

「居幽處」「生隱心」の六字を以て全詩の根とし、中二聯は幽處を寫す、是れ別業の景、末二句は隱心を寫す、是れ到來の情、詩意甚だ明らかなり。

灃水は終南山の谷間に出でゝ東、咸陽に入り渭水と合す、則ち南山は終南山を指すを知るべし、「庭昏未夕陰。」一句幽僻の狀眞に逼る、商璠が所謂用思尤苦とは此等を謂して極めてその確切を見る、この一句ありて上の「竹覆經冬雪」の句頗る活動す、何となれば積雪多を經て終に消せず、竹樹陰森として白日猶ほ昏きの幽處に非ざれば決してこれある能はざればなり、「閒坐聽春禽」一結極めて淡妙、此等便ち力を費さゞる處に於て神致を見るものなり。

望秦川　李頎

秦川朝望迥。　日出正東峯。　遠近山河淨。
迤邐城闕重。　秋聲萬戸竹。　寒色五陵松。
客有歸興歎。　凄其霜露濃。

一迥字、直ちに貫下して五六句に至る、即ち萬戸の秋聲、五陵の寒色みな迥意を帯べり、起句明かにその朝望たるを言ふ、是を以て次句先づ日出を點じ、然る後二聯に於て次第にその望眼中に映ずる所のものを寫し來る、序次の清折なる是の如し、七句轉じて感慨に入り、仍ほ朝景を帯んで結ぶ、凄其の霜露、無限の悽意を含めり。

「秋聲萬戸竹。寒色五陵松。」寫景の幽微なる聲調の凄鏘なる多くその比を見ず、岑嘉州・高常侍等が慈恩浮圖の諸作と對照するに、彼は古詩、此は律體と雖も、造句に至つては未だ彼等の擅場を讓らざるに似たり。寒色の二字に既に結意を逗出す、後句便ち唐突ならず、而して針線の跡殆ど之を辨じ難し、故に工なり。

宿龍興寺　綦毋潛

香刹夜忘歸。　松清古殿扉。　燈明方丈室。
珠繫比丘衣。　白日傳心淨。　青蓮喩法微。
天花落不盡。　處處鳥啣飛。

傳に據るに潛は荊南の人、荊南原と詩人に乏し、是を以て數百年來唯、潛獨り秀づるの譽あり、其詩は亦大約同時の王摩詰と臭味を同じうす。屹峯峭蒨にして佳句に足り、善く方外の情を寫すは歴代未だ有らずと云ふ、然れば則ち此篇の專ら禪機を抽象して語語佛典を用ひたるは、渠が得意の長技を究めたるものなりと知るべし、香刹に游んで夜に至るまで歸るを忘る、是れ題面の宿の字を破る所以、而してこの句全首の綱領と爲り、以下結末に至る、みな忘歸の二字より生出し以てその所由を解釋したり、殿扉松清し、寺外の光景、已に人を勾留するに足る、況んやその寺内に入れば維摩の方丈、一燈正に明に、比丘の衣上數珠連なり繫く、夫れ燈は佛家の傳法を喩ふる所以にして、珠は又之を心に喩へ戒體に喩ふ、故に楞嚴經に繫珠喩あり、法華經にも亦「繫明珠在衣裏」の語見ゆ、此に對して何ぞ隨喜の念を生ぜざるを得ん、初祖の悟道は不立文字以心傳心に在り、然れども心を居く白日の如く淨なるに非ざれば、以てこの域に到る能はず、佛經の本旨は蓮華を以て妙法に喩ふ、その奥義微妙にして甚深なり、是れ人をして愈〻此に留宿し、冥心默會して、その眞理を究めんことを思はしむ、みな所謂忘歸の所由なり。青蓮と云ふものは以て白日に對す、亦法華經中の人あり、能くこの經を聞いて隨喜讚善せんものは、是人の口中に青蓮香を生ぜんとあるに本づく、決して杜撰に非ざるなり、末二句は漸く悟境に臻れるを言ふ、天女之が爲に花を雨ふらして迦陵頻伽の鳥來つて之を銜み

處處に飛散す、洵に得未曾有と謂ふべし。この香刹に游びこの奇瑞を見る、則ち又安んぞ歸るを忘れざるを得んや、鳥落花を銜む、想ふに寺中所見の實景のみ、而して能く之を佛理に融會して至妙の諦を得たるを形はす、點化の妙なり。

胡笳曲

王昌齡

城南虜已合。一夜幾重圍。自有金笳引。能令出塞飛。聽臨關月苦。清入海風微。三奏高樓曉。胡人掩淚歸。

笳を吹いて胡を走らするの故事、凡そ二あり、俱に晉代の事にして齊しく亦劉姓に出でたり、奇と謂ふべし。その一は劉疇嘗て亂を塢壁に避く、賈胡百數あり、逼つて之を害せんとす、疇懼るゝ色なく笳を按じて之を吹き、出塞入塞の聲を爲して以て游客の思を動かす、是に于て群胡みな涙を垂れて去る、その一は劉琨晉陽に在るとき胡騎の圍む所と爲り、城中窘迫して計の出る所を知らず、琨乃ち月に乘じ樓に登つて清嘯す、胡騎之を聞いて已にみな悽然として長歎す、中夜に至りて琨、胡笳を奏するに胡、又流涕歔欷して故土を懷ふの思あり、疇に臨んで又之を吹けば、胡盡く圍を撤して走る。二事極めて相類似す、蓋し傳聞異辭の致す所なるべし。王昌齡が胡笳曲の一篇、實にこの二事を合用したり「自有金笳引。能令出塞飛。」是れ疇が事、「三奏高樓曉」是れ琨が事なり。

首二句先づ虜騎の城を圍めるを寫して、笳聲の爲に虛勢を畜ふ、手に虜騎を寫すも神は笳に注げり、次聯點題す、作法活變を極む、引とは猶ほ曲と云ふがごとし、其聲之を引いて愈〻永し、故に引と曰ふなり、出塞をして飛ばしむとは卽ち所謂出塞の聲なり、五六、笳聲の清切にして聽者を爲し難きを狀し、以て末句の根とす、關月・海風みな笳曲にこの名あるを以て借つてその聲の形容とせり、二句中悲哀の語を着せざるも、中に悲哀に堪へざるの意を含む、七八は上聯の意を承けて一歩を拓出し起首に應じて收束とす、筆姿飛ばんと欲する、笳聲の清切上文の如くなれば、その一奏を聞く固より堪へず、況んや三奏して終に天明に到る、無情の胡人と雖も那んぞ涙を掩うて歸らざるを得んや、第二句一夜の語に對して高樓曉を點じ、首句の「虜」に對して「胡人」を點ず、緻密嚴整の至と云はざるを得ず。

同王徵君洞庭有懷

張謂

八月洞庭秋。瀟湘水北流。還家萬里夢。偏宜上酒樓。
爲客五更愁。不用開書帙。故人京洛滿。何日復同游。

張謂が簡澹の人と爲り、已に七言古詩の部に於て詳かに之を擧げたり、この詩を讀むに亦清空一氣にして

甚だ字句に屑屑たらず、只胸中憶ふ所を筆に信せて發揮し、少しも修飾を加へず、而して天眞爛漫の趣益然として見るべし、此種の詩格調に在らず、風韻に在らず、但〻その語淺くしてその情深きに在り、從來格調を言ふものは格調を以て詩と爲し、風韻を言ふものは風韻を以て詩と爲す、その餘に於ては則ち斥して粗笨と爲し、鄙俗と爲し、詩を以て之を齒ひするを愧づ、殊に知らず陶冶性靈の妙は正に必ず格調に在らず、必ず風韻に在らず、朴實に發揮して少しも斧鑿を加へざるに在り。謂がこの篇の如き則ち是れなり、然れども若し復た單にこの種を以て眞詩となし、格調・風韻を擧げて一切之を不問に附せば、その失正に格調・風韻を死守してこの種を詩に非ずとするものと同じ。七竅を鑿して混沌終に死せり（莊子・應帝王）、然れども此を以て初めより七竅あるものを目してみな死せりと謂ふことを得ず、今の詩を言ふもの概ねこの義に晦く、偶〻その一端を得れば則ち必ず他の一端を排擊し、醜詆詬罵を加へて始めて甘心す、我を以て之を觀れば眞にその何の故たるを解する能はざるなり、蓋し詩境もと廣闊、千彙萬狀みな牢籠する所に在り、詩人乃ち自らその得る所に局せられて、知らず覺えず之を狹隘ならしめ、終に詩人に非ざるものをして將た詩を學ばんと欲するものをして、その狹隘なるもの、卽ち是れ詩境なりと誤認せしむるに至る、斯れ大いに歎ずべきなり。

八月洞庭湘水北に流る、洞庭は南方に在り、則ち北流の水は直ちに我が京洛に向つて流れんとするもの〻如し、以て有懷の意を興ずるなり。水の北流に由つて我が家を懷ふ、則ち夜夢も亦萬里還家の夢を成し、竟夕終に客たるの情を忘る〻能はず、故に五更まで愁ふと云ふなり、稱意の書を開いて、之を消遣せんか、未だ必ずしもこの情を慰するに足らんや否やを知らず、この際に在つては唯〻偏に酒樓に上るを宜しとするのみ。憂を忘る〻酒より善きは無ければなり、然れども既に酒に對しては復た酒伴なきに苦しみ、却つて故人の京

洛に多きを想起して、何の時か彼等と一樽を共にして同游することを得んやと謂ふ、是れ酒樓に上ると雖も、究竟我が寂莫の懷を慰むる能ざるなり、客愁排し難きを極言して有懷の切なるを形はすは、意到り筆隨ふ、流水行雲、悠然自在の妙を具有せり。

破山寺後禪院

常建

清晨入古寺。初日照高林。曲徑通幽處。禪房花木深。山光悅鳥性。潭影空人心。萬籟此俱寂。惟聞鐘磬音。

首二句は是れ破山寺、次聯は卽ち寺後の禪院、五六景を寫す幽邃にして復た塵境に非ず、故に結語閒寥を明點し、鐘聲を以てその寺院たるを帶定す、章法大約此の如し。

前聯、散法を用ひ、起筆より一氣に說下す、故に必ずその字句を排儷ならしめず、所謂然らざるを得ざるの勢あるもの是れなり。

後聯、花木深幽の處を狀す、山光滲淹として春鳥自在に飛囀す、人跡到ること稀なれば、飛禽肯へて驚かず、「悅性」の二字その深幽を見る、精練の至なり。潭影澹澹として波水興らず、此に對して眞に人心を空澄ならしむるの想あり、一空字用ひ來つて尤妙、宜しく冥目一想して細かに之を咀嚼すべし、然るときはこの

十字の光景自然に頭脳中に印出し、恍惚として親しくその境を視るが如くなるべきのみ。

渡揚子江　丁仙芝

桂楫中流望。　空波兩畔明。　林開揚子驛。
山出潤州城。　海盡邊音靜。　江寒朔吹生。
更聞楓葉下。　淅瀝度秋聲。

是れ揚子の中流より前後左右を回望するの景を寫したるなり、桂楫を棹して揚子の中流に出で、先づ南北の兩岸を望めば、空波渺渺として明朗なれば兩岸の風景歴歴として辨ずべし。故に次句之を總提して「兩畔明」と云ひ、次聯を以て之を分敍したり、揚子驛は卽ち所謂瓜步鎭にして、江の北畔に在り、林樹を隔てゝ遥かにその人家を見る、故に「林開」と謂ふ。潤州城は鎭江府の一名、江の南畔に在り、青山參差として城邊を環遶す、故に「山出」と謂ふなり。南北兩畔の光景是に盡く、因つて轉じて前面を望めば江流滾滾として流れて海に入り涯際を見ず。邊音正に靜かにして笳聲を聞かざるも、朔吹漸く興りて波勢將に騰らんとす。已にして楓葉の淅瀝たる秋聲に吹き落され、片片として河中に下るの響を聞く、後二句は蓋し「朔吹生」の三字より生出せしものにして、大いに離騷九歌（涉江）中の「嫋嫋秋風。洞庭波兮木葉下」と云へるの趣を取りたるものあり、邊音一に邊陰に作る、若し之に從はゞ則ち宜しく解して海上の氣と做すべきなり。

聞笛　張巡

岩嶢試一臨。　虜騎附城陰。　不辨風塵色。
安知天地心。　門開邊月近。　戰苦陣雲深。
旦夕更樓上。　遙聞橫笛音。

張睢陽殉節の一事、今に至つて史冊に炳焉、これその圍城苦守の時、偶〻笛聲を聞いて興感するの作、而してその凛然たる忠義の氣自ら言表に活現せり、此等の詩豈に風雲月露の詩人が詩と同列してその章句を論じ、その格調を言ふ可き歟、因つて肯へて句櫛字比せず。聊か正史の本文に就き、渠が隻手を以て江淮の保障と爲りし事實の一斑を概擧し、以て本篇と相發明する所あらしめんと欲す。

祿山反して中原瓦解し、兩京盡く胡塵に歿す。肅宗の靈武に卽位するありと雖も、恢復の計未だ成らず、江淮一帶の地方千里空營にして、唯〻手を束ねて賊騎の至れるを待つのみ、この時に當つて眞源の令張巡、吏士を率ゐて玄元皇帝の廟に慟哭し、義兵を揚げて賊を討ち、睢陽の令許遠と合し城を嬰して堅守す、許遠自ら材の巡に及ばざるを知り、卽ち請うて一切の軍事を巡に委ね、退いてその下に居れり、是に於て張睢陽の名一時を震動し、賊兵猖獗の勢も殆ど之が爲に一挫するに至る。肅宗の至德二年七月賊將尹子奇大擧して之

を攻むるも、拔く能はず、乃ち重圍を合して長攻す、初め睢陽城中穀六萬斛を蓄ふ、以て一歲を支ふ可し、而して河南の節度使嗣虢王巨、その半を發して濮陽・濟陰の地方を救はしむ、許遠固く爭ふも聽かず、濟陰糧を得て卽ち又賊兵に合す。城の重圍を受くるに及んで、餉食殆ど盡き、兵士亦纔かに千餘人みな羸劣にして用を爲さず、賊之を知り雲梯を以て城堞に逼る、巡、釣竿を出して之を挂へ、進むことを得ざらしめ、篝火を點じて梯を焚くに、賊又、鉤車・木馬の類を以て進む、巡輒ち之を破碎す、賊復た逼らず、因つて壕を穿ち、柵を立て益〻堅守す。旣にして兵士餓死するもの多く、存する者も亦みな疲傷を蒙り氣力に乏し、巡、愛妾を出して之を殺し、以て兵士を大饗し、稍〻之を鼓舞することを得たり。然れども外援已に絕え、糧道全く竭き雀を羅し、鼠を掘し、甚だしきは鎧弩を煑て以て食ふに至る。その年十月賊之を圍む益〻、急、士病んで戰ふ能はず。巡、西に向つて拜して曰はく、孤城備竭して今や全くすべからず。臣生きて陛下に報ずる能はざるも死しては當に鬼と爲つて賊を擊つべきのみと、城陰に陷る。遠と與に執へらる。尹子奇、巡に謂つて曰はく聞く公が戰を督するとき、輒ち眥裂けて面に血ぬり、齒を嚼んでみな碎くと、何ぞ是に至れるや。巡曰はく我、氣をもて逆賊を呑まんと欲す、顧ふに力屈せしのみと。子奇大いに怒り、刀を以てその口齒を抉り、猶ほ刃を以て降らんことを脅す。巡肯へて屈せず、終に遠及び部下の將士姚誾・雷萬春・南霽雲等三十六人と俱に害に遇ふ。嗚呼詩中に所謂「虜騎附城陰」とは想ふに當に子奇が雲梯木馬を以て頻りに之を逼困するの時なるべし。而して曰はく「不辨風塵色。安知天地心。」と、是れ巡が眼中初めより兵塵の起滅を辨せず、天心の向背を圖らず、唯〻軀を捐て賊を擊ち、力竭きて國に殉ずるあるを知るのみ、大節に臨んで奪ふ可からざる此の如し、千秋の下之を誦して猶ほ忠肝の揭する若きを覺ゆ、豈に天地間の正氣と俱に幾百萬劫に亙つて磨滅す

べからざるの大文字に非ずや。

「門開邊月近。戰苦陣雲深。」睢陽もと胡地に非ず、而して邊月と云ふものは、胡兵の門前に來り迫るを以て殆ど邊境の想を做すとの義なり、「戰苦陣雲深」五字苦戰の狀を寫す、身その境に在るものに非ざれば何ぞ以て眞に逼る許の如きを得ん。巡又、「守睢陽作」排律一篇あり、此と參觀して益〻、その死守の狀を想見すべし、詩に云はく、

接戰春來苦。孤城日漸危。合圍伴月疊。分守若魚麗。
厭厭黃塵起。時將白羽揮。裏瘡猶出陣。飲血更登陴。
忠信應難敵。堅貞諒不移。無人報天子。心計欲何施。

忠信敵し難く、堅貞移らず、巡の肝膽唯〻、この十字、一結悽愴尤も人をして嗚咽せしむ。賀蘭進明の如きは當時重兵を擁して近く臨淮に屯す、而して睢陽旦夕の危、觀望して肯へて救はず、徒らに南霽雲をして賀蘭を斬らざるを恨むの歎あらしむ。彼、果して何の心ぞや。又、後世の儒者動もすれば苛見を持し、巡が殺妾襲士の一事を以て人情に非ずとし、その忍心甚だ過ぐるを毀譏す、これ亦別に肺腸あり、眞に痛恨を爲すべきなり。

睢陽殉節の事を歌詠するもの古來其人に乏しからず、而して余が尤も愛する所は、高青邱(啓)が「張中丞廟」及び王阮亭(士禎)が「南將軍廟行」を以て最とす。今之を後に錄して初學の記誦に便し、兼ねて本篇の外傳に充つ、高青邱は曰はく、

延秋門上烏啼霜。羯兒曉登天子牀。

江頭老臣淚暗滴。
公卿相率作降虜。
當時不識顏平原。
孤城落日百戰後。
男兒竟爲忠義死。
賀蘭不斬上方劍。
千年海上見祠廟。
壓抑畫壁塵網裏。
巫歌大招客酹酒。

王阮亭は曰はく、

范陽戰鼓如雷。
山東大半爲賊守。
睢陽獨遏江淮勢。
時危戰苦陣雲深。
誰與健者南將軍。
抽矢誓讎已慷慨。
賀蘭未滅將軍死。

萬乘西去關山長。
草間拜泣如群羊。
豈復知有張睢陽。
搜馬食盡人裹創。
碧血滿地嗟誰藏。
英雄有恨何時忘。
古若叢木秋風荒。
勇氣煒煒虬鬚張。
忠魂或能來故鄉。

東都已破潼關開。
常山平原安在哉。
義激諸軍動天地。
裂眥不見官軍至。
包胥一哭通風雲。
拔劍墮指何鱗峋。
嗚呼南八眞男子。

中丞侍郎同日亡。
淮山峨峨淮水深。
行人下馬拜秋色。

同じく睢陽死節の事を賦して、一は張巡を主とし、一は南霽雲を主とす。是れ題目の同じからざるに出づ。然れども忠憤慷慨の狀奕奕として生氣あるは、洵に異曲にして同工、優劣を其間に入るゝ能はず。學者の模範實に此より好きはなきなり。故に篇幅の過長を厭はず、爰に之を備載す。

碧血爛斑照青史。
廟門遙對青楓林。
一曲淋鈴萬古心。

岳陽晚景

張均

晚景寒鴉集。
霞彩映江飛。
長沙卑溼地。
秋風旅雁歸。
洲白蘆花吐。
九月未成衣。
水光浮日出。
園紅柿葉稀。

張均は燕公張說の子なり、亦詩を以て鳴る、水光の十字を觀るに洵に能く明麗なり、この道の能手と推すに足る。然れども此種の作は大歷十才子の後、以て晚唐の諸家に至る、特に之と比肩すべきものゝ僅指するに勝へざるのみならず。その格の雄健にして、その語の遒麗なる、迥かにこの作の上に出でたるもの、正に復た尠からず。于鱗、中唐以後に於てはみな一筆之を勾抹し去る。而して均がこの作仍ほ偶、盛唐に出づるを以

ての故に收錄せらる。渠が門戸の陋見一に以て此に至る、豈に笑ふ可きの至ならずや。王世懋（字は敬美）は王元美（世貞）が弟なり。于鱗に於ては固より後輩に屬す。然れどもその初盛中晩の界域に對せる持論に至つては、未だ于鱗が如く局束する甚だしきに至らず、大いに學者のために迷律を指示するに足るものあり。曰はく唐律初に由つて盛、盛に由つて中、中に由つて晩、時代聲調もとより自ら必ず同じくすべからず、然れども亦初にして盛を逗し、盛にして中を逗し、中にして晩を逗するものあり、何をか逗と云ふ、逗とは變の漸なり、逗に非ざれは固より變に由なし、唐律の盛に由つて中なるは就中盛衰の介に屬せり、然れども王維は盛唐なり、而して實に中唐の錢起と相唱酬せり。杜少陵の全集半は是れ大歷以後なり。その間の逗漏實に言ふべきものあり。亦大歷の十才子に至つては、その間豈に盛唐の句なからんや。蓋し聲氣猶ほ未だ相隔らざるなり云云とこの言極めて允當なり。その見識遙かに于鱗の上に在るを覺ゆ、故に特に之を標擧す。

均、已に名相の子、能文を以て大理卿と爲る、祿山の國柄を盜むに及んで、誤まつて身を賊中に失し、僞中書令の官を拜す、是れその人もと鄭廣文の一流、父祖を玷辱する寔に多し。後、その罪に坐し南方に貶せらる。この作想ふにその時の作、故に長沙卑溼の語あり。賈誼を以て自況す、寧ろ心に愧なからん乎、今之を取つて張睢陽の下に次す、風雅は固よりその人を苛求すべからざるも、未だ黨猶同器の歎無くんばあらざるなり。

穆陵關北逢人歸漁陽　劉長卿

逢君穆陵路。匹馬向桑乾。楚國蒼山古。
幽州白日寒。城池百戰後。耆舊幾家殘。
處處蓬蒿徧。歸人掩淚看。

劉長卿は中唐諸家の翹楚たり、于鱗大歷の十子に於て盡く排斥を行ふ、而して長卿一首を選して以て之を概す。于鱗の選拔果してその當を得たるや否やは姑く之を別種の問題とし、亦以て長卿が技倆の如何を知るに足るべきなり。その詩調頗る雅暢、五字の詩に於て尤も神妙を見る、蓋し王廙詰が嗣響を得たるもの、故に權德輿推して以て五言の長城なりと云へり。長卿嘗て自ら謂ふ、今人前に沈佺期宋之問王維杜甫あり、後に錢起郎士元劉長卿李嘉祐ありと稱す、然れども李嘉祐・郎士元は何ぞ余と竝驅することを得んやと。詩を題する每に其姓を言はず但、長卿と書せり、これ又天下その名を知らざるものなきを以てなりと云ふ、その抱負是の如し。然るに晩唐の高仲武之を評して以爲らく、詩體甚だ新奇ならずと雖も亦能く煉飾せり、大抵十首以上は語意稍〻同じ、落句に於て尤も甚だし、これその短なりと（唐詩紀事卷廿六所引）。是れ蓋し長卿が才を恃んで踞傲なりしを憎むがために、故らに錢起郎士元を進めて長卿を抑するもの、實は公論に非ず。故に漁洋の論詩之を斷じて、

中興（中興間氣集）高步屬錢郎。拈得維摩一瓣香。
不解雌黃高仲武。長城（劉長卿自ら五言詩の長城と稱す）何意貶文房。

と云へり、文房は長卿の字なり、沈歸愚（潛）は論詩極めて正と雖も、甚だ格調に拘泥し、その弊正に明代門戸の見に近きものあり、故に劉長卿を評して曰はく、鑄語に工にして大雅を傷らざるも、然れども終に盛唐

人の語に非ずと（唐詩別裁集所引）、是れ宜しく彼の王世懋の一語を以て之を喝破するに足るべきなり。

この詩題して穆陵關北に人の漁陽に歸るに逢ふと云ふ、漁陽は卽ち古の幽州にして、安祿山が兵を擧ぐるの地たり、詩因つて祿山の事に感あり。その意を後半幅に含蓄せしめて無限の悽楚を見る、是れ一篇の大主意なり、起句先づ穆陵に相見るを點し、次句はその人の漁洋に歸るを明醒す、桑乾は河の名、漁陽の地方に在るものなり、「楚國蒼山古」は是れ穆陵、その友と相見るの地、「幽州白日寒」はこれ漁陽、友のまさに歸らんとするの地なり、「白日寒」の字自ら殺氣を含む、後半截は則ちこの三字より生出す、刻摯沈勁の句なり、祿山の兵を擧げてより城池百戰舊殆ど盡く、唯〻處處の蓬蒿遍ねきを見るのみ、荒涼滿目酸鼻に堪へず、君今歸人と爲つて一一その境を親歷す、那んぞ淚を掩うて之を看ざるを得んや、着詞親摯、人をして心を動かさゞるを得ざらしむ、明人が所謂盛唐の文字と雖も、何ぞ遙かにその上に出づることを得べけんや、而して「幽州白日寒」の五字錬り得て警甚し、直ちに杜陵に逼れるものと謂ふ可し。

（癸籤・白居易）中唐、韓・白以後は姑く言はず、卽ち大歷十子の如きも藻を文林に聯ね、銀黃相望む、何ぞ輕んずべけん。大歷十子とは卽ち錢起・盧綸・吉中孚・韓翃・耿湋・司空曙・苗發・崔峒・夏侯審・李端の十人を言ふ。今略〻前人が論定したるものに就いてこの諸人を品藻せんに、錢起は王右丞既に許すに高格を以てす、體製新奇にして理致清瞻なり、盧綸は三河の少年の風流、自ら賞するが如し、吉中孚は神骨清虛にして吟詠高雅、宛然たる神仙中の人、耿湋は才致俊爽にして意思不群なり、韓翃が興致の繁富なるは、芙蓉の水を出づる如く、司空曙の屬調幽閑なるは新華の日に笑ふが如し。その餘、苗・崔・夏・李の四人亦みな詞采炳然として觀るべし、此を置いて問はず而して唐詩是に盡くと謂ふ、高談欺世の風、人の笑齒を冷かならしむ、誰か予が之を掊擊する甚だ過ぎたりと謂ふ乎。

題松汀驛

張祐

山色遠含空。　蒼茫澤國東。　海明先見日。
江白迥聞風。　鳥道高原去。　人烟小徑通。
那知舊遺逸。　不在五湖中。

張祐は宮詞に工なるを以て稱せられ、長慶中令狐楚の知遇を受く。是れその人元・白と同時、中唐より晩唐に渉るの人なり、令狐楚太平府を鎭するとき、自ら薦表を草し祐が詩三百首を淨寫して之を上る、時に元微之內庭に在り、天子之を問ふ、微之の曰はく、祐は雕蟲の小巧、壯夫の爲さゞる所、若し之を奬激せば恐らくは陛下の風敎に害あらんと、天子之を頷す、是に由つて意を失し、終身零落孟浩然とその遭際を同じうす、故に「孟浩然身更不疑。」の句あり（唐詩紀事卷五十二所載）。微之が妬忌なる、後進を阻抑して之を進めしめず、正に張燕公が王灣に於けると相反す、卽ち韓門の才子李長吉が如きも亦彼が爲に中傷せられ、進士の一第をも得る能はずして、轗軻に終れり、吾、是に於て益〻燕公の雅量盛德に服せずんばあらざるなり。

祐がこの作風味簡遠にして王摩詰に彷彿たり、是れそれ于鱗が割愛に忍びざる所以なる歟。遠含空の三字起し得て蒼茫の意あり、二聯みなこの中より出づ、亦王・孟一流の章法なり、一結悠然として結ぶ、大抵野

に遺賢多きの意以て自家の況遇を悲しむ、妙は迫らざるに在り。

聖果寺

釋處默

路自中峯上。盤回出薜蘿。到江吳地盡。
隔岸越山多。古木叢青靄。遙天浸白波。
下方城郭近。鐘磬雜笙歌。

唐世尤も象教を重んず、故に高僧名衲接踵して出づ。靈臺澄皎にして事の相干かるなく、三餘に簡牘の期あり、六時に吟諷の際を分つ、青峰門に瞰み、綠水舍を周り、長廊步履、幽徑眞を尋ぬ、景變じ序遷り、蕩して冥思に入る、是を以て會稽に孫許の玄談を傳へ、廬阜に謝陶を白社に接す、日に鍛り月に鍊り、志彌〻厲にして、道彌〻精し、佳句縱橫にして禪定を廢せず、巖穴相邇づいて更唱迭酬す、方外の詩人の一代に盛を極めたる所以なり。その苦なるものは三峽の哀猿の如く、その淸なるものは九皐の鳴鶴に同じ、就中靈一、靈徹、皎然、淸塞、無可、盧中、齊巳、貫休の八人實にその秀傑なるものにして、論ずる者、之を灌莽の喬松、雞群の野鶴に喩ふ、その餘、惟審、護國、文益、可止、淸江、法照、廣宣、無本、修睦、無悶、太易、景雲、法振、栖白、隱巒、處默、卿雲、棲一、淡交、良乂、若虛、雲表、曇域、子蘭、僧鸞、懷素、惠標、可朋、懷浦、慕幽、善生、亞齊、尙顏、栖蟾、理瑩、歸仁、玄賓、惠侃、法宣、文秀、僧泄、淸尙、智遲、滄浩、

不特等四十五人類々輩出し蔚然たる大觀を呈す、才子傳之を論ずる極めて詳悉、今之を摘載するものは、以て于鱗が僅かに處默一首を選して以て之を概せんとするの非理なるを見はさんがためなり。

處默のこの篇頗る人口に膾炙す、「到江吳地盡。隔岸越山多。」、望中の景を一括して盡く、李空同(夢陽)は曰はく、「吳楚地形伏。江山秋色來」と。王漁洋は曰はく、「吳楚青蒼連極浦。江山平遠入新秋。」とみな處默がこの一聯を祖とせるもの〻如し、然れども一輕薄子あり、之を譏つて曰はく、是れ分界堠子(圖境を示せる標木なり)の詩なりと。是れ亦僧貫休が「盡日覓不得。有時還自來」の句を謂つて失貓の詩なりとせるものと同一の笑柄にして、傳へて以て噴飯の資と爲すべきのみ。〻

唐詩選評釋　卷四

明　李攀龍　原本
日本　森大來　評釋

五言排律

送劉校書從軍　楊炯

天將下三宮。星門列五戎。坐謀資廟略。
飛檄佇文雄。赤土流星劍。烏號明月弓。
秋陰生蜀道。殺氣繞湟中。風雨何年別。
琴樽此日同。離亭不可望。溝水自西東。

排律を讀まんと欲す、須く先づ排律の名義を一定すべし、蓋し唐時固より未だ所謂排律なるものあらざるなり。

この體の平仄四句毎に一黏す、黏とは上四句仄起なれば、下四句仄起を用ひ、上四句平起なれば下四句平起を用ふ、その法純然たる五言律にして、而して彼は只八句に限り、此は則ち演じて五十韻・百韻に至るも、此法一定して寸毫の出入を容れず、然ればその五言律に異なる所のものは、全く唯、八句以上の長篇たるを以ての故のみ、故に唐人之を稱して長律と曰ふ、是れその名目の尤も穩協なる者なり。

長律は已に律詩の長篇なることその名の如くなるときは、是れ實に五言律を以て五言古詩を兼ぬるものなり。夫れ古詩はその體たる固より多しと雖も、要するに聲律排偶の拘束を受けず、直ちに我が言はんと欲する所を縱横に發揮し、言盡きて而して止む。その長短參差に至つても亦唯、我が意の欲する所、運用は一に己れに由れり、五言律に至つては聲律排偶の檢に就かざるべからずと雖も、已に限るに四韻八句を以てすれば少しく精を研き思を練りて之を作爲するときは、則ち四十位の賢人君子を得ること寔に難とせず、才力稍〻薄きものと雖も、亦勉强に湊成して以てその醜を掩ひ、拙を藏すことを得べきなり、長律に至つては然らず、氣局は嚴整ならざるべからず、屬對は工切ならざる可からず、段落は分明ならざるべからず、五十韻・百韻に至るもその間に一屠估兒を容るゝを許さゞること、一に四韻八句の律詩の如くならざるべからず、而して又排奡縱横・動盪變化、之を極藝極密・極嚴極工の中に行ひ、開闔相生じ、節奏相和し、鋪敍の痕を沒し、過接の跡を化し、讀者をして殆どその排偶の文字たるを忘れしめて、實は一字一句規矩準繩の外に踰越するものなきを要す。詩の諸體に於て蓋し是より至難なるは莫し。李太白の仙才を以て終にこの一體の堂奧に上る能はざりしは洵に以あり。初唐應制・贈送の諸作、多く五言律を用ひ、尤も多く五言長律を用ふ。亦その至難なるを以ての故に。此に因つて以てその宏富の才藻を君父朋友の前に摛掞せんと欲するが故のみ、是を以て王(勃)・楊(炯)・盧(照鄰)・駱(賓王)にして下、陳子昂・杜審言・沈佺期・宋之問・張說・張九齡輩に至るまで、概ね力を此體に致し、獨りその集の過半は長律を以て塡められたるのみならず、聲律排偶に關なき五言古詩と雖も、亦多少この體の風味を帶ばざるなきに至れり、杜少陵出づるに及んで瑰奇鴻麗、難を視て易と爲し、險を行くこと平地の如く、大いに故常を一變す、是れ實に千古の一人、前に古人なく、後に來者なきものなり。

既にして唐制終に詩を以て士を取る、則ちこの至難なるものを取つて科場の試式に中て、以て人材を選拔するの具と爲したり。是に於て乎、試律なるもの始めて興る、その體純然たる八股時文にして題を相て言を立て、格を佈き句を琢す、初めより自家の性情を吐露するに意なくして、斷斷然として唯、題目以外に半歩を失墜せざらんことを力む、長律の精神は此に至つて全く泯滅に歸し、唯、その形式を存して以て秀才が仕進を圖るの資と爲り、風雅の道を距る啻に天淵のみならざるものと爲りたり、夫れ然り、然れども未だ所謂排律の名あらざるなり。

その名あるは則ち明の高廷禮(棅)より昉まる、廷禮が唐詩品彙を撰するに當りて、五言長律の部目を立て、始めて命じて排律と曰ふ。以爲らく排とは之を排して開かしむる、一に行軍排陣の如く然り。故に此體、起聯・尾聯の二韻を除きて、中間の聯句はみな緊に題より排入せんことを要す。或は題面より排し、或は題位に在つて排す。或は分排し或は合排し或は古を引いて排す云云と。この說一たび出でゝ七子の徒みな奉じて圭臬と爲し、終に長律を目するに排律を以てし、相沿襲して今に至る、殊に知らず廷禮が所謂排とは、試律の形式を以て長律の精神を掩ふものにして、後人終に試律・長律を混じて一格とし、甚だしきは斥けて場屋の文字なりとし、之を作るを屑しとせざるものあるに至りしは、全然排の一字の之が罪魁を作りたるものなることを。元微之(稹)少陵の長律を評し、盛んにその鋪陳排比を稱す。是れ或は高廷禮の命名の自つてする所なるべし。顧ふに微之輩が長律、工穩流動を極むと雖も、鎔裁未だ足らずして往往淺率に病む、これ亦安んぞ少陵の長律を學んで專らその鋪陳排比の處に心醉したるの過に非ざるを知らんや。馮鈍吟は則ち云はく長詩に敍置次第あるはこれ文章の自然の勢なり。その妙處は全く此に在らず。品彙の作、高棅、聲病を解せず。便ち長律を

以て排律と爲せるは無識の妄作のみ。然れども今人は則ち排の字已に骨に入れり。板拙にして貫穿せざるは、只、排の字に誤了せらると、これ眞に能く箇中の消息を識別するの言なり、卓越の見と稱して愧なかるべし。後人此等の反駁あるに拘はらずして、一概に廷禮の妄を襲ひ、排律と稱してその非を悟らず、殊に解すべからざるものとす。今より以往、鄉學の士は願はくは意を此に留め、長律を以て鋪排の死文と爲す勿れ。試律と同一視して、その卑格を蹈むこと勿れ。予自ら此體に短なるを知ると雖も、亦請ふ鞭を執つて之が後に從はんのみ。若し夫れ于鱗が排律の名を襲ひたるが如きは、固より深く咎むべきなし。何となれば渠が唐詩選は卽ち高が唐詩品彙の應聲蟲なればなり。

楊盈川がこの作六韻十二句、劉校書の從軍を送る所以のもの備寫せざるは無し。頭より尾に至るまで、之を當時の情理に揣るに、みな宜しく有るべきの語にして、一語の敷演に涉り一字の冗贅に屬すべきものあることなし。卽ちその序置次第に至つても、一一然らざるを得ざるの勢ありて、氣脈流注し、精神一貫す、何處よりしてか所謂排なるものを見出すことを得んや、則ち之を評釋する一に古體の例に沿り、仍ほ分ちて三段とす。

「天將下三宮。」より起つて「飛檄佇文雄。」に至る是れ一段、劉が文官にして軍幕に從ふ所以に溯り、先づ劉が將に倚らんとするの主將より靑筆して、落ちて劉が身上に到り、重きを主人に歸す。「赤土流星劍。」より「殺氣邊塵中。」に至る、是れ一段、劉が從軍の正文にして手に隨つて又その從軍の地方を點出す。「風雨何年別。」より「溝水自西東。」に至る是れ一段、都べて送別の意を以て歸局とす。而して風雨離亭溝水嗚咽、上段の秋陰殺氣より線索を引き來つて、眞に黯然として首を回らすに堪へざるの情あるなり。

天將は天上の將星、以て天子の將に喩ふ、星門は將府の軍門、以て天上の星官に擬す、上句に星を省き、下句に將を略するは文を互にして義を見はすなり、三宮は明堂・辟雍・靈臺を謂ふ、以て五戎に對す、五戎は戈・殳・戟・酉矛・夷矛の五種の戎器を謂ふなり、起二句の意を總括すれば、大將軍將に軍旅の事あらんとするを以て、正に殿陛に參朝し、畢つてその軍門に歸れば、戎器盡く整頓して、出陣の裝已に完しと云ふに過ぎず。而してその闕庭を下るに他の諸宮殿を言はずして、獨り三宮を擧ぐるものは、一面は對を五戎に取るがためと雖も、又一面には明堂・辟雍文臣の當に趨蹌すべき所なるを以て、暗に劉校書をその中に隱躍するなり。是れ文心の極微極妙の處、「坐望」の句は忽ち一筆を開く、言ふこゝろは軍旅の事固より大將の責と雖も、籌を帷幄に運らし、坐ながら千里を謀りて以て廟堂の策略を資けんものは、必ずや幕府の良佐なかるべからず。而してこの良佐の任に堪へんものは、亦斷じて武臣の能くする所に非ずと。此の如くに一開し去りて、劉校書已に筆先に逼出す、故に「飛檄佇文雄。」と曰うて之を闔づ、則ち大將軍親ら檄を飛ばして以てこの文雄劉校書を招致せざるべからざるなり、佇と云ふものは佇立して待つの義なり、或は貯に作る、義に於て通ずと雖も、佇に從ふもの尤も文勢を得たるが如し。一段

劉校書既に將軍の聘に應じて之が幕佐と爲る。則ちその左右に見る所のものは、復た明堂・辟雍の圖書筐綸に非ずして、終に身を星劍月弓の武器の間に置くことゝなりたるなり、故に「赤土烏號」の二句あり、この二句意は此の如くなるも、その線索は仍ほ上段の五戎より引き緊に之に照應す、妙言ふべからず、赤土なるものは用ひて劍を磨く所以、晉の張華、豐城獄底の寶劍を得て、華陰赤土を以て之を磨きしに、その光彩益〻精明を加へたりと云ふ、是れこの句所用の故事なり。流星は以て劍光に喩ふるなり。黃帝鼎を鑄り、龍に乘じて天に上る、群臣從ふことを得ず、遺弓を抱いて號泣す、故に烏號弓の名あり。烏は嗚咽の嗚に同じ、此句は借りて烏黑の義と爲し、上句の赤土に對す、意匠工絶と稱すべし。明月と云ふは亦弓を狀するのみ、時に於て秋陰蜀道の險に生じ、賊氣漸く猖獗にして、殺氣湟中の野を繞れり。今、大將軍出兵の事あるは、則ちこれがためにして、劉が從つて以て坐謀の偉略を試みんとするものは、正に此等の地に在り。二句已に劉が從軍の地を點じ、兼ねて大將出兵の因由を補寫し、以て上段の未だ言ふに及ばざりしものを追言す。而して殺氣秋陰、悽慘の象、不言の中に下文の別意を逼出せり。二段

風雨と云ふも必ずしも別時適〻風雨の日に値ひしものと死定する勿れ。風飄り雨散ず。みな以て別離聚散の悲緒を興する所以なり。「何年別。」とは玆に一たび手を分ちて後、正に何年までの別れたるやを知らざるの義なり。「琴樽此日同。」は是れ離筵の正文、上句に再會の期知るべからざるを突起して送別を開き、下句に此日の琴樽を共にするを喜ぶの意を言つて送別を闔づ、然れども上句は突出に似て、その實上段秋陰殺氣の語路を承け、兜轉過峽の跡を露はさず、下句は敍して送別の筵に至りて、以て下文「離亭」の二字の總束の地とす、此等の章法渾然にして天成、香象河を渡るの觀あるなり。結二句は既に別るゝ後の蒼茫の意緒を點じて、煙波杳杳無限の情あり。溝水東西は古樂府白頭吟の「今日斗酒會。明旦溝水頭。蹀躞御溝上。溝水東西流。」と云へるに基づき、君は西、我は東に留りて、側目遠送すれば肝腸寸斷する意を曲盡せり。三段

長律の作法を審にせんが爲に、特に詳密に開卷の一篇を分說す。則ち五十韻・百韻の長篇を作らんと欲するも、みなこの一端を以て類推するを得べし、九原作すべくんば、盈川それ我を以て知言と爲さん耶否耶。

靈隱寺

鷲嶺鬱岧嶤。龍宮鎖寂寥。樓觀滄海日。門對浙江潮。桂子月中落。天香雲外飄。
捫蘿登塔遠。刳木取泉遙。霜薄花更發。冰輕葉互凋。夙齡尚遐異。披對滌煩囂。
待入天台路。看余渡石橋。

駱賓王

史に稱す、賓王、徐敬業の義兵を擧げ武后を擊つに及んで、出でゝ之が幕佐と爲り、敬業敗れて終る所を知らずと。而して唐の孟棨が撰する所の本事詩、頗る傳聞異辭多し。曰はく、宋之問既に事を以て累りに貶黜せられ、後、放ち還されて江南に至り、西湖の靈隱寺に游ぶ。時に於て夜月極めて明かにして、松筠泉石と互に映ず、之問、長廊の間を吟行して興自ら禁ぜず。則ち「鷲嶺鬱岧嶤。龍宮鎖寂寥。」の二句を得たり、因つて第二聯を作らんとして、頻りに奇思を搜すれども、終に意の如くなること能はず。忽ち一老僧あり、長明燈を點じ來つて大禪床に坐し、問うて曰はく、少年夜深るまで寢ねずして、吟諷の甚だ苦なるは何ぞや。之問答へて曰はく、弟子は詩を築とするもの、適〻この寺に題せんと欲するも興思屬せず。これがために爾く苦しめり。僧の曰はく、試に上聯を吟ぜよと。之問卽ち吟じて之を聽かしめしに、老僧は再三吟諷して乃ち曰はく、何ぞ「樓觀滄海日。門對浙江潮。」と云はざるやと、之問愕然としてその遒麗を訝り、又、續いて篇を終へて曰はく「桂子月中落。天香雲外飄。」云云と。僧の贈る所の句、卽ち一篇の警策たり。明朝更に之を訪へば則ち復た見えず。寺僧に知る者ありて、これ駱賓王なりと曰ふ。之問その故を詰れば、答へて曰はく、敬業の敗るゝに當りて、賓王と俱に逃亡し、之を捕ふれども得ず。當時の將帥、大魁を失せば不測の罪を得んことを慮り、戰死の兵卒二人を戮し、首を函して以て獻じたり。後、賓王等の死せざる事世に昭白したれども敢へて追捕せず。故に敬業は衡山の僧と爲り年九十餘にして卒し、賓王も亦落髮して名山に游び靈隱寺に止ること周歲にして卒す。二人の事は一敗したれども、唐室恢復を以て名としたれば人多く之を護脫す云云と。この說に據りて考ふれば、本篇の前後はみな宋之問の作にして、駱賓王が手に成りしは寔は「樓觀滄海日。」の一聯に止まり、而も亦唯〻賓王が死後その精靈を月下に顯はして以て之問と賡酬したりしに過ぎず。則ち本篇を擧げて駱賓王が作とせるは極めて非なるもの〻如し。才子傳を覆査するにその說全く本事詩に同じ。而して宋の葉石林（夢得）の詩話（石林詩話三卷）此と稍〻異なり、以爲らく之問が作る所は唯〻起頭の二句にして、以下十二句は盡く賓王の續成する所なりと。且つこの詩の賓王集中に見ゆる旨を言ひ、賓王集は當時の古本なれば、若し後人の補錄に出でざる限りは、信據すべき旨を辨じたり。然れども駱・宋二人聯句の說は、全く孟棨の本事詩より昉まりしものにて、その他の傳記には之を錄するものなし。彼の「樓觀」以下十二句、盡く賓王に出でしと云ふは、想ふに深く本事詩を精究せざるの過にして、本事詩の文、「又、續終篇曰、桂子月中落云云」とある語勢を誤まり解して、彼の老僧が又續いて篇を終りしとせしにより、謬迷を生ずるに至

りしなるべし。この聚訟の說俱にその根據邈爲として究詰すべからず。讀者乃ち疑をその間に闕いて可なり。若し强ひて予が所見を陳せんとすれば、予は一切此等の說を廢して、獨り本篇を駱賓王が詩なりと斷言するに憚らざらんとす。何となれば宋之問は好んで人の美を攘むものなり。已に七言古詩の部に詳悉したる如く、渠は曾て劉希夷が「年年歲歲花相似。歲歲年年人不同。」を奪はんと欲して得ず。怒つて之を唐殺せしものなり。同時親昵の朋友すら此の如し。況んや時代相去る稍〻遠く、殊に兵を擧げ亡命して往く所を知らざるの駱賓王に於てをや。渠必ず夙に駱が此篇を傳誦して、愛慕の餘、乃ち奪つて己れが有と爲さんと欲し、詩中「披對」云云の句の宛ら人と相對吟せるが如き意あるを幸として、終に靈隱奇遇一段の荒唐の話を捏造し、己れ親しく賓王の精靈に邂逅してこの一篇を得たる旨を假構し、事を神奇に託して、剽攘の跡を模稜に附し去らんと欲せしなるべし。然れども宋も亦能く自らその伎倆を知り、「樓觀門對」の一聯の偉麗にして到底自己が力の及ぶ所に非ざるを以て、終にこの一聯のみを賓王に屬して、時人の指斥を免れんことを圖りしに疑なし。孟棨が本事詩は唯〻異聞奇事を收錄して談助に資するもの、初めより事の眞僞を計するものにあらず。その錄する所の李・杜相忌むの說の如きも、前賢多く以て小說家の言なりとせり。之間が假構の說大いに詑異すべきものあるを以て、彼亦採つて以て諸を書に筆せしのみ、棨は唐人なるを以ての故にその說憑據するに足るべしと云はゞ、予は寧ろその識見の太だ卑きを笑はんとするなり。

本篇七韻十八句、起結各〻四句を以て一段とし、その中間は六句を以て一段としたり、蓋し中間六句は靈隱寺中の風物を敍し、本題の正面たるを以て特に詳密ならんことを要すればなり。首句先づ鷲嶺深高の狀を以て起る。是れ靈隱寺の在る所、西湖の鷲嶺は天竺靈鷲山の小嶺飛んでこの地に來りしものなりと傳ふ、故

にこの名あり。次句「龍宮鎖寂寥。」は是れ靈隱寺、この句にて寺たる既に明かなれば、次聯はその登覽の宏遠なるを言ひて更に寺の位置方向を明點したり、是を起段とす。

相傳ふ、月殿に桂樹ありと。而して寺內に入れば只〻この天上の奇香の馥郁として人を襲ふを覺ゆ。是れ卽ち桂子の月中より墮ち來る毋らんか。然らずんば何ぞ爾く雲外に飄〻る此の如くなるや、この接法殊に妙、蓋し前段の觀日對潮已に高曠の狀を實寫し得て盡く。是に於て寺內の一桂樹より忽然筆を空際に放ち去り、別に一番の虛描を成せり。月中雲外、已にその寂寥の意を承け、又、極めて岩巒の神理に協ふ。その觀日對潮の一聯と表裏を相爲すもの實に不卽不離の間に在り。而して寫す所のもの寺內の桂樹たれば、筆路は已に不知不識の中に轉じて寺中の景物に入れるなり。故に以下の四句又各〻、寺中の一事一物を實寫して以て之に接す。總べて高曠の氣味を離れず、此等の作法唯〻之を純ら神を以て行ふものと謂ふの外、他に適當の妙贊辭あるを知らざるなり。刻木と云ふものは、木を刻つて以て篤を爲して泉水を導くを云ふなり。花更〻發するときは終に衰謝の時あることなし。葉互に凋むと云ふも亦此の如く、一葉纔かに凋むときは他の一葉代り發し、全然盡落の期あらざるを謂ふ。地東南の海に面して日光を受くる極めて多ければ、秋末寒冷の候と雖も、仍ほ和煦なること此の如し。是に於て上段觀日對潮の句の特に位置方向を點出せし必要を冥々裏に悟透するを得べきなり。是を中一段とす。

遐異とは遐地異境なり、鷲嶺の岩巒たる、靈隱の寂寥たる樓に登れば杲杲たる皎日の東瀛滄溟の裏より上るを觀、門を開けば浙江の信潮朝夕來往するに對す。月桂雲香、轟塔篤泉、以て花葉紛披として四時斷えざるに至るまで、寺內の幽景一として廛境に遠ざからざるは無し、洵に所謂遐地異境なり、故に特に遐異の二字

を着して前十句を總束し、この遐異の景は即ち作者が早歳夙齡より愛尚するものなりしの意を以て上段の景語を化して作者の情語と爲したり。披對は披襟して以てこの遐異の景に對するの義なり、今や披襟して夙齡より愛尚する所のものに對し、胸底の煩囂を一洗し去る事を得たれば、これより愈、進んで天台の仙境に入り將に石橋を渡り絶巓に登りて、以て世外の隱栖を求めんとす。因つて結ぶにその希望を以てす、是れ結一段なり、天台は靈隱を去ること遠からず、上に石橋あり、廣さ尺に盈たず、下萬仞の淵に臨めり、若し能く之を濟過するものあればへ即ち應眞游現の域に造ることを得ると云ふ、賓王既に敬業の難を逃れ、禍を山水の間に避く、自ら當に厭世離垢の念あるべし、故にこの意を結處に見はすなり。句意頗る飄逸にして李青蓮の風あり、且つ「披對」と云ひ、「看余」と云ふ、人と應對する所あるが如し。吾、之問が假託の說、口を賓王の精靈と應對せしに藉りしは、全く此等の語あるに由ると謂ふ、甚だ武斷の見ならざるを知るべし。

樓觀の一聯唯、その位置方向を點出するに過ぎずとも雖も、雄渾偉大にして峇嶋の山勢と宏壯の寺觀と宛として目前に湧出せるが如し、是れこの二句の千古に傳誦して、絶唱を推されし所以なり。桂子、天香の句の神妙亦之に副ふ。罪雪錄(明、孟熙撰)に載す、宋の天聖中、秋月甚だ朗かなり、靈寶を靈隱に降す。狀珠璣の如し、璀璨として目を奪へり。異人あり之を識り、因つて曰はく、これ月中の桂子なりと。想ふにこれ亦小說家の言にして、賓王がこの聯流傳殊に久しきを以て、假構して句意を實せしものなるべし。坊刻の俗解、天聖は宋の仁宗の紀元たるを知らず、誤まつて之を唐の年號なりとし、終に賓王がこの句は全くその當時に在りし事實を咏じたるものなりとす。杜撰誕妄、眞に一笑を發すべし。初學の或は爲に誤認を致さんことを恐るるを以て特に之を辨ず。

宿溫城望軍營

虜地寒膠折。邊城夜柝聞。兵符關帝闕。
天策動將軍。塞靜胡笳徹。沙明楚練分。
風旗翻翼影。霜劍轉龍文。白羽搖如月。
青山斷若雲。烟疎疑卷幔。塵滅似銷氛。
投筆懷班業。臨戎想顧勳。還應雪漢恥。
持此報明君。

この作、賓王未だ事を擧げざる以前のものにして、蓋し渠屬、上書して用ひられず、怏怏として志を得ざる時の作なるべし。讀んで結段に到れば自ら滿腔の慷慨、武后の擅制を惡んで唐室を既傾に匡復せんとするの志を見るなり。殊に雪・恥の二字を以て篇末に置く、斷じて苟作に非ず。班業顧勳はその意中の事、事を擧げて成ることなかりしも、亦斷斷、書生が紙上の空談とその科を同じうするを得ざるなり。

全首仍ほ三段に分つ、起六句、中六句、結四句、各、一段なり、起六句は總べて題位を點ず、中六句は望

中所見のもの、結四句は之を望んで懷に觸るゝ所のものなり。凡そ此の如くに詩を析說するときは讀者或は試律の法と同一たらんを疑ふものあるべし。然れども彼は題ありて而して後、詩あり、此は先づ詩ありて而して後、題あり、換言すれば彼は題目を刻畫するに止まりて、毫も作者の性情を吐露する能はず、此は作者の性情を抒寫せんと欲して題目を借りて以て發す。死活の別、毫厘の差、是れ一隻眼を具する者に非ざるよりは、往往その軌轍を異途に蹈み誤まりて自ら知らざる所以なり、この事便宜を以て玆に一言す、前後の評釋、みな此意を離れずと知るべし。

結六句題位を總點するものは、この作、もと溫城に宿してその地の兵營を望むの作たり。故に先づ溫城より敍起し、次に兵營に及ぶ。溫城は唐の靈州にして疆は胡域に接す、是れ僻地の邊城たるなり。「寒膠柝」は自己が此地を經過せし時序を點ず、胡地北風の栗烈たる、漆膠の固と雖も、亦盡く凍折せざるなし。「夜柝聞」は明かに躬その地に宿したるなり。この二句を以て題位の「宿溫城」は盡く領起せられたり。此より將に寫して軍營に到らんとして、先づ軍營をこの地に置く所以を點ず。「兵符關帝闕。天策動將軍。」の二句是れなり、軍國の事盡く廟堂の議に關らざるなきを以て、天子親ら策を畫して將軍を各地に移動し、時を計り宜を制して封疆の守を爲さしむ、是れ二句の意なり。上句兵符に由つて帝闕を出す。是れ下よりして上、下句天策に因つて將軍に及ぶ、是れ上よりして下、點次錯落筆姿生動す。是に於て軍營の此地に在る所以已に明、故に下の二句は軍營を正寫せり。然るに猶ほ「寒靜胡笳徹。」の一句を陪して、豫め軍營嚴肅の狀の爲に勢を蓄へ、以て文の平直に涉らんことを避く。是れ斯道に沈浸して細かにその中の鹹酸を嘗めたる者に非ずんば、未だ遠かに識り易からざるの妙味なり。白練の甲、明沙に相映じ、その色整然として分つべし。純ら

軍營を寫すもの唯、この五字にして、而して望見の意已に下段に過渡せり。則ち題意の「望軍營」と云ふもの、盡く領起せられざるは無きなり。

然れどもこの詩果して何が爲にして作る、溫城に宿するが爲にあらざるなり。單に軍營を寫すが爲に非ざるなり。唯、それ之を望んで以て、我が胸懷を觸發するものありしが爲のみ。望の字は是れ一篇の精神たるを知るべし。故に中六句專ら望中の物を以て力を極めて鋪敍し出したり。風旗の片片たる、飛禽の翼影を翻すが如し。陣勢の堂堂たる知るべく、霜劍の煜煜たる、蛟龍の鱗文を轉ずるに似たり、兵威の肅肅たる想ふべし、白羽は羽扇、高く空中に擎げたれば「搖如月」と云ふ。「青山斷若雲」とは前に軍營あるが爲に遙處の青山は遮隔せられて、宛も白雪の爲に中斷せられたるが如きを謂ふ。特にこの句を點するものは讀者にしてその望中の景たるを忘れざらしめんが爲なり。時に天氣霽朗にして煙塵動かざれば、軍營の狀、一として望見すべからざるものなし、故に「煙疎疑卷幔。塵滅似銷氛。」と曰ふ。「卷幔」の字是れ煙を形容するの語と雖も、自ら平沙列幕の狀に切なれば、絕えて浮泛に涉らず。「氛」は兵氣なり、「似」の字味はふべし。上陳する所の軍容兵威、熾盛ならざるに非ず、靜肅ならざるに非ず、洵に以て塞上の風煙を靖めて萬里の兵氣を一掃すべきに似たり。然れども亦安んぞ今は武后司晨の世にして、唐室の危殆なる恰も懸旒の如きの時たるを知らんや。これこの「似」の一字、實に結段感奮の意を惹起すべきの導火線たるなり。文字の祕蘊は要するに此等の處に於て尋繹すべきなり。

班業は班超の事業、所謂筆を投じて萬里封侯たるものの是れなり。顧勳は顧榮の功勳なり。晉の時、廣陵の相陳敏反す、南まさに楊子江を渡らんとす。時に於て顧榮潛かに謀り、兵を起して敏を攻む、敏渡ることを

得ず、その衆潰散すと云ふ。是れその事實なり。顧勳或は召勳に作り、以て周の召伯淮夷を平ぐるの事とす。顧榮の事史傳に見ゆと云ふと雖ももと甚だ顯著の典ならず、則ち單にその姓一字を擧げて、以て上文の班榮に對するときは、召勳に作るもの是なるに近し。今義に於て碍なきを以て肯へて舊本を竄改せず。仍ほ顧に從つて疑を此に存す。「還應雪漢恥。持此報明君。」駱賓王耿耿の懷唯〻この十字、獨り本篇の精神たるのみならず、亦以て渠が畢世の精神を見るなり。文義昭晰復た解を費すべきなし、我が上來評釋する所のものに照らして反復沈吟せば自ら領略し得べし。起段に「塞靜胡笳徹。」とありて、兵氣は已に銷し、漢恥は已に雪ぎしもの〻如し、而して後に「似銷氣」「還應雪」と云ふ。則ち上文は全く只〻一時軍營の氣象を形容したるに過ぎず。作者の本意は覺えず「似」「還應」の三虛字に因つて吐露せられ、隱隱約約の間に無窮の感奮を寓す。これ卽ち我が所謂望中の事物に由つて作者が胸懷を觸發するものなり。

在廣聞崔馬二御史並登相臺

蘇味道

振鷺纔飛日。　遷鶯遠聽聞。　明光共待漏。
清覽各披雲。　喜得廊廟擧。　嗟爲臺閣分。
故林懷柏悅。　新幄阻蘭薰。　冠去神羊影。
車迎瑞雉群。　遠從南斗外。　遙望列星文。

蘇味道は李嶠と名を齊しうし、時に蘇・李と稱す。又、杜審言と善し、崔融を合せて文章四友の目あり。則天武后が延載中、鳳閣侍郎と爲り、聖曆中進んで同鳳閣鸞臺三品と爲る。鳳閣は中書省なり、鸞臺は門下省なり。神龍の年、中宗の復位に及んで、その張易之が黨なるを以て、貶せられて郿州の刺史と爲り、還た益州の長史に還されしと云ふ。その廣州に在りしは未だ何の時なるやを知らざれども、細かに詩意を考ふるときは、斷として是れ謫貶後の口氣ならず。想ふに味道、武后擅制の時に在つて鳳閣の侍郎と爲り、官命を以て廣州地方に巡游し、適〻崔・馬の二人が侍御史に因つて入つて相臺に登りしの信を聞き、遙かにこの詩を裁して以てこの故友を同僚に得たるを喜びしものなるべし。相臺とは門下・中書・尙書の三省を併稱す。二人なるもの、この三省中の孰れに屬するやは知り難けれども、並に相臺に登ると云へば卽ちこの三省中の侍郎と爲りしは明かなり。詩は前後の兩段に分つ、每段各〻六句、前六句は二人が相臺に上るを謂ひ、後六句は自己が廣に在つてこの喜信を聞くを述ぶ。

振鷺は詩經に本づく。振振は群飛の貌、以て朝中の班列に喩ふるなり。遷鶯も亦詩の「出自幽谷。遷于喬木」（詩經・伐木）の語に本づき、二人の進官に比するなり。二人已に省郎と爲る、則ち宜しく日に明光殿に早朝して以て漏刻の終るを待つべし。「清覽各披雲。」と云ふは、晉の樂廣、尙書郎と爲りしとき、衞瓘之を稱して曰はく、この人を見る每に雲霧を披いて靑天を覩るの想ありと。この故事を用ひて二人が省臺諸官の刮目する所と爲るを謂ふなり。唐人省官を稱するに多く淸を以てす、淸覽とは猶ほ臺閣中の望と謂ふが如し。起二句進官を領起し、次二句「共」「各」の二字を用ひて明かにその兩人たるを點ず。「喜得廊廟擧」又、之を一束し、「嗟馬臺閣分」と云ふに至つて、筆を折りて作者自己の身に一照す、言ふこゝろは自己も亦臺閣

の官と雖も、適〻出てて廣州に使せるを以て、二人がこの榮遷の日を見る能はざるを憾むなり。則ち當に同じく臺閣に居るべくして、而して獨り分別して他境に在るを嗟するの意なり。一說に此句を解して彼の岑參が「分曹限紫微」（五言律の部に見ゆ）と同一義なりとし、二人なるもの並に相臺に登るも、一は中書に屬し、一は門下若しくは尙書に屬するが故に晨夕相往來するを得ざるを嗟するの意と爲すものあり。按ずるに門下省・尙書省は當時鸞臺・文昌と稱し、中書省は鳳閣と稱す。臺閣の二字に拘して之を分別せば、この解甚だ當れるが如し。然れども臺閣はもと要路の泛稱にして此の如くに拘定したる文字に非ず、況んや單に崔・馬の二人が爲に之を言ふものとせば、下文自己が廣に在つて之を懷ふの意を逼出すべき針線を缺き、文義甚だ板滯のものとなれり、故に余はこの說に從ふ能はず。

吳の陸機が賦に、松美にして柏悅の語あり、悅とは欣欣向榮の義なり、漢代御史の府中に柏樹を樹ゆ、「故林懷柏悅。」と云ふものは二人なるもの並に侍御史に由つて相臺に登りしを以てその御史の舊府を辭し去りたるに因り之を懷ふの義なり。又、漢代の尙書郎は香を握り蘭を懷にして丹墀に趨走す、その天子に近接の官たるが故なり。「新幄蘭薰」並にこの事を用ふ。阻と云ふものは上段「臺閣分」の意を承け、自己遠く天涯に阻隔せられたるを以て崔・馬の二人が新たにこの蘭薰を懷にして省臺に趨奉するを見るを得ざるの義なり。神羊は解豸なり、鹿に似て一角あり、性忠直にして人の鬪ふを見れば則ち不直の者に觸れ、人の論ずるを聞けば則ち不直の者を咋む。人君の刑罰宜しきを得ればこの物乃ち朝廷に生ずと謂ふ。故に御史の冠之を象どる、今二人已に御史の官を去りたれば、宜しくこの解豸の冠を脫すべし。因つて「冠去神羊影」と曰ふなり。漢の蕭芝は孝を以て聞ゆ、その尙書郎に除せらるゝや、雉數十頭ありて飮啄宿止し、上直に當つては送つて岐路に到り、下直に及んでは門に入りて車前に飛鳴す、是れ瑞雉の事、その省臺の郎官に適切なるを以て之を用ひたり。廣州は今の廣東にして支那の最南に位す、又、漢の明帝に郎官は上、列宿に應ずるの勅語あり、因つて南斗を以て自己が居る所の地を點じ、列星を以て崔・馬二人に擬す、措詞みな工緻を極めたり。

蘇味道相臺に在ること前後數載、阿諛逢迎を以て事とし、一も見るべきの業なし。嘗て人に謂うて曰はく、事を處するは明白なるに宜しからず、但〻摸稜にして兩端を持すれば可なりと、時人之を蘇摸稜と綽名するに至る、是れ渠が長くその地位を保ちたる畢生の祕訣なり。武后の長安元年三月、東都大雪、味道以て瑞と爲して百官を帥ゐて入賀し、侍御史王求禮の呵罵する所と爲る、その醜態此の如し。又、父の喪に丁りて鄉人の墓田を侵毀し、葬事の役使度に過ぎたるが故に、蕭至忠のために劾奏せらる、その人と爲りの取るに足らざること亦此の如し、然れども當代の賢相狄仁傑、武后が佳士を薦用せんとするの問に對へて、文學の蘊藉なるは則ち蘇味道・李嶠その選なり、云云の語あり、渠が詞藻の才に至つては實に亦超凡にして、狄梁公を服せしむるに足るものあるを見るなり。この作巧に崔・馬二人が進官を寫すの外、別に奇構とすべきなきに似たれど、用ふる所の故事みな典贍にして壯麗、館閣の好文字と推すに愧なし、武后の能く之を優容せしも亦全く此に賴らすんばあらざるなり。

奉和幸韋嗣立山莊應制

李嶠

南洛師臣契。東巖王佐居。幽情遺紱冕。

宸眷矚樵漁。　制下峒山蹕。　恩回灞水輿。
松門駐旌蓋。　薜幄引簪裾。　石磴平黃陸。
烟樓半紫虛。　雲霞仙路近。　琴酒俗塵疎。
喬木千齡外。　懸泉百丈餘。　崖深經鍊藥。
穴古舊藏書。　樹宿搏風鳥。　池潛縱壑魚。
寧知天子貴。　尚憶武侯廬。

中宗の景龍三年十二月、帝、驪山の溫湯に幸し、歸駕同中書門下三品韋嗣立の山莊に臨む、因つて嗣立を封じて逍遙公と爲し、群臣を合して詩を賦せしむ、是より先、中宗、修文館を闕廷に置き、公卿以下の善く文を爲る者を選んで之が學士に充つ、李嶠實にその冠たり。禁苑の游幸或は宗戚の讌集毎に、學士畢く從はざるは無く、詩を賦し和を屬し、上官昭容をしてその甲乙を品第せしめ、優なる者は、金帛を賜ふ、時に於て諸武、權を專らにし、韋后制を稱す、則天已に崩じ嬖豎誅に就くと雖も、帝の優柔なる日に荒醼を事とす。この故に天下靡然として爭つて文華を以て相尚び、初唐の麗藻實にその極盛に達したり。開元天寶の世に及んで詩仙・詩聖、武を接して出で、唐の文學、終に千古に冠絕せし所以のもの、亦源を此に發せりと云はざるべからず。韋嗣立は韋后の遠族なり、是を以て帝眷殊に渥く、則ち駕幸山莊の事あり、張燕公說、文を作つて之を紀す、極めてこの詩と相發明すべきものあり。その略に云はく、韋公、體、貞靜を含み、思、幽曠に叶ふ、東山の曲に別業あり焉、嵐氣野に入り、榛煙谷を出づ、石潭竹岸、松齋藥畹、虹泉電の如く射り、雲木虛に吟ず、恍惚として夢かと疑ひ、間關として術を忘る、これ所謂丘壑の壽龍、衣冠の巢許なり、皇上聞いて之を賞し、卽ち公を逍遙公に拜し、その居を名づけて、清虛原幽棲谷と曰ふ云云と、先づこの文を觀て當時の狀を彷彿し、然る後本篇を取つて之を展讀せば羈義を須ひずして想已に半に過ぐべし。

本篇四句を以て一解とす、首四句は韋嗣立が山莊とその聖顧を蒙る殊に厚きを言ひて全篇を領起す。「制下峒山蹕。」の四句は卽ち臨幸の正文、「石磴平黃陸。」の四句は山莊御醼の狀、「喬木千齡外。」の四句は莊中の勝概を括す、結四句は仍ほ莊中の風物に由つて比興の義を借り、首四句の意を申言して以て總束とせるなり。

起一解、「南洛」の句は是れ韋嗣立に由つて聖顧、「東巖」の句は是れ嗣立の山莊、「幽情」の句は是れ山莊中の嗣立、「宸眷」の句は是れ聖顧に由つて山莊、敍述次第綏綏として起る、並に以て行幸を引出すべきの禊子たるなり。武后制を東都に稱す、東都は古の洛陽にして長安の東南に在り、故に南洛と云ふ、中宗の卽位は仍ほ東都に於てす、神龍二年に於て始めて長安に還る。韋嗣立は武后の朝より歷事したるの老臣なり、故に帝南洛に在りし日より、早く嗣立と師臣の契ありし事を追言して以て今日の聖眷を得たる所以を點醒す、師臣とは臣下にして之を師とする、猶ほ伊尹・太公の類の如きを謂ふなり。山莊は驪山鳳凰原の鷄鶏谷に在り、故に帝、驪山の溫湯に幸せし歸途を以て之に莅む、而して驪山は實に長安の東に位す、故に「東巖王佐居。」と曰ふなり、帝、已に師臣を以て嗣立を遇す、その王佐の才たる知るべし、然れども彼は今この東巖の山莊に住へり、自ら應に衣冠紱冕の貴を遺れて以て丘壑煙霞に嘯傲するの幽情高致あるべし、この故

にこそ、天子亦特に宸眷を垂れて以て彼が樵漁に隨伴するの狀を矚んとはせらるゝなり。此の如くに立言して天恩の優渥、嗣立の襟度、兩つながらその絶頂に臻らざるは無し、洵に辭令に妙なるもの、三四、二句は卽ち燕公が文中の「邱壑遷龍衣冠巢許」と同意なりと知るべし。

第二解四句、前二句は是れ車駕山莊に幸す、後二句は是れ山莊車駕を迎ふ、制は勅旨なり、昔、黃帝崆峒の山に上り、廣成子を見て至道の精を問ふ(莊子・知北遊)。今、帝驪山に幸して嗣立の山莊に臨む、因つてこの事を用ひたり。灞水は卽ち驪山の麓を流るゝもの、帝、特旨を以て優恩を垂れ灞水より車駕を枉げて以て山莊に幸す、是に於て松門閭寥の地、遠かに天子の鳳旌・羽蓋を駐め、薜幄・幽僻の居、却つて朝臣の響纓・裳裾を引くことゝなりたり。松門の二句僅かに十字のみ、則ち山莊行幸の意を狀し盡して遺憾なし、何等簡練の筆なるぞや。薜幄は猶ほ蘿帳と云はんが如し、楚辭に曰はく「罔ニ薜荔一兮爲レ幃」(湘夫人)と、卽ちその出所なり。

第三解四句、前二句は車駕の止まる所、後二句はその饗醴の狀なり、「黃陸」とは黃は土の色なり、門に入り石磴を登ること數級、則ち弘敞の園庭に出づ、故に云ふなり。庭に由つて進めば樓あり、高く紫虛の中天に聳ゆ、上に御座を設け、宴を此に張る、故に雲霞縹緲として仙路に接するかと疑はれ、琴酒の清興一として俗塵に遠ざからざるなきを覺ゆ。上文「松門薜幄」に緊接して以て「石磴」を出し、又「煙樓紫虛」に緊接して以て「雲霞」を出す、用筆の自在なる、所謂水到り渠成るものなり。

第四解四句、毎句各、一景物を寫す、莊中の勝概を悉す所以なり、蓋し莊には重岷洞壑飛流瀑水の勝あり、燕公の記文に「石潭竹岸、松齋藥畹、虹泉電射、雲木虛吟」と謂ふもの是なり、

木は千齡の外に超ゆ、その甚だ古なるを知る、泉は百丈の餘より懸る、その甚だ高きを見る、崖谷の深幽なる、殆ど仙者が煉藥の跡かと訝る、巖穴の古奥なる、乃ち神人藏書の所なる毋らんや、經は曾經の意なり、會稽に禹穴あり、中に太古の書を藏す、是れ「穴古」の句の用ふる所、俗注、周の穆王書を大酉・小酉二山に藏するの事を引くは當らざるに似たり。

上文四解、一路敍して莊中の景物に到り、當に詠ずべきの事此に盡きたり、因つて結一解を以て通篇を束ね、起一解の意に應ぜり、然れども文勢若し上數解と別に一種の筆墨を成せば、稍〻散漫に渉り索然意盡くるの憾あり、是を以て仍ほ上解景語の線を承け來り、樹鳥池魚を借りて主人の身分を比況す、曰はく、樹に宿る所は卽ち風に搏つの大鳥なり、池に潛むは卽ち壑に縱なるの巨魚なり、山莊に幽居する所のものは、卽ち王佐師臣の大宰相たるなり、接續の跡渾然化し去つて筆力萬仞の石を轉ずるが如し。結句諸葛孔明艸廬三顧の事を用ふ、尤も山莊の行幸に切なり、「寧知天子貴」、遙かに「宸眷矚樵漁」と相首尾す、而してこの格外の恩を辱くする主人の榮耀言下に躍如たり。

韋嗣立山莊の行幸、實に當代の盛事、陪醴の文士、李嶠にして下、沈佺期・宋之問等みな侍蹕の列に在らざるは無し、今その二三を後に繫けて、以てこの種應制莊重の文字を研究せんとするものゝ一考に供ふ、宋之問が詩に曰はく、

樞披調梅暇。　林園藝槿初。
地隱東巖室。　天廻北斗車。
雲罕明丹壑。　霜笳徹紫虛。
入朝榮劍履。　退食偶琴書。
旌門聽窟窓。　輦路屬扶疎。
水疑投石處。　溪似釣璜餘。

帝澤頒巵酒。　人歡頌里閭。
蘇頲が詩に曰はく、
樅金寒野霽。　步玉曉山幽。
百工徵往夢。　七聖扈來游。
樹重巖瀨合。　泉迸水光浮。
恩如犯星夜。　歡擬濟河秋。

これみな長律を以てするもの、而して沈佺期・武平一等は絶句を以て之を出せり、沈云はく、

東山朝日翠屏開。　北闕晴空綵仗來。
少微今夜近三台。　喜遇天文七曜動。

武云はく、

鳴鑾赫赫下重樓。　羽蓋逍遙向一邱。
唐年更覩赤松游。　漢日惟聞白衣龍。

凡そ同時に在つて同事を賦する者は、之を駢觀してその立言命意の異處を咀嚼し、細かに對較を下すときはその人の才分これに由つて窺ふべく、其詩の工拙これに由つて判ずべし、その功實に千百言を累ねて詩法を辨ずるに勝れるものあり、予が好んでこれを爲すは斷じて博を誇り多を貪るに非ず、亦その良法たるを信じて疑はざるが爲のみ、讀者諸を諒せよ。

一承黃竹詠。　長奉白茅居。
帝幄期松子。　臣廬訪葛侯。
斗柄乘時轉。　臺階捧日留。
石徑喧朝屐。　璜溪擁釣舟。
不學堯年隱。　空令傲許由。

白帝城懷古

陳子昂

日落滄江晚。　停橈問土風。　城臨巴子國。
臺沒漢王宮。　荒服仍周甸。　深山尙禹功。
巖懸青壁斷。　地險碧流通。　古木生雲際。
歸帆出霧中。　川途去無限。　客思坐何窮。

白帝城は蜀の夔州に在り、後漢の初、公孫述の築いて據りし所のものなり、山に據り江に臨み、三峽の險を扼す、屢〻前賢の題詠に見ゆ、蓋し成都より荊南に赴くの第一勝絶の地たるなり。伯玉も亦蜀の梓州の人、意を寄するに、舟路將に楚に行かんとして此を過ぎ、乃ち是の作あるなり。起結、各〻二句、起は白帝城を喚起し、結は懷古の意を收住す、中幅は各〻四句、前四は白帝城の古跡、後四は現時所見の景なり、懷古の地は岸上の城、懷古の人は舟中の我、故に滄江停橈を以て始まり、中に碧流歸帆を點じ、川途を以て之を一束す、是れ全詩の脈理なり。

落日滄江、橈を停めて以て問ふ、懷古の端を發する所以なり、城は三巴の地に臨む、三巴は周代の巴子國なり、故らにその古名を用ふるものは懷古の本意なり、この城公孫述始めて之を築き、三國蜀漢の時に及んで劉玄德（備）吳を擊ち、大いに陸遜の敗る所となり、遂に船舫を棄て、還つてこの城に至り、永安宮を作つて

以て居る、後、竟に此に殂す、所謂漢王宮是れなり、巴子國はもと邊鄙の境、五服の中に在つては自ら荒服に屬せり、然れども亦猶ほ周家の彊土たるなり。禹の洪水を治する、三巴三峽の所在に於て尤もその神功を見る。故に少陵が禹廟の詩、亦「早知乘四載。疏鑿控三巴。」と云へり、深山峭壁幾百歳を經過すと雖も、禹の功業は則ち尚ほ儼然として見るべし、二句感慨反復、「仍」「尚」の兩虚字に於てその神理を見る、尤も玩味に耐へたり、語尾禹功を出し、下文現時所見の景を開く、亦文字の過峽なり。

巖勢倒まに懸りて、青壁斷えんと欲す、乃ち是れ荒服深山の氣象、その險や此の如くにして、而して碧流一綫、中間を疏通し、滾滾として絶ゆる期なし、禹の大功に非ずんば那んぞ此あるを得んや、古木は篠葱として高く雲際に叢生し、歸帆は隱約として遙かに霧中に出沒す、一派峽中晦冥の景、寫し得て雅健を極む。この蒼茫に對して百端交〻集まる、則ち又焉んぞ懷古の情を起さゞるを得ん、故に「川途去無限。客思坐何窮。」とは曰ふなり。この種沈雄峭拔の筆是れ伯玉の擅場を推す、李(嶠)・杜(審言)・沈(佺期)・宋(之問)輩が專ら綈藻績を事とするに視れば、體製の同じからざるに坐すると雖も、亦寔にその敵に非ざるを見るなり、伯玉、武后の重用する所と爲ると雖も、時に箴規の言を進む、一味依阿して容を取るものに非ず。獨異志(唐李冗撰三卷)に載す、子昂初めて京に入るとき、人のために知られず、適〻胡琴を賣るものあり、その價百萬、豪貴傳觀して能く辨ずるものなし、子昂突出して左右を顧みて曰はく、千緡を輦して之を市はんと、衆驚き問へば卽ち余この樂を善くすと答ふ。みな曰はく、聞くことを得ん乎。曰はく、明日宣陽里に集まるべしと。期の如くに偕に往けば酒饌畢く具はりて胡琴を前に置けり、食畢りて子昂琴を捧げ語つて曰はく、蜀人陳子昂、文百軸あり、馳せて京轂に走るも、碌碌たる塵土、終に人に知られず、この樂は賤工の役のみ、豈に心を留むるに宜しからんやと、立ろに擧げて之を碎き、その文百軸を以て徧く會する者に贈る、一日の內、聲價都に溢れしと云ふ。渠が曠世の逸才乃ち爾るものあり、王適の稱して海內文宗と謂ふ、豈に我を欺かんや。

峴山懷古

秣馬臨荒甸。登高覽舊都。猶悲墮淚碣。
尙想臥龍圖。城邑遙分楚。山川半入吳。
丘陵徒自出。賢聖幾凋枯。野樹蒼烟斷。
津樓晚氣孤。誰知萬里客。懷古正踟躕。

この篇亦蜀に由つて楚に出で、湖廣の襄陽を經る時の作、想ふに前詩と同時のものなるべし。襄陽は古への荊州の地、晉の時羊祜此に都督たり、每に峴山の風景を愛し、樂しんで此に游ぶ、嘗て酒を置き、從事鄒湛等を顧みて謂つて曰はく、宇宙ありてより、便ちこの山あり、由來賢達の此に登る我と卿との如きもの多し、みな湮滅して聞くことなし、人をして悲傷せしむ、若し百歳の後、知ることあらば、願はくは魂魄猶ほ此に登らんと。祜卒して民、その惠澤を懷ひ、碑を山に建つ、望む者流涕せざるは無し、因つて名づけて墮淚碑と云ふ、是れその地尤も著名の事。又、諸葛孔明が隆中の草廬は實にこの襄陽城西に在り、孔明は蜀の賢相、

羊祜は晉の名將なり、而して今は則ち茫茫たる貊の一邱を贏得するのみ、是れ伯玉が一幅懷古の淚の禁ずる能はざる所以、詩十二句、各、四句を以て一頓す、詞意甚だ明亮、多く詞を費すを用ひず、故に多贅せず。

荒甸は前詩の所謂「荒服仍周甸。」の意、荊は古へ荊蠻と稱す、是れ周の荒服たるなり、孔明が八陣の圖を畫せしは必ずしも隆中の草廬に於てせず、今借つて以て韻に叶はするのみ、「城邑遙分楚。山川半入吳。」是れ峴山の形勝を寫すのみと雖も、妙は上句「墮淚碣」を頂して城郭是に昔人非なるの悲あり、下句の「臥龍圖」を承けて三分の天下終に一統する能はざるの恨あり、周の穆王八駿の馬を騁せて西、崑崙の邱に登り、西王母に瑤池の上に見えて、樂しんで返るを忘る、王母爲に歌つて云はく、「白雲在天。山陵自出。」と。其意極めて悲涼、古今の人物賢不肖となく、みな山陵中の物たるを免れざるを哀しむ、漢武の所謂歡樂極まつて哀情多きものなり。この詩、丘陵の句を用ふ。賢聖の句は蓋し羊祜が曾て欷歔せし所以のもの、今は臥龍を併せてその中に在り、少陵が「出師未濟身先死。長使英雄淚滿襟。」(白帝城懷古)とこの沈痛を同じうせり。

韓昌黎は云はく、「國朝盛文章子昂始高蹈。」(題)と。元遺山は云はく、「沈宋橫馳翰墨場。風流初不廢齊梁。論功若準平吳例合著黃金鑄子昂。」(論詩絶句世首)これみな口を極めて伯玉を稱揚す、我が前詩の末に論ずる所と相符す、誠に渠が長律に於てすらその雅正雄健なる筆墨の畦徑に蟬脫すること一に此の如し、況んや古詩感遇の諸篇の人をして目四海を空しうし神入極に遊ぶの概あらしむるをや。曰はく「陳子昂以其古詩爲古詩、弗取也。」と吁。

蓋是れ何等の妄言。

贈蘇味道　杜審言

北地寒應苦。南城戍不歸。邊聲亂羌笛。
朔氣捲戎衣。雨雪關山暗。風霜艸木稀。
胡兵戰欲盡。漢卒尙重圍。雲淨妖星落。
秋高塞馬肥。據鞍雄劍動。搖筆羽書飛。
輿駕還京邑。朋游滿帝畿。方期來獻凱。
歌舞共春暉。

蘇味道天官侍郎たりしとき、審言その下僚に居りて選試の集判を司る、忽然として人に語つて曰はく、藝味道は必ず死せんと、人驚いてその故を問へば、曰はく、彼、我が判詞の美を見れば、自ら當に羞死すべきのみと。杜必簡亦實に一箇の快男子、その四友を以て目せらるゝ味道に於て猶ほ且つ此の如し、宜なり渠が傲岸矜誕眼中に人なく、終に屈・宋(屈原・宋玉)を得て衙官とせんと云へること、(五律の部參覽すべし)この詩必簡以て味道に贈る、却つて一詞の之を侵陵せるものなし、蓋し中宗卽位の年。大いに先朝の舊臣を黜す、味道既に張易之の黨なるを以て斥けられ、必簡も亦、易之兄弟と交通せるを以て嶺外に配流す、幾もなくして召還せられたりと雖も、その

同難の士、齊しく一番の辛楚を嘗め盡したるを以て、當年の豪氣漸く消磨し、相憐むの情深きを加へたるが故なるべし。詩に據れば、明かに味道當時幽朔に從軍せり、味道の從軍は史に明文なし、詩中に「輿駕還京邑。朋游滿帝畿。」の語あり、因つて考ふれば、この詩の成るは中宗東都より長安に還幸し、修文館を設けて大いに詞章の士を集め、必簡亦沈・宋等と共に召されてその直學士と爲りし時に在るべし。今更に之を史に徵するに、中宗の還幸は神龍二年の多十月にして、時に幷州長史張仁愿を以て檢校在屯衞大將軍と爲し、更に朔方道の總管とす、景龍二年三月に及んで、張仁愿三受降城を塞上に築いて以て突厥の入寇に備ふ、而して修文館の設けは實にその年の四月に在り、此を以て推せば味道の從軍は全く張仁愿に從つて朔方に在るものにして、時に必簡は已に召還せられ、前きに同じく謫遷せられたる沈・宋輩と稍〻相見ることを得たるも、味道のみ猶ほこの恩命に洩れたるを以てこの詩を作り、一日も早く京師に還らんことを望むの意を致せしに疑なきなり。大典の解義、この詩「輿駕」の句天子の親征に似たるを疑ひ、而して史にその事なきを以て彼の崔著作融が武攸暨に從つて出塞せるを送るの詩（亦五律の部に在り）に君王を以て攸暨を指稱したるに齊しく、或は復た攸暨を擬したるならんと謂ふ、是れ既に史に考へず、又、深く詩語を味はざるものにして、妄謬乖舛未だ此より甚だしきは非ず、詩には唯〻「輿駕還京邑。」とあり、曾て輿駕の塞外に親征せしを言はず、是れ明かに中宗の東都より還幸ありし事を指すなり。且つ諸武擅權の世、如何に稱呼の濫を致せしと雖も、將た、武攸暨は僅王に封ぜられたるを以て、君王と曰ふは或は當に有るべきの事たりと雖も、斷じて直ちに攸暨が軍を指して輿駕とは云ふべからず、余は必ずこの事なきを保するなり。德川氏の世、曲學の儒、幕府を擬するに王室を以てし、覥として耻を知らず、大典が如きも亦此等の慣習に誤まられ、漫然臆度して終に必簡に超ゆるに大

義名分を辨識せざるの一文人たるを以てす、是れ余が玆に細かに考證を加へ、批謬を指摘して以て必簡がために不白の寃を雪ぐの已むを得ざる所以なり。

起四句、味道が從軍の地より筆を着す、南城と云ふものは胡地より之を南するなり、而して「邊聲亂羌笛。」は第一句の「塞應苦」を頂し、「殺氣滿戎衣。」は次句の「戍不歸」を頂す、全篇は乃ちこの兩意（苦塞一意、不歸一意）を以て貫かれたり。

「雨雪關山暗。」の四句は苦寒を狀する所以なり、然れども「胡兵」の二語、已に下文に一線を過渡し漸く、轉じて不歸の意に入るなり。「雲淨妖星落。」の四句は上文「戰欲盡」の意を承け味道が從軍の狀態に及ぶ、雲淨く星落つれば兵氣已に消ゆ、是れ戍士の宜しく歸るべきの候、而して猶ほ且つ鞍に據つて馬援の態に傚ひ、筆を搖かして陳琳の檄を草す、是れその人未だ歸らざるなり、結四句の意は既に上段に分疏し復た餘蘊なし、看者自ら早く心下に領悟したるべし、「來獻凱」と云ふものは、味道の爲にその遣戍の醜を回護す、「歌舞共春暉。」その中暗に雨露恩赦を望むの意を寓したり。

酬蘇員外味玄夏晚寓直省中見贈　沈佺期

並命登仙閣。通宵直禮闈。大官供宿膳。
侍史護朝衣。卷幔天河入。開窗月露微。

小池殘暑退。高樹早涼歸。冠劒無時釋。
軒車待漏飛。明朝題漢柱。三署有光輝。

前四句は是れ寓直、中四句は是れ夏晩の景、後四句は蘇員外味玄が贈らるゝに酬ゆるの意なり。味玄は蓋し味道の弟、當時伜期と倶に員外郎たり、秦の時始めて郎中令を置く、その屬官に三署あり、署中に郎中侍郎を置きて三署に分隷す、漢も亦之に因れり、唐制に至つて毎署に員外郎一員を置き、禁中に直宿して以て非常に備へしむ、是れ味玄が省中に寓直せる所以を知るべし。「竝命」と云ふものは二人同時にこの官を拜せしなり、「禮闈」とは尚書省に崇禮・建禮の二門あり、參仕のもの崇禮門より入り、建禮門より退朝す、この二門實に出入の要闕にして、齊しく禮を以て名づけたり、故に尚書省を指して、「禮闈」と云へり、此に由つて味玄の官は尚書員外郎たるを知るなり。「大官」は少府の屬官にして、內廷の膳部を主どるものなり、凡そ尚書郎入直の時は中官その枕衾を供し、大官その食膳を供す。又、女侍史二人をして被を挈げ衣を熏ぜしむ、是れ漢の制度にして直衞の臣を優遇する所以のもの至れりと謂ふべし。今この詩も亦云ふ、「大官供宿膳。侍史護朝衣。」と、然れば唐も亦漢の制度に依りしと見えたり、以上、味玄が寓直の狀を寫すなり。時に三伏已に晩れ、九秋漸く近し、直廬の光景自ら當に清絕なるべし、幔を卷かんか、天上清淺の銀河は動いて堂に入るかと疑ひ、窗を開けば、月下星晶の風露は微に襟を霑ほすを覺ゆ。御苑の小池は漣漪を生じて、殘暑全く退けり、禁墻の高樹は濃陰を垂れて、早涼已に歸れり、是れ夏晩の景を寫す、妙は天河月露の宮庭に

切なるに在り、而してこの好景に對して自ら吟思を生ず、味玄が詩を作りて伜期に贈りしもの從つて見るべきなり。

然れども躬已に承直す、公事その身に在り、固より吟詠を以て職務を廢することを得ず、故に「冠劒」は之を釋くに時なきなり。五更鷄鳴、率先に參朝して以て起居を候す、故に「軒車」は漏を待つて飛ばさゞるべからざるなり。漢の時田鳳、尚書郎と爲り、容儀正なり、その事を奏する毎に靈帝之を目送し、因つて親しく殿柱の上に題して曰はく、堂堂乎たるは張京兆と田郎となりと、是れ尚書郎の故事、尤も味玄に切なり、因つて之を用ふ、言ふこゝろは味玄の容儀固より田鳳に讓らずして、その才藻亦贈らるゝの詩の如きあり、明日早朝して事を奏せば天子必ず之を嘉奬し、以てその光輝を三署中に施すこと、一に靈帝題柱の故事の如きものあるべしとなり、三署は先きに秦漢の制に依りて之を注す、唐に在つては則ち門下・中書・尚書の三省を指すものと知るべし。沈伜期は有唐律詩の冠冕、宋之問と名を齊しうし、沈・宋の名千古に亙りて朽ちず。張燕公は曰はく、沈三兄の詩は、須らく他に第一を還すべしと、その一時に推重せらるゝ此の如し、その聲病を回忌し、句を約め、篇を凖し、格律を著定して遂に近體を成せしは、實に錦繡の文を爲すが如し、學者之を宗尚して「蘇李居前。沈宋比肩」の語あるに至れり。蓋し近體の沈・宋二人に始まるは、猶ほ五言の蘇武・李陵より始まれるが如くなりとの意にして、洵に曹(操)・劉(植)をして降格して之を爲さしむるも、殆どその優劣を定むる能はざるものあるべし。然れども今、之間の詩と之を對較するに、その才氣は稍〻彼に亞ぐものゝ如し。中宗の昆明池に行幸の時、上官昭容、二人を品第して宋を沈の上に置きしは洵に公論と謂ふべし、伜期、武后の朝考功員外郎に累遷したるも、中宗の卽位に當つて、亦杜審言等と倶に嶺表に配

流し、修文館成るに及んで召還せられて直學士と爲る。中宗數〻近臣學士と宴集し、工部尚書張錫をして談容娘を舞はしめ、將作大匠宗晉卿に渾脫の舞、左衞將軍張洽に黃麞の舞、左金吾將軍杜元談に婆羅門の誦咒等を作さしめて樂しみとす、群臣大僚則ち甘んじて、この優倡の態に效うて愧づる所なし、又、嘗て侍宴の文臣をして回波の辭を作らしむ、沈佺期乃ち歌うて曰はく、「回波爾時佺期。流向嶺外生歸。身名已蒙齒錄。袍笏未復牙緋。」と、帝因つて之に牙緋を賜ふ。この餘の群臣亦或は詔語を陳し、或は自ら榮爵を求む、獨り諫議大夫李景伯は曰はく「回波爾持酒扈。儆臣職在箴規。侍宴既過三爵。諠譁恐非儀。」と、帝悅ばず（隋唐嘉話・本事詩）。今按ずるに、佺期が詞を弄し寵を丐ふ、之を李諫議の意義嚴正なるに較べては、眞に羞死すべきの醜態あり。然れども宋之問が張仲之の恩に復ふるに仇を以てし、又劉希夷を非命に死せしめし如きに視れば、猶ほ未減斟量すべきを覺ゆ、宋は終に自盡を賜ひ、沈は開元の初まで存して、壽を以て終れり、是れ亦天道の然るありと謂ふべきもの歟。

同韋舍人早朝

閶闔連雲起。　巖廊拂霧開。　玉珂龍影度。
珠履雁行來。　長樂宵鐘盡。　明光曉奏催。
一經傳舊德。　五字擢英材。　儼若神仙去。
紛從霄漢回。　千春奉休曆。　分禁喜趨陪。

「閶闔」は天門なり、以て宮禁の門に喩ふ、漢書董仲舒の傳に「游於巖廊之上。」の語見ゆ、晉灼の注に嚴峻の廊を謂ふとあり、然れば「巖廊」はその構造に由つて之を形容するもの、巖石の巖に非ず、門は雲に連なり、廊は霧を拂ふ。九重の城闕曙色正に動くの氣象なり、既にして玉珂珊珊として龍馬の影忽ち度り珠履槖槖として鴻雁の列を正して來る、是れ果して何物ぞ。蓋し長樂觀の宵鐘は既に盡き、明光宮の曉奏は方に催せるを以て、群臣百官陸續として闕廷に參朝するなり、劈頭より一連六句、力を極めて紫宸早朝莊嚴雄麗の景を狀す、而して我と韋舍人とは自らその中に在るなり、是れ前半段。

漢の韋賢、丞相と爲り、その子玄成復た明經を以て繼いで相位に登る。時人語つて曰はく、子に黃金滿籯を遺すは、子に一經を敎ふるに如かずと、これ同姓を以て韋舍人父子に擬す、韋舍人は韋承慶にして、現に中書舍人に官し詔誥を掌りて、而してその父韋思謙は亦夙に名を著はせり、用事適切と稱すべし。晉の司馬景王、中書郎虞松をして表を草せしむるにその意に可はず更に之を改めしむ、時に鍾會亦中書郎を以て松と同僚に在り、松が憂色あるを見てその草稿を取り、爲に文中の五字を更定し、以て景王に上るに、景王大いに稱譽を加へ、眞に王佐の才なりと云へり。是れ「五字擢英才。」の出典、前句は韋の姓に因り、後句はその官に就きて以て之を贊揚す、典雅工整の至と謂はざる可けんや、その「五字」に意を用ひたるは想ふに韋も亦五言の體を能くするものなりしなるべし、獨り中書の故事に允協せるのみならず、是れ死事活用の法なり、「儼若

神仙去。紛從霄漢回。」是れ起二句を承くと雖も、專ら韋が早朝の狀を帶定して言ふなり、上段「玉珂」「珠履」亦早朝を狀するなり、然れども彼は百官を泛稱し、此は韋一人に就きて之を譽む、故に重複に涉らざるなり。「休曆」は休明の曆運の意、猶ほ昭代と言ふが如し、結一句は佺期自ら言ひ、この英才と同じく早朝するを榮とするの意なり。舍人は已に中書省に屬す、而して沈の考功郎は尙書省の部下なり、故に「分禁」と曰ふ、是れ後半段。

奉和幸長安故城未央宮應制　宋之問

漢王未息戰。蕭相乃營宮。壯麗一朝盡。
威靈千載空。皇明悵前跡。置酒宴群公。
寒輕綵仗外。春發幔城中。樂思廻斜日。
歌詞繼大風。今朝天子貴。不假叔孫通。

未央宮より蕭筆して起一段とし、天子の行幸を中一段とし、漢時の故宮なるに因りて、天子の聖德を頌し以て奉和應制の意を見る、これを結一段とす、亦各四句を以て一頓せり、用ふる所みな漢の本事、而して步步漢を抑し唐を揚す、立言歸重の體宜しく此の如くなるべきなり。

漢高(祖)始めて咸陽に都して、蕭何乃ち未央宮を修す、高祖見て怒つて曰はく、天下洶洶として戰に苦しむこと數載、成敗は未だ知るべからず、是れ何ぞ宮室を治むることの度に過ぎたるや、蕭何答へて曰はく、天子は四海を以て家と爲す、壯麗に非ざれば以て威を重くすることなしと、是れ蕭何營宮の意は實にその壯麗を借つて以て威を千載に保たんとするにあり、而して今は安くに在るや、壯麗已に盡きて威靈も亦空し、能く山河を千秋の下に固からしむるは宮觀の壯麗に非ずして人君の德澤に在り、これその的例に非ずや、この意を以て端を發す、美を唐の天子に歸するなり、直ちにその事を敍するに過ぎずして、中に無數の議論を藏す、眞に好觀なり。近代吳梅村(集偉)の絕句に云ふ、「蕭何相營私第。他年畏勢家。豈知未央殿。壯麗只棲鴉。」(蕭何)此は則ち蕭何が勢家の豪奪する所と爲らんことを畏れて、特にその私第を營むに、儉素を用ひたる事實を擧げ、彼がこの先見の明あるに拘らず、その君に勸めて徒らに宮殿を壯麗にし、終に亡國棲鴉の端と爲るを思はざりしは、國に忠なる者と謂ふべからざるの意と爲したり、然れども尺幅中に史家の鐵案を下したるは、極めて本篇冒頭四句の神を取りたるものに近し。

「皇明悵前跡」、は吾皇の明、彼の壯麗の一朝にして盡きたるを悵思するなり、爰に車駕をその地に出して、宴を群公に賜ふ、詞を設くる此の如くなれば、中宗の行幸賜宴は、是れ前代の興亡を鑒みたるものにして、逸豫を圖り荒讌に耽るものに非ず、極めて要緊なきの游觴も亦煞だ關係ある事と爲れり、これを詩人頌揚の體とす、「綵仗」は兵衞の儀仗、「幔城」は幕を張りて駐駕の所とす、卽ち帳殿の意なり、正に行幸を狀して、「寒輕」「春發」、一脈春臺熙熙の景象、洋洋として充滿せり。

魯陽公戈を揮つて白日の將に傾かんとするを廻す、詩家習用の典、用ひて以て唐の威靈を見るなり、この

讜の樂しき、正に日の晏けんことを恐る、幸に吾皇の威靈に賴りて、之を既に斜なるに迴すことを得たるなり、而して宸章の美なるは亦以て漢高が大風の歌詞に繼ぐべきものあり、漢の故城なれば漢高の本事を用ふるは自ら是れ當行の語なり、然れども仍ほ魯戈回日の一典を陪とするものは、この詩漢高を詠じたるものにあらざるを明かにせんがためなり、而して奉和の意、亦箇中に見はる、漢高の始めて天下を定むるや、叔孫通をして禮樂を制定せしめ、乃ち今日にして皇帝たるの貴きを知ると云へり、吾皇の如きは聰明睿聖威嚴莊重、自然に具備せり、豈に必ずしも叔孫を假りて後始めてその貴を知らん耶、是れ所謂立言歸重の意なり。

宋之問が應制の體に工なるは五言律詩にして下、已に屢、之を言へり、渠が人と爲りを以てその言を廢すべからざるはこれあるを以てのみ、我、七言古詩の下に於てその性情の僞なるを極言す、然れども應制の體はもと當代を諭揚するに在るを以て、時に必ずしも塗飾を妨げざるものあり、然り而して後世試律の源亦實に此に啓く、學者の尤も知らざるべからざる所なり。則天武后、龍門に幸せしとき、左史東方虬詩先づ成る、后之に錦袍を賜ふ、俄頃にして之間も亦詩を獻ず、后之を覽て嗟賞し、虬に賜ふ所のものを奪つて以て之間に賜ふ。是れ詩家の今に至るまで藉藉として歎羨する所のもの、亦渠が獨りこの體に擅なる所を見るに足れり。

奉和晦日幸昆明池應制

春豫靈池會。滄波帳殿開。舟凌石鯨度。槎拂斗牛廻。節晦蓂全落。春遲柳暗催。

象溟看浴景。燒劫辨沈灰。鎬飲周文樂。汾歌漢武才。不愁明月盡。自有夜珠來。

中宗正月晦日を以て昆明池に幸し詩を賦す、群臣應制のもの百餘篇に充ちたり。帝因つて綵樓を帳殿の前に結び、上官昭容に命じてその上に登り、詠進の什中に就き、特に一首を選して、新翻の御製曲に譜入せしむ、群臣みな樓下に集まり、爭つて何の詩のこの榮選に入るべきやを候す、須臾にして、紙落ちて飛ぶが如し、是れみな選に入らざるものなり、羣臣各〻その名を認め之を懷にして退く。惟〻沈佺期・宋之間が二詩の下らざるあり、時を移すに及んで、忽ち一紙の飛墜するを見る、競ひ取つて之を觀れば、乃ち沈佺期の詩なり、紙末に昭容の評語あり、曰はく、二詩の工力は悉く敵す、然れども沈が詩の落句、詞氣已に竭きたり、宋は猶ほ陡健にして鄉擧せりと、沈佺期乃ち伏して敢へて復た爭はず、是に於て宋之間の作獨り中に留り、叶樂の榮に與る事を得たりと云ふ(全唐詩話)。然れば之間のこの作は當時百餘篇の中に於て、特に第一甲の第一名を占めしものなり。通首典重高華、堂皇瑰麗、讀一過毎に未だ曾て上官昭容が鑑識の精、甄拔の當を嗟歎せずんばあらず。

起四句昆明池の行幸を領起す、是れ破題なり、次六句は二句毎に一層を成し、層層相銜んで生ず、蓋し晦日を寫すもの一層、池を寫すもの一層、幸を寫すもの一層なり、結二句是れ總束、晦日より翻進して巧に昆明に映帶せり、この二句用意の靈妙、實に渠が勁敵沈雲卿を屈服せしめたる所以なり。

昆明池は漢の武帝の創鑿せし所にして、則ち此池に關する許多の掌故の武帝の時に出づるもの最も多く、この詩亦所々に之を採りて以て一篇を組織したり。今先づ詩中用ふる所のものを玆に滙錄して然る後詩義の解釋を試みんとす、是れ讀者が披閲上に於て、尤も便益ならんことを思へばなり。按ずるに池中に豫章臺あり、石を刻して鯨魚と爲す、雷雨の至る毎に、この石鯨鳴吼して鬣尾みな動くと云ふ、又その側に石人二箇を安置し、牽牛・織女の形を刻みたり、是れ蓋し池を以て天上の銀河に比擬せしに由るなり、この篇三四の句之を用ふ、杜少陵が秋興にも亦、「織女機絲虛夜月。石鯨鱗甲動秋風。」と云へり、この諸物象の唐時に現存したりしを證すべきなり、武帝の初めてこの池を鑿するに當りて、池底より黑灰を得たり、帝怪しんで東方朔に問ふ、朔曰はく、碧胡僧の至るを待つて之に問ふ可しと、後、梵人竺法蘭の入朝に及び、之を問へば、世界滅絶の時、劫火洞燒す、是れ劫燒の餘灰なりと答ふ、即ち「燒劫」の句の用ふる所なり、又池中に神池と呼ぶあり、白鹿原に通ず、原上の人、魚を釣りしに、綸絶えて去れり、その魚武帝の夢に見はれ、口中の鈎を去らんことを求む、後、三日にして帝池上に游幸す、大魚の索を銜んで游泳するを見る、帝曰はく、豈に朕が夢みし所のもの歟と、因つて鈎を去つて放ち遣らしむ、又三日にして帝復た池濱に至るに、明珠一雙を得たり、帝曰はく、豈に昔魚の報耶と、事は三秦記に見ゆ、末句「自有夜珠來」この事を活用したるなり。

「春豫」は春日當に游豫すべきの時、故を以て天子昆明の靈池に幸し、百僚を會して讌を賜ふ、滄波溶溶として帳殿正に開けり、乃ち桂舟に棹して石鯨の側を凌ぎ、牽牛織女の像畔を度れば、恍乎として眞に天漢に泝るが如く、宛も彼の張騫の一槎の斗牛を拂うて回るの想あり、以上四句、昆明游幸、盡く之を包括す、

絶妙の起法なり、蓂莢は瑞草、王者賢聖なるときは階下に生ず、この草、月初より月半に至る、日に一莢を生じ、十六日より月末に至る日に、一莢を落し、晦日に至つて盡く、この日卽ち晦日なるを以て「節晦蓂全盡」と云へり、これに由つて晦日たるは明白なれども、未だその何月たるやを知るべからず、故に早春の光景「春遲柳暗催」の一句を補寫し、その正月たるを點醒したり、昆明の池はもと滄溟に象る、その廣きこと海の如くなれば出日の浴景を看るに宜し、而して池底已に劫灰ありと傳ふれば、正に復た之を檢點すべきに堪へたり、今日の游豈に樂しからずや、周の天子諸侯を讌して、諸侯之を歎美し、魚藻の篇を歌ふ、その詞に曰はく「王在在鎬。豈樂飲酒。」と、是れ鎬飲の事、又漢の武帝汾陰后土の祠に幸し、群臣と讌して歌甚だし、卽ち自ら秋風の辭を作りて之を歌ふ、是れ汾歌の事、周漢帝王の盛事、援し來つて今日の美の此等に嬉ぶべきことを見るなり、或は晦日、月なきを以て遺憾なりとするものあらん、然れどもこれ亦決して愁ふ可きを見ず、何となればこの池固より一雙の明珠の以て月光に代ふべきものあればなり、「明月」「夜珠」、語に關照あり、亦尋常習用の文字に屬す、而して此を本篇の結處に置きて覺えず一は晦日に切に、一は昆明に切なり、是を神に入り化に入ると曰ふ、昭容、一女子にして爾く、その陡健蕭擧を稱す、豈に慧眼の人に非ずや。

沈佺期の作も亦一時の選、終に宋に一籌を輸すと雖も、固より昭容をして暫くその優劣を判ずるに躊躇せしめたるものなり、因つて後に具錄す。

法駕乘春轉。　神池象漢回。　雙星遺舊石。　孤月隱殘灰。
戰鼓逢時去。　恩魚望幸來。　山花綴騎繞。　堤柳幔城開。

思逸横汾唱。　歡留宴鎬盃。　微臣雕朽質。　羞覩豫章材。

按ずるにこの詩「孤月隱殘灰。」は晦日月隱れて見えざると、池底の劫灰見るべからざるとを、五字の中に雙關す、その工緻亦之間の作にも見えざる所なり、結末落ちて自家の身上に到り、池に豫章臺あるを以て借つて謙遜の意を表す、完整ならざるに非ず、唯、結末に作者の身分を見るは應制の常套にして、宋が作の善く意表に出づるが如くならず、昭容の所謂落句詞氣已に竭くとは此を謂ふなり。

和姚給事寓直之作

清論滿朝陽。　高才拜夕郎。　還從避馬路。
來接珥貂行。　寵就黃扉日。　威迴白簡霜。
柏臺遷鳥茂。　蘭署得人芳。　禁靜鐘初徹。
更踈漏漸長。　曉河低武庫。　流火度文昌。
寓直光輝重。　乘秋藻翰揚。　暗投空欲報。
下調不成章。

これ亦寓直に和する詩、沈佺期の「酬蘇員外寓直省中」の作に似たり、姚給事、時に侍御史に因つて門下省の給事黄門の職に遷陞す、詩併せてその事を言ふ、則ち又は蘇味道が「聞崔馬二御史並登相臺」の作と相似たり、その用ふる所の故事の彼の二篇と相出入するものあるはこれが爲なり、詩前後二大段、各〻八句を以てす、「清論」より「蘭署」の句に至る、姚が給事黄門の官を拜せしに筆を起し、その侍御史たりし日善くその職に協ひたる事を追言して、省官の人を得たるを喜ぶなり、是れ前大段、「禁靜」の句より末句に至る、先づ姚の寓直の景を狀し、その詠藻あるを寫し、終に自己が和章を賦したる謙下の意を以て結とす、是れ後大段なり、更に之を析說すれば、仍ほ四句毎に一頓したるものと看て妨げなきなり。

唐の省官多く清を以て稱すること、前きに已に注明したるが如し、「清論」とは省中の論議なり、「朝陽」は朝日、以て禁廷に擬す、姚が高才の名、籍籍として廷闕に滿ちたるを謂ふ、是を以て入つて給事黄門の職を拜する事となりたるなり、漢制、給事黄門の職は日暮に青瑣門に入對す、故に「夕郎」の名あるなり、後漢の桓典侍御史と爲り、宦者之を畏憚す、典は常に驄馬に乘ぜり、京師これが爲に語つて曰はく、「行行且止まり、驄馬の御史を避けよ」と、是れ「避馬」の故事、侍中の冠は貂尾を以て飾とす、珥は挿の義なり、則ち給事黄門の官の戴く所なり、姚が名聲の藉甚なりしは、その侍御史たるとき、彼の桓典が如くに、人に畏敬せられたるに由るものにして、今や夕郎を拜す、則ちこの貂冠の班列に入りしなり、故に「還從避馬路。來接珥貂行。」と曰ふ、黄扉は黄門なり、御史の彈文は白簡を用ひ、その威風霜の如きに象りて又、霜臺の名あり、「寵就黄扉日。」と云ふは姚が新たに給事と爲りしを申言するものにして、就日の語は自ら冒頭の「朝陽」に吸應せり、「威廻」の句は御史たりし日を申言するなり、「柏臺」の烏鳥、是れ御史の事、「蘭署」は卽ち省

臺なり、この二句亦唯、その前後の官職に就きて之を言ふ、曰はく「茂」、曰はく「芳」、姚を贊美する所以なり。前大段。

姚已に省官と爲りたれば、例に準じて禁中に寓直せざる可からず、禁闕鐘靜かに宮漏更長し、天上文昌・武曲の二星、紫微大帝の居に相鄰れり、宮廷の制作亦之に準じ、正殿の左右、一を武庫とし、一を文昌殿とす、曉天の銀河は漸く武庫の上に低れ、七月の流火は正に文昌殿の角を度る、天のまさに曙けんとするを言ふ、流火は流星、詩經に「七月流火」（豳風七月）とあり、之を用ふ。以上直夜見る所の景、因つて次句「寓直」の二字を以て之を一束し、又直ちに「光輝重」の三字を以て姚が榮遷の意を申べ、前大段をも總束したり、姚是に於てか寓直の詩あり、その藻翰彩を騰ぐ、終に我に示して和を求めらる、是れ明珠の暗投に非ざるを得ん耶、何となれば我の如きは固より巴人下里の調、强ひて之が和を試みんとするも實に章を成すこと能はざるものなればなり、漢の鄒陽が上書に云はく、明月の珠、夜光の璧も、暗夜人に投ぜば、衆劒を按じて相盼まざるはなしと、この語之を此に用ひ、上文「流火」「光輝」等の詞に相映發して、異樣の組織を成す、是れ文字の灰線なり。後大段。

前後の二段穩匀停妥、蘇味道・沈佺期等が作と相對して、練格の法を發明すべし、初學の士、尤も宜しく回味を施すべきなり。

早發始興江口至虛氏村作

候曉踰閩嶂。乘春望越臺。宿雲鵬際落。
殘月蚌中開。薜荔搖青氣。桄榔翳碧苔。
桂香多露裛。石響細泉回。抱葉玄猿嘯。
銜花翡翠來。南中雖可悅。北思日悠哉。
鬢髮俄成素。丹心已作灰。何當首歸路。
行翦故園萊。

これ宋之問、中宗卽位の初、張易之が黨なるを以て嶺外に配謫せられし時の作なり。始興江は廣東の韶州府治に在り、卽ち古への閩越の地なり、起四句、早發を領起し、中八句南中の風物を歷敍し、反挑して謫遷の懷に入る、結四句は旅況蕭條の狀を述べ、以て召還を望むの意を致したり。

曉に始興江口より發して閩中の嶂嶺を踰ゆれば、則ち遙かに越王臺を望む、臺は漢の初め南越王趙佗の山に因りて築きしものなり、北溟の鯤化して鵬と爲りて南溟を圖る、「鵬際」と云ふものはその地の南陲たるを見はさんが爲なり、明月の珠は蚌中より生ず、蚌は亦南海の產する所、二語並に下文の南中の風物を開出する所以にして、鵬を以て「宿雲」を形容し、蚌を以て「殘月」を形容したれば、亦實に早發の光景を帶言す

るなり、筆勢「候曉」より一氣串下して、以て後の一段を轉出す、開闔卷舒の妙を極む。

「薜荔」「栁椶」の句より「玄猿」「翡翠」の一聯に至る、是れ題面の「至虛氏村」の間に見る所のものにしてみな南土の風光なり、薜荔は藤蘿の一種、栁椶は棕櫚に類し、南中の特產たり、玄猿・翡翠亦尤も多く南方炎熱の地に產す、「青氣」は嵐翠の氣なり、曰はく「搖」、曰はく「翳」、曰はく「多露」、曰はく「細泉」、妙は並に曉景を離れざるに在り、「南中雖可悅」、一句、上無數の景物を收攝し、「北思日悠哉」、一轉して鄉國の感に入る、語格散に似て散ならず、これ轉接の尤も筆力を見るものなり。

謫遷憂鬱の甚だしき鬢髮も亦已に變じ、丹心も亦已に灰したり、何時か恩赦の命を得て歸路に首途し、故園の菜菜を剪つて之を餐するの日を見ることを得ん歟、結四句は南中の悅ぶべきを見ると雖も、終に北思の懷を去る能はざる所以を言ふ、首は「向」の義なり、菜は是れ故園の風物、上の南中の風物に映合せしむるなり。

放臣逐子、侘傺彷徨して艱苦を備嘗すと雖も、その君國を念ふの至誠は曾て一日も之を忘れず、是に於て始めて耿耿の懷を見るなり、乃ち謫遷の苦、頭髮をして白からしむるものあるも、豈にその一片の丹心をして變じて灰と爲らしむべけんや。「丹心」の五字、適〻その苦況を形容するの語に過ぎず、然れども之間が人と爲り、覺えず言表に盎出す、その心術の壞、掩ふべからざるなり、若し深文酷論者ありて、直ちに此を拈して、その不忠不義を自白せしものなりと云ふものあらば、知らず之間將た何の語を以て之に答へん。

同餞楊將軍兼原州都督御史中丞　蘇頲

右地接龜沙。　中朝任虎牙。　然明方改俗。
去病不爲家。　將禮登壇盛。　軍容出塞華。
朔風搖漢鼓。　邊月思胡笳。　旗合無邀正。
冠危有觸邪。　當看勞旋日。　及此御溝花。

蘇頲は開元中、相位に登る、燕公張說の姚元之と合はずして岳州に謫せらるゝや、その上る所の「五君詠」を讀み、歔欷流涕して以て說を釋さんことを玄宗に奏請せしものなり（詳かに五律張說の條下に見ゆ）、この篇楊將軍が新たに原州都督を以て御史中丞を兼ね、出でゝ邊塞を鎭するを送るの詩なり、既に出でゝ邊塞を鎭す、重んずる所は原州都督に在り、故に詩中專ら武將の事を極寫し、略〻餘筆を以てその御史中丞たるを帶言せり。

霍去病兵を將ゐて匈奴の右地を擊ちしこと史に見ゆ、「右地」は匈奴の界域にして唐の原州なり、「龜沙」は龜茲・流沙の兩地を合稱す、龜茲は西域の國名、流沙も亦塞外の西地なり、この兩地に接壤したるの右地、即ち楊將軍が出でゝ鎭するの所たり、漢に虎牙將軍の名あり、虎牙はその威を稱する所以、「中朝任虎牙。」とは今、楊が原州都督を拜せしを言ふ、後漢の時張奐邊將と爲り、身を正し己を潔くして威化大いに行はる、復た武威の太守を拜せしに、その俗妖忌多し、奐、示すに義方を以てし、嚴に賞罰を加へ、風俗遂に改まる、百姓爲に生祠を立つるに至れり、奐が字を然明と曰ふ、又、漢武、霍去病の爲に邸宅を營む、去病辭して曰はく、匈奴未だ滅せず、何ぞ家を用ふる事をせんと、今二事を用ひて以て楊が邊土の亞俗を化する張奐の如く

王事に勤勞してその私を思はざる霍去病の如くならんことを望むなり、壇に登り將を拜す、天子の楊を禮するや盛なりと謂ふべし、則ち塞を出で軍を統す、楊の國光を耀かすや華ならざるべからざるなり。前半段

朔風慘澹として沙を卷き來るも、君は當に大いに漢鼓を鳴らして以て胡人を震懾すべきなり。邊月の凄清として城を照らすに當つても、君は當に高く胡笳を吹いて以て敵兵を潰散すべきなり、孫子に謂はずや、正正の旗を邀ふる無れ、堂堂の陣を擊つ莫れと、胡兵悍驚ならざるに非ずと雖も、洵に何を以てか我が正正の旗に當ることを得ん、況んや君が身又御史中丞を兼ねたり、その戴く所の獬豸冠は峩然として頭上に危立し、邪を見れば直ちに之に觸れんとするに非ずや、吾、此を以て君が奏功凱旋遠からず、この御溝の花、明年盛に開くの候は、君が重ねて京闕に朝するの時たるを信じて疑はざるなり。後半段

「朔風搖漢鼓。」搖の字震撼の意と爲して見るべし、「邊月思胡笳。」思は悲思の思なり、然れども笳聲の悲を聞いて以て家を懷ふと做して解するを休めよ、是れ彼の劉越石が笳を吹き敵を走らすの故事を用ひたるなり、「旗合無邀正。冠危有觸邪。」二句警健比なし、御史が冠の事は蘇味道の詩中に詳釋す、參觀すべし。

奉和聖製途經華嶽　張說

西嶽鎭皇京。中峯入太清。玉巒重嶺應。
緹騎薄雲迎。白日懸高掌。寒空映削成。
軒遊會神處。漢幸望仙情。舊廟靑林古。
新碑綠字生。群臣願封岱。廻駕勒鴻名。

開元十二年、張說、既に玄宗の寵遇を蒙り、麗正書院の修學使と爲り、諸學士と共に或は書を修し、或は講に侍す、因つて首として封禪の議を建て、古聖王の例に因つて東岳岱山に幸し封禪せんことを請ふ、群臣從つて之を贊し、交〻上表して張が議を採用せられんことを勸めたり、時に玄宗東都に幸せんとし、途華山を經て御製の長律一篇あり、張說、乃ちこの篇を作り、併せて封禪の宿議を聽容せられんことを望むの意を致したるなり、華山は五嶽の西嶽にして、遙かに岱山と對峙せるもの、上に神仙の遺蹤多し、因つて以て之を歷陳し、便に順うて玄宗が東岳に幸するの心を聳動せんとす、封禪主唱の本意を貫徹せんとするに力めたるものと謂ふべし、詩は二句毎に一頓す。

首二句は西嶽華山を正寫す、この山遙かに終南山と相接して唐都長安の望たり、故に皇京を鎭すと曰ふ、「太淸」は天なり、中峯高く聳えて天に冲するを謂ふなり、「玉巒」の二句は乘輿の華山を經過するを寫す、「重嶺應」とは鑾鈴鏘鏘として山谷に響應するなり、緹は丹黃色なり、侍衞の兵士みな緋韋を以て服とす、故に「緹騎」と曰ふ、雲、緹騎を迎ふ、明かに天子の駕の山中に入るなり、「白日」の二句は西嶽の所見、華山は上に五崖あり、下より之を望めば偶〻掌形を成せり、相傳ふ巨靈神、手を以て太華小華を擘開し以て黃河の流を通ず、その掌跡仍ほ存すと、又、華山記に華山の四面は峻しくして削成せるが如しと云ふ、二句直ち

にその景を寫して高寒逼視すべからざるの氣あり、「軒游」の二句は是れ西嶽の故事、軒游は軒轅の游幸を約言す、軒轅は黄帝なり、史記の封禪書に云ふ、天下の名山は八あり、三は夷嶽に在り、五は中國に在り、華山・首山・太室山・大山・東萊山、この五山は黄帝の常に游んで神と會する所のものなりと、漢の武帝華山に幸し、望仙宮を作りて歳時に祈禱す、卽ち「漢幸」の句の指す所なり、特にこの二事を援引せるものは、玄宗が封禪の禮を擧げんことを慫慂せんとすればなり、「舊廟」の二句は西嶽の神祠を言ふ、華陰縣東に西嶽廟あり、廟に玄宗の製する所の華山碑あり、この詩「新碑」と云ふは當時の建設せる所なるを以てなり、相傳ふ、洛書の五十六字は皆絲なりと、「絲字」の二字此に本づく、末二句は封禪を望む所以にして一篇の本意なり、岱は東嶽岱山なり、封禪の儀特に東嶽を重んずるものは五嶽の首たるが故なり、己れ之を主唱し群臣亦頻りに之を請へるを以て、今玄宗西嶽に幸せられしの序を以て、駕を東嶽に廻らし、泰山に封し梁甫に禪して長く鴻名を萬古に勒傳せんことを禱盼するなり。

張說がこの議、當時源乾曜の之を沮止せんとせしに拘らず、終に玄宗の允容する所と爲り、開元十三年の十一月を以て泰山に封禪すべき旨を決す、說、因つて集賢の諸學士とその儀注を起草し之を上り、先皇睿宗を以て皇地祇に配して之を祭らんことを請ひ、又、兵部郎中裴光庭の建議を以て、突厥其他の外國の使臣を徵して從封の列に入らしむ、多十月玄宗の車駕東都を發す、百官・貴戚・四夷・酋長、盡く蹕に扈して從行し、數十里中人畜野に被り、有司の供具の物を載送する數百里絶えず、十一月泰山に詣り、從官を谷口に留め、帝騎馬して山に登る、從ふものは惟〻說等數人のみ、帝、禮部侍郎賀知章に問うて曰はく、前代玉牒の文何故に之を祕するや、知章對へて曰はく或は密かに神仙を求む、故に人の見を欲せざるなり、帝曰はく吾は蒼生の

爲に福を祈るのみと、乃ち玉牒を啓いて群臣に宣示し、昊天上帝その餘五帝百神を祀り、帳殿に御して朝覲を受く、是に於て封禪の禮全く畢れり。時に張說多く自己が所親の僚屬を引いて山に登り、恩賞賚賜獨り厚く、その餘の百官に及ばず、中書舍人張九齡頻に諫むれども聽かず、爲に中外の怨望を來たせしと云ふ。張說・姚・宋の後を承け、玄宗の信任殊に渥く、開元の治化を襲贊したりしもの、固より尠少にあらずと雖も、玄宗の色に溺れ仙に荒み、以てその後半截の壞を馴致したりし所以のもの、燕公封禪の一議寔に責を免るる能はざるものあり。因つて史傳の正文に據り、その事實を詩下に繫けて、聊か人を知り世を論ずるの資に充つ。

奉和聖製早度蒲關

張九齡

魏武中流處。軒皇問道廻。長堤春樹發。
高掌曙雲開。龍負王舟度。人占仙氣來。
河津會日月。天仗役風雷。東顧重關盡。
西馳萬國陪。還聞股肱郡。元首咏康哉。

蒲關は黄河の西岸に在りて、唐の河中府河西縣に屬す、玄宗の駕此を度りしは、蓋し上の張說の詩「華嶽

行幸」と同時の事にして、華山より歸途乃ちこの關を過ぎりしなり。この詩も亦、四句一解と做して看るべし。首句は蒲關の地、次句は行幸、「長堤」の二句は蒲關の曉景、以上を一解とす、第二解四句は、專ら車駕の蒲關を早度する狀を鋪敍し、第三解四句は、已に關を度りて後、玄宗の御製あるを述べて結としたり。

魏の武侯、吳起と俱に西河に浮かび、中流に下り、顧みて起に謂つて曰はく、美なるかな山河の固、これ魏國の寶なりと、西河は卽ち黃河の西なり、因つて蒲關を「魏武中流處。」とは謂ひたるなり、昔は則ち魏武が舟を中流に泛かべし處、今は則ち天子の車駕の此を經過するあり、「軒皇」は黃帝、その崆峒に行きて道を廣成子に問ひし事は上の李僑の詩に見えたり、この作黃帝を借言せるは、玄宗華山より廻駕の途次なればなり。長堤の春樹是れ黃河の岸、高掌の曙雲是れ華山の巓、二語蒲關の曉望を寫すと雖も、語脈は上の二句を分承したり、禹、南征して江を濟るに、黃龍あり出てゝ舟を負ふ、これ借用して玄宗の駕の黃河を渡るに喩ふ、老子青牛車に乘じて函谷關を過ぐるに、關尹喜先づ東來の紫氣あるを認めたり、これ玄宗の駕の蒲關を度るを形はす、又、唐の國姓は李にして老聃の苗裔と稱するを以て、特に老子の事を用ひたるなり、「人占」の占は占卜の占、是れ占領の占に非ず、仙氣は則ち所謂東來の紫氣なり、天子の旌は日月を畫がく、故に「河津會日月。」と曰ふ、「役風雷」とは天仗儀衞の盛、風雲を驅使し、雷霆を鞭役するの勢あるを景容したるのみ、玄宗既に關を過ぎ、乃ち更に西して長安に歸る、是を以て、東に顧みれば重關盡くと云ふ、「萬國陪」は當時突厥諸蕃の使者亦扈駕の列に在るなり、漢の文帝曰はく、河東は吾が股肱の郡なりと、これ蒲關は重要の地たるが故に之を用ひ、以て舜の皐陶と賡歌せる事に湊合す、皐陶の賡歌に曰はく、「元首明哉。股肱良哉。庶事康哉。」(書經・益稷)と、以て玄宗の聖製に比し、蒲關は股肱郡なるが故に、「元首」の天子

乃ち「康哉」を詠ずと云ふの義となしたり。既に文帝に股肱郡の語あるに由つて蒲關を指稱し、又皐陶の賡歌に「股肱良哉」の語あるに由つて聖製を比擬す、全く兩箇の典故を、「股肱」の二字を以て串下して一事と爲せしものにて、是を兩層を一層と做して用ふるの法と曰ふなり。

玄宗の御製亦能く沈着蒼健にして、曲江が和章に讓らず、云ふ。

鐘鼓嚴更曙。山河野望通。鳴鑾下蒲坂。飛旆入秦中。
地險關逾壯。天平鎭尙雄。春來津樹合。月落戍樓空。
馬色分朝景。鷄聲逐曉風。所希常道泰。非復棄繻同。

「春來」の四句、能く度關の早景を寫して、眞に畫中を行くの想あり、曲江は則ち「長堤春樹發。高掌曙雲開。」と云ふ、同じく早度蒲關の景と雖も、一は止〻見る所を卽賦し、一は奉和聖製の意を以て重とす、故に互に詳略あり、亦以て一時賡酬の體を辨識するに足る、凡そ此の時代に在つて和と云ふはその韻を用ひず、亦その韻を次がず、唯、その體に準依して之に和するのみ、故に原唱古體なれば和章古體を用ひ、律體なれば則ち亦律體を用ふるに過ぎず、彼の用韻次韻は元・白に濫觴し、皮(日休)・陸(龜蒙)に擴充す、卽ち中晩以後の格たるを知るべし。

和許給事直夜簡諸公

未央鐘漏晚。仙宇靄沈沈。武衞千廬合。

嚴扃萬戸深。　左掖知天近。　南窗見月臨。
樹搖金掌露。　庭接玉樓陰。　他日聞更直。
中宵屬所欽。　聲華大國寶。　夙夜侍臣心。
逸興乘高閣。　雄飛在禁林。　寧思竊抃者。
情發爲知音。

この詩は前半截直夜の光景を寫し、後半截許給事が諸公に簡するの詩あるに因り、その才藻を稱揚し、自己が之に和するの意を以て結びたり、則ち通計十六句、前後各、八句を以て一段とするを可とすべきなり。

未央の殿闕、鐘鳴り漏響いて、正に天晩を報ず、九重の仙宇、暮靄漸く合して沈沈として寂靜に赴けり、宿衞の武士は各、交代して、その直廬に屯し、綸扉の鎖鑰はみな嚴扃せられて、萬戸悄然たり、以上四句泛ろに宮城の晩景を寫し、以て直夜の發端とす、然れども實は未だ許給事が宿直の所に寫し到らざるなり。

左掖は門下省なり、已に五律の部に詳注せり、門下省は天庭に咫尺し、その直廬は南に面したれば、窗を開けば明月の直入するあり、樹上の露光は晶晶として、仙人が金掌の上に搖くかと疑ひ、庭面の煙氣は蒼蒼として、直ちに至尊が玉樓の陰に接す、以上四句は直夜の光景、併せて許給事が宿直の所を點ず、然れども猶ほ未だ許給事その人に寫し到らざるなり。

「他日」の四句は許給事その人を寫し併せてその諸公に簡するの詩あるを見はす、他日と云ふものは給事が詩簡を接見せしの日なり、この二句は對語中に散法を用ふ、宜しく讀んで「他日聞更直。中宵屬所欽。」と爲すべし、所欽とは吾が欽仰する所の友なり、その意言ふ、當夜は未だ彼の門下省宿直當番の何人なりしやを知らざりしが、他日給事の詩簡を接するに及んで、始めてその中宵に更代して直廬に入りしものは吾が欽敬する許給事なりしを知りきとなり、「聲華大國寶。」は欽敬の意を申して許給事が才賢を贊し、「夙夜侍臣心。」はその宿直に因つて黽勉懈らざるを稱するなり、是に於て給事その人寫し到らざる所なし、餘す所は唯、その詩の如何なりしのみ。

故に「逸興」の二句は專ら給事が詩を歎美す、然れども上に「夙夜侍臣心」の句を頂するときは、給事は斷として吟詠に耽るが爲に職事を曠廢するものに非ず、その語に分寸ある處に注意すべし、此段の命意は大抵彼の沈佺期が「冠劍無時釋。軒車待漏飛。」（酬蘇員外味玄夏寓直省中見題）と同意なり、偶、高閣の逸興に乘じ、詩を賦して以て寄せらる、之を觀るにその才藻の美なる、誠に禁林に雄飛するに足るべし、是に於て我亦技癢を禁ぜず、聊か爲に一章を和す、魏の曹植謂はずや、音樂を聞いて竊かに抃舞するものは、或は音を賞して道を知ることあればなりと、我が和章も亦此の如く、知音の爲に情發して自ら禁抑すべからざるものあるが故のみ、君寧ろ之を思へや、幸に才を爭ひ氣を鬪はすものと誤認する勿れ、筆を用ふる婉曲にして味あり、宋之問が「暗投空欲報。下調不成章。」（和姚給事寓直之作）と云ふの僞謙を事とするものに較ぶれば、措詞は或は拙なりと雖も、轉た曲江が宰相の風度を見るなり。

酬趙二侍御史西軍贈兩省舊寮之作

石室先鳴者。　金門待制同。　操刀常願割。
持斧竟稱雄。　應敵兵初起。　緣邊虜欲空。
使車經隴月。　征旆繞河風。　忽枉兼金訊。
非徒秣馬功。　氣清蒲海曲。　聲滿柏臺中。
顧己塵華省。　欣君震遠戎。　明時獨匪報。
常欲退微躬。

これ亦分ちて兩半截とす、上半は趙が侍御史の官を以て出でて西軍に從役するを言ふ、下半はその兩省の舊僚に贈るの作あるに因り之に酬いるの意を致せり、布置結構總べて上の一篇に同じ。

漢の制、闕臺に石室ありて、祕書を中に藏し、御史中丞をして之を掌らしむ、「石室先鳴者。」とは趙が侍御史となりてより夙に令名ありしことを言ふ、金馬門の待詔は才技を以て召されて未だ正官に就かざるものを指す、次句の意は、趙が始めて召されて制を金門に待ちしときは、嘗て己れと事を同じくせしを言ふなり、この發端趙を以て主となすと雖も、同の一字に於て作者自己をその中に包含せしめ、以て結段の地を爲した

り、「操刀願割」は左傳鄭子產の語を用ふ。彼は曰ふ、未だ刀を操る能はずして割せしめば、その傷實に多しと(襄公廿一年)、これは其義を翻案して盤根錯節の利器を試みんとする意に換用したり、「持斧」は亦漢の侍御史の事、その出でゝ繡衣直指使者と爲りたるときは、斧を持して盜賊を糾捕するを例とす、この二句の意は趙は嘗て己れと同じく金門に在りし日より、常に武事に心を委ね、以て才器を試みんことを願ひしが、今は竟に侍御史と爲り、出でて邊塞に使する身となりたれば、洵にその初志を貫きたるものと謂ふべしとなり。單に字面の上より之を解釋するも、既に操刀を以て願とせば、斧を持し雄と稱するは、固よりその本願たるべきなり、「常」の一虛字、上文「同」の一字より生出し、又、「竟」の一字を以て第一句の侍御史の官に繳還す、斡旋の力、七石の弓を挽くが如し、趙は已にして果して西域に從軍す、然れどもこれ固より敵に應じて兵を起すのみ、我より戰を好みて徒らに邊釁を開きしに非ず、王者の師は當に此の如くなるべし、是を以て君一たび出てゝ緣邊の胡虜を一掃し、今や殆ど將に空しからんとす、蓋し使車堂堂として隴頭の月に驅り、征旆悠悠として河上の風に靡かば、何人か風を望んで却走せざるものぞ、二句力を極めて鋪張す、實に趙が滿心得意の秋たればなり。

「兼金」は孟子の語(公孫丑・下)、その價常金に兼倍するを謂ふ、以て趙が贈詩に比するなり、君の武威已に前陳の如くして、忽ち復たこの瓊瑤の贈を枉ぐ、然れば君は固より獨り秣馬の功を以て重んぜらるゝものに非ず、君が才は實に文武を兼ねたるなり、故に氣は蒲海の曲を清めたり、その武功を申するなり、而して亦聲は柏臺の中に滿ちたり、その文才を申するなり。蒲海は蒲類海にして、塞外の西北に在り、柏臺は屢〻見えたる如く侍御史の府を云ふなり。「氣清蒲海曲。」以て隴月河風を結び、「聲滿柏臺中。」以て石室金門に應じたり、

以下四句は發端に趙と自己とを雙提したれば、自己の身上により筆し、趙が詩を見て趙が功を思ひ、己れ獨り上に報ずる所なきを愧とす、曰はく深く自ら己れを顧みるに、我は嘗て君と同じく制を金門に待ちしものなり、而して徒らに華省の職を廢すのみ、明時に素餐して、碌碌として主恩に報ずるの功なし、今君が武威の遠きに震ふと聞きては、益〻惶悔に堪へず、この上は唯〻速かに微躬を引退して以て尸位の譏を免れんと欲するのみと、これを讀み畢りて始めて起頭に自他を雙含せしめたる命意を恍然開悟すべきなり。

奉和聖製送尙書燕國公說赴朔方軍

宗臣事有征。　廟算在休兵。　天與三台座。
人當萬里城。　朔南方偃革。　河右暫揚旌。
寵賜從仙禁。　光華出帝京。　山川勤遠略。
原隰軫皇情。　爲奏薰琴倡。　仍題珎劒名。
聞風六郡勇。　計日五戎平。　山甫歸應疾。
留侯功復成。　歌鐘旋可望。　枕席豈難行。

四牡何時入。　吾君聽履聲。

史に徵するに開元九年、張說兵部尙書と爲る、その歲朔方節度使を置き、單于都護府夏壇等の六州、及び定遠・豐安の二軍、三受降城等を領せしむ、その明年夏四月、說をして朔方軍の節度使を兼ねしめ、同閏五月說、朔方に如き邊を巡す、此に據れば本篇は則ち開元十年の事なり、是より先、說、首相姚崇と合はず、左遷せられて檢校幽州都督幷州長史たり、五律に收むる幽州夜飲は蓋し當時の作なり、是に至つて姚崇已に薨ず、遂にこの恩命を拜することを得たり。九齡は說に於て同宗の譜を聯ね、その大いに玄宗に用ひられしも亦燕公の推薦に出づるもの多し、曲江集に張燕公を祭るの文あり、その起手に云ふ、維れ年月日族子祕書少監集賢院の學士九齡、謹んで淸酌少牢の奠を以て敢へて燕國公の靈に昭告す云云と、曲江自ら族子と稱す、是れ大父行を以て說を待つなり、又云ふ、惟れ小子夙に深期を荷ひ、一顧して價を增す、駑駘の數ふるに足るに非ざるも、蓋し枝葉として以て貽さると、深くその知遇を感じたるもの〻如し、本篇の燕公が朔方に行くを送りて、直ちに山甫留侯を以て望を屬するもの、偶然に非ざるなり、起四句は燕公の恩命を拜する所以、次四句は燕公の出京、次四句は天子詩を賜うて送別せられしの榮を紀し、次四句はその靖邊の功を奏せんことを期し、末四句は其功成りて還京せんことを望む、段落尤も分明にして鋪藻鴻麗、眞に廊廟瑚璉の選なり。

燕公當時兵部尙書を以て同門下中書三品たり、位已に群臣に冠す、故に宗臣と謂ふ、漢書蕭何・曹參を贊して一代の宗臣なりと云へるに本づくなり、この倚託正に重きの宗臣を以て、出で〻遠く朔方に赴かんとす

るものは、他なし、吾皇の廟算兵を休め寇を綏んずるに在るを以てのみ、按ずるに玄宗夙に邊境を開き大いに武威を外國に耀かさんことを期す、是を以て終に窮兵瀆武の譏あり、今、開邊と言はずして「休兵」と言ふものは、文に臨み諱を避け、以て應制奉和の體に諧ふ、一は臣子の肯へて斥言せざるの意を見、一は天子の意眞に此の如くならんことを望むなり、天已に燕公に與ふるに三台の首坐を以てし、而して天子は又人を以て萬里の長城に當てんと欲するを以て、今日朔方の行、この宗臣を煩はさゞるべからざるに至りしなり、「萬里城」の句は檀道濟の語を用ひ、人を以て城に當て倚つて以て重きを爲すの意なり。

今や朔南の地方に漸く兵革を偃息せんとするも、河右の疆、猶ほ烽火の燃ゆるあるを以て、暫く征旌を揚げざるべからず、極めてこの行の已むべからざるを言ひて以て、第二句「廟算在休兵。」に呼應したり、「方偃革」「方」の一字、將に息まんとして未だ息まざるの意を含み、「暫揚旌」「暫」の一字、已むを得ずして暫らく兵を用ふるの義を見はす、亦虛字斡旋の妙なり、是を以て燕公は終に恩命を奉じ、九重の寵錫を仙禁より受けて、無上の光華を一身に荷ひ、以てこの漢京を出發せらるゝ事となりたるなり、寵錫の句勢を趁うて聖制の事を逗出し、筆先の意は已に飛んで下文に渡る。

燕公がこの寵錫を辱くせし所以は、その恩遇の優渥なるに由ると雖も、亦實に天子の夙に遠略を勤め、天下山川の形勢、瞭として諸を掌に指すが如く、從つて朔方の原隰の殊に至尊の皇情を軫動したるに出でずんばあらず、これが爲に特に虞舜が薰風の琴を鼓して、以て御製の詩篇を賜ひ、又、漢の章帝が琵琶劍題名の故事によりて、親署の寶劍を賜はりしなり。原隰は詩の「皇皇者華」の篇中の語、而して皇皇者華の篇は天子使臣を遣るの詩なり、本篇の特にこの字面を擇びし所以を悟るべし、舜琴の事は習見の典、必ず注せず、

琵は寶の古字、瑤と混視することなかれ、後漢の章帝、尙書韓稜・鄧壽・陳寵三人に寶劍三口を賜ふ、その上に御筆を以て各、その姓名を書し、之を刻されてありしと云ふ、薰琴は天子の文事、借つて御製を形はし、寶劍は武器にして又尙書の故事あり、以て說が朔南節度使たるに切ならしむ。

燕公が京師を出る、爾く煌煌として光華あり、先づ以て四夷の膽を奪ふに足る、是を以て吾、知るその朔方に趨くや、六郡の兵壯、風を望んで勇躍し、響の應ずる如く、五戎の敵虜日を計りて鎭平せんこと、風の葉を掃ふが如くならんことを。仲山甫の齊に徂くや、詩の大雅は「式て其の歸るを遄かにす」(雲)と歌へり、吾、燕公の凱旋一に仲山甫の如くならんことを願ふ、留侯は漢を扶けて功を成す、吾、燕公の成功、亦張良の復生と稱するに足らんことを冀ふ、「六郡」は金城・隴西・天水・安定・北地・上郡を稱す、漢の時趙充國この六郡の良家の子を以て羽林郡に補充したることあり。「五戎」は戎夷に匈奴・穢貊・密吉・單于・白屋の五種あり、故に云ふなり、曲江が祭文に云ふ、聖后を羽翼し、元化を丹青す、皐陶の謨謀を陳し、仲山の夙夜を盡すと、これ亦燕公を以て仲山甫に喩へたり、留侯を用ふるものは、その同姓の義に取るなり。

結末の四句は各、一典を用ふ、細かに之を注明するに非ずんば、遽かにその意を疏通し難し、戰國の時魏絳に和戎の功あり、時に鄭伯女樂二八、歌鐘二肆を晉の悼公に納る、悼公因つて女樂一八と歌鐘一肆とを分ちて、魏絳に賜うて曰はく、子寡人に敎へて戎狄を和し諸華を正すこと今に於て八年、七たび諸侯を合したり、寡人志を得ざることなし、請ふ子と之を樂しまんと(左傳襄公十一年)、是れ「歌鐘」の句の用ふる所、燕公が功を奏して歸來の日は、天子の寵賚彼の悼公が魏絳に於ける如きを望むべしとの意としたり。趙充國が屯田疏に、隴隗中道の樞を治め、以て西域を制せば信威千里に行はれて、枕席の上より師を過ぎらしめんと、その注に、

檣成り軍行く、その安易なる枕席の上を過ぐるが如きを言ふとあり、是れ「枕席」の句の用ふる所、燕公が朔方を平定して邊安く、路易き、亦枕席の上を行くが如くならんことを期するなり。四牡は亦詩の小雅の篇名、小序に四牡は天子使臣を勞ふの詩なりとあり、已に之を勞ふと云へば是れ功成りて京に歸るの時なり、因つて之を借りて燕公が凱旋を指稱したり、漢の哀帝鄭崇を擢んでゝ尚書僕射と爲す、數〻諫諍して帝能く之を聽納す、崇常に草履を曳く、見を求むる毎に、上笑つて曰はく、我、鄭尚書の履聲を識れりと、是れ亦尚書の故事、故に末句之を用ひ、燕公凱旋の時、天子履聲を聞きて早くその人を識ること亦當に鄭尚書の事の如くなるべしと云ふなり、この四箇の故事之を四句に分用して、語意自ら一貫し、絶えて詞義晦澁の病を見ず、得心應手の好本領と稱すべきなり。

今人の詩を言ふもの、動もすれば故事を用ひるものを痛詆す、是れ徒らに大言を放ちて實はその不學無術を文飾せんとするものゝみ、知らず詩は必ず白描ならざるべからざるものあり、亦必ず故事を充塡せざるべからざるものあり、白描に由つて其詞却つて典雅なるものあり、故事を用ひて其意却つて空靈なるものあり、兩者各〻時と事とに因りてその宜しきを揣る、而して本篇の如きは所謂必ず故事を充塡せざるべからざるものなり、故事を用ひて其意却つて空靈なるものなり、惟〻故事を用ひて運用の妙を忘れざるもの、始めて與に此を語るべし、我、偶〻感ずる所あり、この詩を疏剔するに當つて、覺えず今人の眼孔甚だ小なるを悲しむ。

張說の巡邊、亦是れ當時歷史上有數の事たり、故に聖制に和して之を送る、獨り曲江一人のみならず、姚崇に繼ぎて賢相の名ある宋璟が作の如き、亦頓る燕公の爲に重きを增すものあり。

帝道濟存兵。　王師尙有征。　是關司馬法。　爰命總戎行。
晝閫崇威信。　分麾盛寵榮。　聚觀方結轍。　出相遂傾城。
聖酒江河潤。　天詞象緯明。　德風邊草偃。　勝氣朔雲平。
宰國推良器。　爲軍挹壯聲。　至和常得體。　不戰卽亡精。
以智泉寧竭。　其徐海自淸。　遲還廟堂坐。　贈別故人情。

この詩適〻曲江が作とその韻を同じうし、語も亦相出入するものあり、宋璟にして且つ燕公を推すに宰國の良器を以てす、則ち曲江が詩の極口賞揚せるは、斷じて族子の溢詞に非ざるを證すべきなり。時に燕公も亦「將赴朔方軍應制」の詩あり。

禮樂逢明主。　韜鈐用老臣。　恭憑神武策。　遠靜鬼方人。
供帳榮恩餞。　山川喜詔巡。　天文日月麗。　朝賦管絃新。
幼志傳三略。　衰材謝六鈞。　膽猶忠作屏。　心故道爲鄰。
漢保河南地。　胡淸塞北塵。　連年大軍後。　不日小康辰。
劍舞輕離別。　歌酣忘苦辛。　從來思博望。　許國不謀身。

この篇は先づ美をその君に歸し、次に恩餞の盛を述べ、已に任を受くるに因つて自ら省み、又功を立つるを以て自ら期し、終に將に赴かんとするの情狀に收轉す、神旺んに理完く、亦大臣の語たるに愧ぢず、その博望を以て自ら誓ふは、猶ほ曲江の留侯を以て之に望むが如く、齊しく同姓たるより落想したり、考ふるに張說始め天兵の節度大使たりしとき、僅かに二十騎を率ゐて節を持し、胡人の部落に入りて之を鎭撫し、因つて

その帳下に宿す、副使李憲屏、情の信じ難きを以て書を馳せて之を止む。說、復書して曰はく吾が肉は黃羊に非ず、必ずしも食はるゝを畏れず、血は野馬に非ず、必ずしも刺さるゝを畏れず。士は危きを見て命を致す、これ吾が死を效すの秋なりと。これ尤も史傳に大書して昭昭たるものなり、卽ちこの一事を以て之を推すも「許國不謀身。」の一語の自ら欺くものに非ざるを知る。

奉和聖製暮春送朝集使歸郡應制

王維

萬國仰宗周。衣冠拜晃旒。玉乘迎大客。
金節送諸侯。祖席傾三省。褒帷向九州。
楊花飛上路。槐色蔭通溝。來預鈞天樂。
歸分漢主憂。宸章類河漢。垂象滿中州。

唐制、郡國の政を掌どる、譬へば都督刺史の類の如きもの、外より入朝して朝班に與るときは、之を朝集使と名づく、これ高宗の元徽二年より始まれり、宗周は以て唐の朝廷を借言するなり、萬國みな我が唐の帝室を仰がざるは無し。故に各郡の朝集使、衣冠を着けて以て我が朝廷に入覲し、齊しく天子が晃旒を拜せり、周禮に凡そ諸侯入朝するとき天子逆へて之を饋に勞し、大客は則ち賓とし、小客は則ちその幣を受けてその

辭を聽くとあり、大客は大諸侯なり。唐に在つては應に都督を指稱すべし、金節も亦周禮に見ゆ、天子諸侯に符節を與へて以て行道の信とするなり、この二句言ふ心は天子朝集使を優遇する所以のもの至渥にして、その來るや玉乘に駕して之を饋に迎へ、その歸るや又金節を授けて之を餞送すとなり、同じく周禮を用ひたるは、起句宗周を以て唐の朝廷に比したるが故なり、三省は中書・門下・尙書の三省を謂ふ、朝集使の歸る、天子特に三省の官僚をして、盡くその祖道の席に侍せしめらるゝを言ふなり、褒帷は漢の賈琮冀州の刺史と爲り、出でゝその郡に行くに、車の帷裳を褒げし事を用ふ、朝集使の各〻その郡國に歸るを言ふなり、楊花槐色は暮春の景色を點綴す、上路通溝、みな禁城內外の路、餞送の地を見はす所以なり、晉の趙簡子、夢に帝の所に之きて鈞天の廣樂を聞く、この篇之を用ひたるは重に帝の所に之くの義に取り、朝集使の帝闕に參集したるを指稱したり、朝集使は旣に朝廷に來りて鈞天の樂を豫り聞き、今や又郡國に歸りて、各〻天子の憂を分たんとす、是を以て天子御製の詩を賜うて以てその行を壯にす、朝集使此を受けて各〻その國に歸れば、則ち宸章の光、河漢の辰星の如く、象を垂れて中州到處に煊赫たらざるはなしと謂ふなり。

以上の長律應制奉和の什尤も多く、然らざるものも亦多く朝廷の大典に關す、雍容爾雅、初唐の鉅觀を極むる所以なり、蓋し武后にして後玄宗の初政に到る、天下承平、君臣俱に歌詠賡酬を事とし、以て鴻業を潤色し休明を鼓吹す、この種の作勢ひ多からざるを得ざるものあり、天寶漁陽の一警、四海播亂、幸に宗社の屋を免るゝと雖も、邦の元氣、此に殄瘁し、朋黨の錮、滯鎭の禍、踵を接して興り、唐の世を終るまで、寧處するに暇あらず、是を以て盛唐以後詩人雲の如く、仙と呼び聖と稱せらるゝ者も亦此間に輩出すと雖も、その爲す所はみな變風變雅の音、復た化日光風雍熙肅穆の觀ある能はざるなり、于鱗、麟詰の長律三篇を選し

て特にこの一篇を冠す、意、此を以て臺閣莊重の一體を結び、以て下の沈鬱の格を開くに在るものゝ如し、詩運の時運と相消長する此の如くにして、麼詰の如きは亦實にこの關頭に遭際せし一人なり、莊重は固より長律の體、以下の諸篇亦往往此を離れずと雖も、その氣象に至つては初唐の垂紳搢笏の風度に比べて迥乎として伴しからず、善讀の者は自らこの冥冥中に一隻眼を着すべきなり。

送李太守赴上洛

商山・包楚鄧。　積翠靄沈沈。　驛路飛泉灑。
關門落照深。　野花開古戍。　行客響空林。
板屋春多雨。　山城晝欲陰。　丹泉通虢畧。
白羽抵荆岑。　若見西山爽。　應知黃綺心。

商洛の山、東南楚・鄧の地に連なり、積翠正に沈沈たり、是れ昔日四皓が隱栖の所にして今、李太守が將に任に行かんとせるの地なり、因つて此を以て端を發す、以下驛路行旅の景は、則ちこの山を望んで以て赴くの途中たるを知るべし。飛泉落照自ら幽寥閒寂の意を見る、古戍煙絶えて野亂れ開き、空林葉落ちて獨り行客の足音を聞く、一「響」字下し得て妙絶、林已に空し、落葉滿地にして四に人踪なきこと自ら知るべし、

故に偶〻行客の之を過ぐるあれば、策策たる足音、耳に入る殊に大なるを覺ゆるなり。

「板屋春多雨。山城晝欲陰。」これは是れ李が停宿の時の光景を寫す、春日の雨、絲の如くに沾濕す、もと多く聲を聞かず、唯〻その板屋なるを以て偏にこの聲の多きを覺ゆ、城市山に據る、嵐氣日夕に來往し霽快の時ある少し。是を以て晝も亦陰らんと欲するなり、十字貴ぶ所は神韻に在るも、其中亦無限の理趣を盡す。「板屋」の句、仍ほ上の「響」の字の餘波を承けて、自ら一種の灰線を成すが如きに至つては麼詰獨擅の神品と云ふべきなり。

「丹泉通虢畧。白羽抵荆岑。」是れ上洛郡の位置にして又、首句の「包楚鄧」とあるに一點す、丹水は商州の竹山に出で流れて河南の界に入る。商州は卽ち上洛なり、河南は周の時虢侯の地なり、虢畧の字は左傳に見ゆ、略は疆界の義なり、白羽は鄧州の地、春秋の時楚に併せらる。荆岑は楚の山なり、抵は抵對の義なり、王子猷笏を以て頰を拄へて曰はく、面山朝來爽氣あるを致すと。これ借りて以て商山を指稱す。夏黃公・綺里季はみな商山四皓の名、李太守任に到りて後、亦笏を拄へて商山を見ば、自ら四皓が隱遁せしの心を知るべしと言ふなり。この意を以て結とせるは、起手の商山と云へるに應ずるものにして、常山の蛇勢首尾相擊つの觀あり。

送祕書晁監還日本

積水不可極。　安知滄海東。　九州何處遠。

萬里若乘空。　向國惟看日。　歸帆但信風。
鰲身映天黑。　魚眼射波紅。　鄉樹扶桑外。
主人孤島中。　別離方異域。　音信若爲通。

阿倍仲麿の事、今疏釋を須たず、この篇李太白が「白雲秋色滿蒼梧。」(哭晁衡)と並に千古に傳ふ、仲麿曠世の逸才に非ざるよりは、那んぞ右丞・供奉等をして把臂傾倒、此等の贈あらしむることを得んや。此詩通篇蒼茫の觀を曲盡して、起手の突兀尤も到り易からず、而して仲麿が「あをうなばら」の一詠、髣髴としてその意境を同じうす、殆ど衡を爭ふに足るものあるが如し。

積水茫茫として窮極すべからず、安んぞ滄海の東更に復た國土あるを知らんや、反挑して起り、以てその遼遠を形はす、直ちに雲夢八九を胸中に吐呑するの勢あり、鶴衍は謂ふ、九州の外更に九州ありと(史記・孟荀列傳)、所謂九州、何處か最も遠き。君今萬里の波濤を超えて、遠く滄海の東に歸らんとす、一帆縹緲、恍として空に乘ずるが如し。則ち九州の遠、未だ日本より遠きものあらざるに似たるなり。以下四句は萬里乘空の意を承け、海程の事物を寫す、而して「看日」の句、日本に緊切なれば、語は固より泛設に非ざるなり、雲煙莽蕩、唯、日輪を看て以て準的と爲す、波濤洶湧、順風を得ずんば、那んぞ歸ることを得ん、況んや巨鰲の身天を蓋うて旋ち黑く、大魚の眼、波を射て忽ち紅なるあり、海中の現象、奇奇怪怪名狀すべからず、その危險なる實に想像の外に在るべし、列子に渤海の東に五山あり、みな仙人の居る所、五山の根に連着なく潮に隨

うて上下す、帝その西極に流れんことを恐れ、策强なるものに命じ、巨鰲十五をして首を擧げて之を戴かしめしに、始めて動かずと見えたり(同編)。又隋史に日本國に如意寶珠あり(倭國列傳)。その色青く、大きさ雞卵の如く、夜光あり、魚眼精なりと云ふとあり、二句此に本づきて隨手點綴の妙を見る、必ずしも典故に拘して之を解せざるなり。

「鄉樹扶桑外。」は日本を申言す、扶桑は日出の所なり、併せて上の「向國惟看日。」に應ず、「主人孤島中。」主人は晁監を指す、上文寫景中自らその人ありと雖も、未だ之を文面に見はさず。此句故に補言するなり。別離の句も亦此の如く、補筆を以て送別たるを明點す、海程の光景一に上文の如くなれば、音信の輙く通ずべからざるは、已に讀者の意中に在り、因つて此を以て收結として、この別の殊に捨て難きを見るなり。

送儲邕之武昌　李白

黃鶴西樓月。　長江萬里情。　春風三十度。
空憶武昌城。　送爾難爲別。　銜杯惜未傾。
湖連張樂地。　山逐泛舟行。　諾謂楚人重。
詩傳謝朓清。　滄浪吾有曲。　寄入櫂歌聲。

律體は太白が作るを屑しとせざる所、偶〻一たび之を爲すと雖も、要するにその明秀高爽の氣を以て、一揮して才を見はすもの、初めより聲律を揣稱し、對偶に拘束するものに非ず。浩浩落落として筆の之く所に從ひ、自ら結構を作すのみ、是を古詩の變と曰ふ可きなり。未だ長律として之が論次を加ふ可からざるなり。元微之の李・杜優劣を論ずる、專ら此を以て軒輊の分るゝ所なりとし、盛んに杜が終始を鋪陳し、聲韻を排比せるを擧げて、李は尙ほその淋漓を歷る能はず、況んや堂奧をや、と論斷を加ふるに至れり（杜工部墓誌銘）。然れども長律は固より杜の長ずる所、而して杜の傳ふべきは必ず獨り長律に非ず。これ猶ほ太白は絶句に長じて、而してその傳ふべき、正に必ず絶句に非ざると一般。人に能あり不能あり、若し長律は李の所短なるを以て李は杜に劣れりと云ふときは、杜の絶句詰屈勃率にして法とすべきもの甚だ少れなり。那んぞこれを擧げて杜は李に劣ると謂はざるや。李は律體に短、故に集中の律體屈指して數ふべく、杜は絶句に短、故に集中亦その篇什多からず、これ前賢が蔵拙に工なる所にして、詩人の能は斷として備を求むるに在らざるなり、韓昌黎「蚍蜉撼樹」を以て元微之を目し、直ちに斥して群兒と云ふ（醉贈張十二）、一時激する所あるの語と雖も、亦何ぞ嘗て實に然らざらん耶。

高棅は曰はく、五言の排律、開元後の作者にして聲律の備はれるは、獨り王右丞・李翰林を多しと爲す、而して孟襄陽・高勃海輩實に相與に並鳴すと。胡元瑞は曰はく、盛唐の排律を讀むに、太白は輕爽雄麗にして、明堂の黼黻冠蓋輝煌し、武庫の甲兵、旌旗飛動せるが如しと。桂臨川も亦云ふ、太白は天才飄逸、長律は法度森嚴と雖も、清骨泯せずと。此に由つて之を視れば太白の長律は惟〻杜の千流萬派洶湧氾濫せるが如き鉅觀なきのみ、亦何ぞ嘗て是れ當時の第一流ならざる。而してこの篇の如きは、尤もその清空飄宕なるも

のにして、沈德潛は云ふ、古風の起法を以て運して長律と爲す、太白の仙才繩墨に拘せざること乃ち爾りと。乾隆御批は云ふ、健筆空を凌ぎ列子の風に御して行く、洽然として善きが如しと、並に定評と稱するに足る。則ち亦何ぞ嘗て是れ縱横排奡動盪變化の作に非ざる、然らば則ち太白の長律に短と云ふもの果して如何、曰はく惟〻之を應制に施す能はざるのみ。唯〻之を試帖（科擧の試に用ひられる詩）に應用する能はざるのみ。

黃鶴樓は謫仙の夢寐にも忘るゝ能はざるの地、その詩に散見するもの一にして足らず、樓は武昌城の西南に在り、高く漢陽江の流に臨む、故に本篇儲邕が武昌に之かんとするを送るに由りて偶〻平生の憶を直寫するなり。黃鶴樓頭の月に嘯いて、以て長江萬里を望む、平生の快事此に過ぎたるはなかりし。而して今春風已に三十度、烏兎匆匆、身は異土に在り、この情唯〻之を空憶に付するのみ。起四句、一氣直下、所謂古風の起法なり。「送爾難爲別。銜盃惜未傾。」二句は是れ送別の情。「惜未傾」とは別を惜しむが爲に未だ掌中の巵を傾くるに忍びず、酒盡くれば則ち別れざる可からざればなり。「湖連張樂地。山逐泛舟行。」二句は武昌の風景の佳。「諸謂楚人重。詩傳謝朓清。」二句は武昌の人物の美、並に以て首の四句に分應す。帝、樂を洞庭に張る事は莊子にあり。漢水の支派瀉いで洞庭湖中に入る、故に連と曰ふ。洞庭は古への楚の地、楚の俠客季布は則ち所謂千金一諾に如かざる者なり。謝朓が宣城は漢江の下流に在り、宣城も亦太白が畢生終焉の地たらんことを願ひしもの、黃鶴樓を憶ふに由つて併せて此に及べるなり。この四句重に武昌に黏定して云ふと雖も、「山逐泛舟行。」一句、儲邕其人の中に在るあり、立言固より送別を離れざるなり。漢江の水荊山の下に流る、之を滄浪と云ふ。漁父が濯纓濯足を歌ひしは則ち是なり。結二句の意、三十年前吾亦曾て武昌の地方を詠ぜしものあれば、和して棹歌の中に入れて以て君を送らんとなり。棹歌の句、已に滄浪の近脈

を承け、又「泛舟」の遠線を引く、而して「長江萬里情。」併せて此に結歸す、全篇を束ね得て極めて鈞量あり。

陪張丞相自松滋江東泊渚宮　孟浩然

放溜下松滋。登舟命楫師。寧忘經濟日。
不憚沍寒時。洗幘豈獨古。濯纓良在茲。
政成人自理。機息鳥無疑。雲物吟孤嶼。
江山辨四維。晚來風稍緊。冬至日行遲。
獵響驚雲夢。漁歌激楚辭。渚宮何處是。
川暝欲安之。

張丞相は張九齡なり、曲江、已に林甫に中傷せられて相位を罷め、貶せられて荊州の長史と爲る。時に浩然白衣の詩人を以て亦荊楚に在り、故に之に陪してその地の勝概を探討することを得たるなり。岷江の流、荊州松滋縣の北に至り、岐れて三派と爲る。その一を松滋江と曰ふ。此を下りて東すれば、則ち江陵の渚宮に達す。渚宮は楚の襄王が離宮にして宋玉の故宅の在る所なり、詩十六句、二句毎に一意を換へ錯綜して之を出す、亦長律の變體なり。

「放溜」二句は是れ發端、先づこの行の舟游たるを領起するなり。蓋し松滋江の上に水閘あり、閘口開きて溜水一時に奔注す、故に放溜と曰ふ。僧大典、溜を讀んで流と爲し、二字を解して舟を流水の上に放つの義と爲せるは非なるに似たり。若しこれに從はゞ下句「登舟」の二字終に贅疣と爲るべし。故に取らず。「寧忘經濟日。不憚沍寒時。」是れ張丞相を言ふ、沍寒の時を憚らずとは、歳寒にして松柏の後凋を知ると同意なり。「洗幘豈獨古。濯纓良在茲。」是れ浩然自ら謂ふ。自己布衣の山人を以て楚地に放浪す、故に楚地の故事に援据して自ら比するなり、楚の狂士陸通、松下に高臥しその巾幘を樹頂に掛く、鶴あり銜んで水濱に去る、通因つて之を洗ひ鶴と同じく去る、洗幘の出典なり、濯纓は習見の事、唯、その楚地に切なるを知らんと要す。「寧忘」の二句張を謂ひ、洗幘の二句自ら道ふ、是れ各人各事終に串連を缺きたるが如し、是を以て又「政成」の一聯を下し、兩者を合して一貫せしむ、「政成人自理。」とは「寧忘」の二句を承けて張が謫宦に在りと雖も猶ほ經濟を忘れざるの意を見はし、「機息鳥無疑。」とは自己が洗幘濯纓の高操、更に世に求むる所なきを以て、張丞相に陪游すと雖も毫も禮法の拘を受けざるを言ふ。機心全く息めば鳥復た何の疑ふ所ぞ、喩を設くる極めて妙なり、この一聯に由つて張と自己とは已に湊して一處に在り、因つて起手に反觸して舟中の景物に及ぶ。

雲物の蒼茫たるを望んで以て孤嶼の上に吟じ、江山の渺邈たるに對して、爲に四維の隅を辨ず、舟中流に在るを以て、時に方位を誤まるの處あり、是れ四維を辨ぜざるべからざる所以、二句は舟游の景、而して張が

爲に異土流落の感を寫すもの自ら言表に在り、「晩來」の二句は「雲物」の句を申して時序に入り、その日の恰も多至たるを點じて、暗に「不憚沍寒時。」の句の爲に一解釋を下せり、「獵響驚雲夢。漁歌激楚辭。」二句は上の「濯纓良在玆。」「機息鳥無疑。」等より反跌して出て現在の見聞する所に就いて折れて感慨に入る、曰はく今や機心已に息む、而して雲夢澤上遙かに獵箭の響くを聞くは何ぞや、纓を濯ひ足を濯ふ、清濁はも と計する所に非ず、而して滄浪の漁歌、その聲轉た激越にして屈原楚辭が哀怨を帶ぶるが如きは何ぞや、隱 隱躍躍の中、一は張が賢明を以て讒舌の中傷を免るゝ能はざりしを慨し、一は自己が江湖に優游すと雖も、未だ不遇の歎あるを免れざるを悲しむ、全篇の本意全く此に在りて、義を比興に取り、讀者をして味を象外に尋ねしむ、故に結二句に至つて、侘傺彷徨、吾、將に安くにか歸らんとするやの感あり、若し是れ記事のみ、是れ寫景のみと曰はゞ、其人便ち是れ檐板漢なり、與に詩を言ふべからず。

按ずるに曲江集中に「初發三江陵一有レ懷」の作あり、蓋し渚宮に泊するの翌日賦して以て浩然に示せしものなるべし、詩に云ふ。

極望滄陽浦。　江天渺不分。　扁舟從此去。　鷗鳥自爲群。
他日懷眞賞。　中年負俗紛。　適來果微尙。　倏爾會斯文。
復想金閨籍。　何如夢渚雲。　我行多勝寄。　浩思獨氛氳。

この詩「倏爾會斯文。」の句、もとその解を得ず、浩然が本篇と對照するに及びて、始めて張がこの行、孟と同じくせしを知り、從つてこの句の指す所を明白にすることを得たり、是れ從來諸家の注本の曾て言はざる所、予が家偶〻曲江集を藏するを以て、本篇を評釋するに當り、査核對閱、恍として左右原に逢ふの想あ

り、則ち、中心欣悅、覺えず之を後に書す、自ら亦殆ど何の故なるを知らず。

送柴司戸充劉卿判官之嶺外　高適

嶺外資雄鎭。　朝端寵節旄。　月卿臨幕府。
星使出詞曹。　海對羊城濶。　山連象郡高。
風霜驅瘴癘。　忠信涉波濤。　別恨隨流水。
交情脫寶刀。　有才無適。　行矣莫徒勞。

柴司戸は劉が嶺外都督府の判官となり、往いてその幕に赴く、劉は蓋し朝廷の列卿を以て出でゝ嶺外の都督と爲りしもの、故に劉卿と云ふなり。首四句嶺外より起り、劉がその都督たる所以を點じ、終に柴の之が佐と爲るに及ぶ。中四句は嶺外の風物、兼ねて柴が職に稱せんことを期す、結四句は高適が送別の本題なり。

資は賴藉の義、嶺外は廣州の地、南方の炎徼に接す。雄鎭に依藉して以て夷蠻を控制せざる可からず。この故に朝廷特にその人を選擇し、命世の才を拔擢して寵賜するに節旄を以てす。是に於て乎、劉は既に月卿の班を以てこの重任に膺り、出でゝ幕府に臨み、而して今や柴も亦星使としてその判官と爲り、詞曹を辭して遠く嶺外に行かんとせり。夫れ五羊の城は近く南海の空濶なるに接し、嶺南の山高く柳州の象郡に連な

る。是れ嶺外の形勝に非ずや。況んや瘴癘の毒、波濤の險、是れ人の尤も行くを憚る所なり。乃ち風霜嚴肅の威を以て直ちにその瘴毒を驅除し、忠信審諤の誠を以て易くその怒濤を涉破せんとす。則ち此等の險惡固より當に君の畏るゝ所に非ざるべきなり。唯、この一別、再會終に測るべからず、臨岐低回、焉んぞ心に惻焉たるものなきことを得ん。即ち我が別恨長く流水に隨つて盡くる期なきなり、晉の呂虔は寶刀を長史王祥に授けて曰へらく、苟もその人に非ずんば、刀は反つて殃を爲す、君に令德あり、宜しく之を佩ぶべしと。今我の別に臨み、寶刀を贈りて以て交情を表するものは、亦實に呂虔が意のみ。君が才や固より往くとして適せざるは無し、この行の成功あるは論なきなり、故に「行矣莫徒勞。」と曰ふ、莫は「無かるべし」の意、禁戒の詞に非ず、誤まる勿れ。

廣州に五仙人あり、五羊に騎りて逍遙す、故にその城を名づけて五羊と曰ふ。象郡は柳州の古名なり、山形象に似たるを以てこの稱あるなり。此等自ら坊注本あるも、便を以て之を注明す、前後之に倣ふ。

陪寶侍御泛靈雲池

白露先時降。清川思不窮。江湖仍塞上。
舟楫在軍中。舞換臨津樹。歌饒向晚風。
夕陽連積水。邊色滿秋空。乘興宜投轄。

邀歡莫避驄。誰憐持弱羽。猶欲伴鵷鴻。

靈雲池は涼州に在り、涼州は西域の要塞なり、是れ蓋し高達夫、蜀・彭二州の刺史たりし日の作なるべし。達夫別に寶侍御が靈雲南亭の讌に陪する詩あり。その自序に云ふ、涼州は湖に近し、その池亭を高架するは、以て威を藉落に耀せんと欲すればなりと。この一言以て本篇の「江湖」二句の好注脚に充つべきなり。寶は想ふに侍御史の官を以て出でゝ涼州の節度たるもの、高は一刺史を以てその讌に陪す、故に末段深く卑謙の語を見るなるべし。

白露は八月なり、時に先だつて降ると云へばこの宴の七月に在りしこと知るべし、靈池の清川に對し轉た思の窮らざるものあり、江湖の二句則ち「思不窮」の所以を申言す、夫れ涼州は固より塞上軍中、而して靈池は倒つて江湖舟楫の興あり、江湖舟楫は娛しむべきものなり、塞上軍中は娛しむべきもの歟、塞上軍中は悲しむべきものなり、江湖舟楫と雖も、實は塞上軍中の地なり、則ちその悲しまんや、江湖舟楫則ち又何をか悲しまん、則ちその意娛、二句反覆宛轉して意は循環の如し、「思不窮」に非ずして何ぞや、津樹晚風、舞換り歌饒し、是れ江湖舟楫の興多し、則ちその意娛、二句反覆宛轉して意は循環の如し、「思不窮」の感、結四句歸つて寶侍御に到り、自家が陪讌を以て總束す、而して不窮の思は終に之を盡言せず、不窮の不窮たる所なるべし。

「舞換臨津樹。」造句頗る奇なり、大典之を解して云ふ、舞ひ舟に隨つて回つて、轉た津樹の轉換するが如きを覺ゆるなりと。この解義頗る妙趣あり、今之に從ふ。結意は寶は廷臣なるを以て擬するに鵷鴻を以てす、

故に弱羽を以て自ら謂ふなり、投轄・避驄みな已に見ゆ、但し避驄は侍御の故事たるを忘る可からず。

達夫が「靈雲南亭陪宴」の詩「連唱波瀾動。冥搜物象開。新秋銜遠樹。殘雨擁輕雷。簷外長天盡。尊前獨鳥來。」の句あり、本篇と互照して靈雲水木の勝恍として眼前に浮かぶ。

行次昭陵

杜甫

舊俗疲庸主。　羣雄問獨夫。　識歸龍鳳質。
威定虎狼都。　天屬尊堯典。　神功協禹謨。
風雲隨絶足。　日月繼高衢。　文物多師古。
朝廷半老儒。　直詞寧戮辱。　賢路不崎嶇。
往者災猶降。　蒼生喘未蘇。　指揮安率土。
盪滌撫洪鑪。　壯士悲陵邑。　幽人拜鼎湖。
玉衣晨自舉。　鐵馬汗常趨。　松柏瞻虛殿。

塵沙立暝途。　寂寥開國日。　流恨滿山隅。

杜少陵の長律は、變幻閎深にして、崑崙を涉り、溟勃に泛び、千峰前に羅列し、萬彙後に汪洋たるの大觀あり、故に元微之の優劣論に、大は或は千言、次も猶ほ數百、詞氣豪邁にして風調清深に、屬對律切にして凡近を唾棄すと云ふ、この言斷じて當らざるに非ず、唯、その精神・氣力の尤も鬱騰にして精悍なるものを求むれば、多くは二十韻以下の短篇に在りて、五十韻・百韻に至つては、終に未だ頽唐の憾なき能はず、然るに微之が意を推究すれば、却つてその長きものを盛揚して以て、李太白を壓倒せんとするものゝ如し、蚍蜉の見に非ずと謂ふ能はざるなり。故に元遺山は論詩絶句に於て、「少陵自有連城璧。爭奈微之識斫。」と云ひ、沈歸愚も亦、五言長律は六韻に起りて後漸次に恢擴し、少陵に至つて滔滔百韻なり、然れども句意は重複なからず、又重韻あり、少陵の才の大なる海の如しと雖も、連城の璧と成る能はずと云へり、是れ定論なり。この詩十二韻、獨り少陵集中長律の冠たるのみならず、亦實に萬古の大雄篇・大傑作なり。昭陵は唐の太宗の陵なり、太宗は古今無雙の賢君なり、太宗の治は三代後の僅かに有る所と稱す、少陵は古今第一の詩人なり、而して少陵の時は寔に亦古今罕に見るの禍亂の世に際せり、夫れ古今第一の詩人を以て古今無雙の賢君の陵を過ぎ、古今僅かに有るの治政を追懷して、以て古今罕に見るの禍亂を傷む、則ちその詩安んぞ萬古の大雄篇・大傑作たらざるを得んや、請ふ我が細かに之を評釋するを聽け。

太宗侍臣に謂つて曰はく、古は山に因りて墳を爲る、我、九嵕山を見るに孤秀にして迥絶なり、因つて傍

擧して山陵と爲すべしと。崩ずるに及んで此に葬る、これを昭陵と名づく。長安澧泉の北五十里に在り。少陵の舊集誤まつて本篇を天寶初年の作とす、草堂詩箋は之を少陵が北征の詩の後に次す、これに據れば少陵が昭陵に行次せしの日は卽ち肅宗鳳翔の行在に卽位し、稍〻中原を收復するの機到れる時にして、玉華宮・九成宮の諸作と同時に成るものなり。鍾譏谷此說に據りて箋を作りしより、朱鶴齡・仇兆鰲・沈德潛・浦起龍の諸注以て乾隆御批の定本に到るまで一に之に準依せざるは無し、因つて今亦之に從ふ。詩は截然として上下の兩大段に分つ、起句より「賢者不崎嶇。」に至る十二句、有唐開國に溯りて太宗貞觀の治を言ふもの、是れ上大段、「往者災猶降。」より結句に到る、昭陵に行次するに因つて祿山の禍亂を傷むもの是れ下大段なり。

最も妙は起手「舊俗疲庸主。」の五字反筆を以て唐の開國を逆起すと雖も、亦暗に下段「往者災猶降。」の一解を引出して、筆墨飛動するに在り、何となればこの句の意六朝の世より昏庸の主相繼ぎ、隋の煬帝に到りて民俗の疲弊その極點に達したるを言ふものにして、之を總括して「舊俗」と云ふ、則ち今俗の弊自ら筆下に在るを以てなり、長律の起法是に於て神變不可思議なり。

庸主相次いで民俗の疲弊已に極まれり、是を以て草澤の群雄、四方に事を擧げ、以て煬帝の罪を問はんとす、獨夫は紂なり、これ煬帝を指しその天意・人心俱に離叛するを形はす、按ずるに隋書に楊玄感曰はく、獨夫虐を肆にし、身を絕域に陷る、これ天亡の時なりと。又、舊唐書の贊に高祖獨夫の運去るを審にし、新主の勃興するを知るとあり、これ亦與に煬帝を指斥して獨夫と爲したるなり。太宗生れて方に四歲、書生あり之を相して曰はく、龍鳳の姿、天日の表あり、年將に二十ならんとせば必ず能く世を濟ひ、民を安んぜんと、

高祖之を殺さんと欲するに忽ち所在を失す、因つてその言を採り世民を名とす。李密・竇建德等の群雄蜂起するに及んで、太宗終に高祖を奉じて太原に勃興す、豈に「識歸龍鳳質。」に非ずや。太宗の天下を定むる所以は首として關中の地を取りしに在り、關中は秦の都なり、故に虎狼の都と云ひ、併せて隋を秦に比す、天下の俱に逐はんとする所なればなり。以上四語先づ四海の昏暗を言ひ、次に隋を除くに入り、群雄を以て之を一總し、識歸の二句に於て、歸つて太宗に到り、本題に吸收す、有唐受命の故、唯〻二十字を以て之を了せり、雄邁絕世と謂はざるべけんや。

高祖天下を得て位を太宗に讓る、猶ほ堯の舜に於けるが如し、高祖を謚して神堯皇帝と云ふもこの意なり、然れども事業は太宗に定まるも、功は終に高祖に歸せざるを得ず、故に「天屬兼堯典。」と云ふ、天屬は莊子の語にして父子の義なり。高祖の太宗に讓る、その德を以てすと雖も亦天屬の親あり、その事豈に堯典より尊からずや、而して太宗の治を致す、亦千古に冠絕し、神功遠く禹謨に匹協すべきものあり、是を以て從龍の諸臣風雲に際會し、競つて太宗が絕足の馬に從つて以て輔佐の功を盡し、庸主昏疲の天下を旣倒に回して、日月の天路に繼輝して並照する如く、光華復旦の盛を見ることを得たるなり、絕足は馬の名なり、句意、太宗が天姿の颯爽たるを借形するものありと知るべし、日月は以て太祖高宗に喩ふるなり。

宋の許玄周は曰はく、「文物多師古。」の四句は、太宗が智勇英特にして、武をもて天下を定めて、而して能く此の如く最も盛德なるを見ると、乾隆御批は曰はく、太宗が行政用人、諫を納れ賢を進む、後代の及ぶ所に非ず、文物の四句能くその要を擧ぐと、この二語、能く之を評し盡したり、「文物多師古。」とは雅樂を定め律令を刻するが如きを謂ひ、「朝廷半老儒。」とは虞世南等の諸學士を用ふるを言ふ、直詞にして戲辱せ

らるゝことなし、苦諫亦能く聽受せらるゝなり、賢路にして崎嶇ならず、才賢みな所を得て絕えて壅塞せらるゝの患なきなり、一部の貞觀政要は、これ之を包該するに足る。この一解亦首句に應ず、蓋し是に至つて舊俗の疲は盡く濟救せられざるなきなり、以て上半段を結び、兼ねて下半段の災變再び至るを起す。（以上上半段）

「往者災猾降。」以下の句、諸說紛訟して一ならずと雖も、斷として玄宗が天寶の禍亂に就き慨を致すものなりとするを正とす。顧亭林（炎武）の如きは以爲らく、この句玄宗が武后・韋后の濁亂を鎭めて、唐室を再興したるを指すと（日知錄卷廿七・杜子美詩注）、是れ舊集此詩を編して天寶初年の作とするより誤解したるものにして、若しこの說に從はゞ此詩は玄宗未だ祿山の禍を蒙らざる時の作なり、果して然らば下文に恨を流して山隅に滿つと云ふもの、終に病まずして呻吟し、寒からずして粟肌するの譏あるべし。又、此段四句を仍ほ太宗に繫け、隋季の疲政を盪滌して、唐の天下を創めしことを申言するものなりと云ふに至つては、尤も陋見の甚だしきものなり。錢虞山（謙益）は曰はく、蓋し天寶の亂は、乃ち隋末の災の再び今日に降るを言ふなりと、この言尤も明確なり、今之に從ふ。然れども虞山は「指麾」「盪滌」の句を解して、收復の功を頌すと云ふ、これ稍〻語病あり、何となれば少陵がこの作は肅宗仍ほ鳳翔に在るの時にして、未だ長安收復の功を奏したる時に非ざればなり。沈歸愚は謂ふ、天寶の亂、隋末に同じければ安んぞ太宗の神靈の之を指麾盪滌するが如きを得んと、予は大いにこの說を可とす。則ちこの四句は深憤を陷京の事に寄せて、靈を太宗在天の神に乞ひ、一日も早く中原を恢復し、蒼生の殘喘を救ひ、率土の瘡痍を療せんことを望むなり。

故に下之に接して曰はく、「壯士悲陵邑。幽人拜鼎湖。」と、この二句作者が行いて昭陵に次せしの正文にして、幽人は杜甫自ら謂ふなり、天寶の亂上述の如くにして、長安も亦胡塵に陷る、則ち懷忠の壯士、太宗が

陵邑を過ぎて寧ろ自ら悲しまざるものあらんや、幽人我の如きも亦この地に止宿して覺えず陵下に拜伏し、噓唏慟哭に堪へざるものあり、鼎湖は黃帝昇天の處、借りて昭陵を指し、以て攀髯の痛に禁ぜざるを形するなり。「玉衣」の二句は並に故事を用ひて太宗の英靈今猶ほ在すが如くなれば、必ず指揮盪滌の希望を滿たすものあるべしと言ふなり。玉衣は寢殿藏する所の御衣なり、王莽の漢を簒せしとき、哀帝の御衣寶匣中より拔け出でゝ堂外に樹立せしと傳ふ。この句言ふこゝろは、太宗の玉衣も亦必ず此の如く、祿山の逆を怒りて、晨に自ら擧りて寢殿の外に出でしことあるべしとなり。又、六朝の時、蕭猷益州の刺史たり、賊亂あるに逢ひ、楚王廟に祈りしに一鐵騎あり、東より來る、俄にして數百騎あり、風の如くに飛び去る、顧みて廟中を見れば土偶みな泥濕して汗の如しと。鐵馬の句蓋しこれに本づき、太宗の靈能く鐵馬を驅使して賊を掃盪する、應にこの故事の如きものあるべきを言ふなり。按ずるに安祿山事蹟に、祿山の潼關に入るや、唐軍已に敗る、賊將崔乾祐白旂を領して左右に馳突す、狀、神鬼の如し、忽ち黃旂軍數百隊あり、賊と鬪ひ、退いて又戰ふもの數回、俄かにして行く處を知らず、後、昭陵の祠官奏すらく、この日靈宮前の石人石馬みな流汗すと、人始めて太宗の靈を顯はせしを知りしと云ふ、李義山の詩に「天教李令心如日。可要昭陵石馬來。」（潼河中）又、韋莊の詩に「興慶玉龍寒自躍。昭陵石馬夜空嘶。」（關再幸梁洋）みなこの事を用ひたる者なれば、唐代にこの說ありしを知るべし。故に諸家の注、多くこれを引いて本篇を解し、鐵馬云云は全く當時の實事なりと云へり。文苑英華の如きは鐵馬を以て石馬に改め、祿山事蹟の文に合はしむ、錢虞山の箋注も亦英華に從ふを是なりと爲す旨を云へり。予は祿山事蹟の文を信ずる能はず、竊かにその少陵が此篇に依りて揑造したる唐代一種の小說なるべしと疑へり、たとひ數步を讓りて少陵より以前

已にこの說ありしとするも、少陵は唯〻之を影寫するに過ぎず、文の表面は全く六朝の蕭獻が事を用ひしものなるべきなり、若し遽かに鐵馬を改めて石馬とせばその甚だ實相なるを訝らざるを得ず、浦起龍亦曾て之を駁して、錢說の如く昭陵の事實に牢據すとせば、玉衣の句は將た何等の事實ありやと云ふ、駁し得て極めて痛快なり、予は起龍に袒せんと欲す、甚だしきは少陵のこの詩を禍亂以前の作なりとしたるもの、彼の黃旅軍の事を引きて、杜公のこの句識を成せしなりと言へるものあり、曲解の極、反辨を加ふるに足らず、沈鯨愚は玉衣の句の神靈降臨を言へるは、離騷の「神之來兮夾兩旗。」とある趣を取れりとす、これは則ち當れるに幾し。

之を要するに「玉衣」「鐵馬」は少陵が山陵を拜する時の胸中の想像を繪がきしのみ、森森たる松柏の間、虛殿を瞻望して徒らにこの空想を劃し、惘然として廛沙の暝途に立つ、是れ卽ち山陵を拜する時の眼中の實景なり、「虛」の字「暝」の字味はふべし。この二字あるが爲に、玉衣鐵馬の神理は自ら一貫せるなり。「寂寥開國日。」一句、上半段を束ね、「流恨滿山隅。」一句、下半段を結ぶ、開國の盛、今已に寂寥、徒らに中原の盪滌を神靈の冥助に借らざるを得ざらしむ、豈に恨淚を流してこの山隅に滿たざるを得ん耶、國家を憂ふるの深き、恢復を望むの切なる、少陵「一飯不忘君。」の精神、是に於て乎火を視るが如し。（以上下半段）

乾隆帝謂ふ、この詩氣象嵬峩にして規模宏遠なり、華茂典重の中、沈雄悲壯の概ありと。嗚呼唯〻その沈雄悲壯の概ある、卽ち初唐諸子の及ぶ能はざるものにして、我、この種を評して變雅の音なりと曰ふ所以なり、然れども少陵をして初唐の世に在らしめば、亦必ずこの沈雄悲壯の概あるなけん、詩の時運に關するとは卽ち是なり、又謂ふ玄宗勵精して治を爲す、開元の政化、上太宗に媲へるも、盈を持し泰を保つ能はずして、

宵小を任用し、聰明を蔽塞し、以て天寶の禍亂を致す、太宗の靈に非ざるよりは、則ち唐室墟と爲らんのみ、少陵流離の餘徘徊瞻眺し、時を傷み、往を撫して、恨を山隅に流し、開國の盛を想うて、而して亂を致す所以の故、言外に隱然、深廣無端にして波瀾萬狀なりと、是れ眼光紙背に透り、直ちに少陵の精神を批し得て出づるものなり、我の評釋は全くこれに本づく、玉華宮の末に云はく、「憂來藉草坐。浩歌淚盈把。冉冉征途間。誰是長年者。」本篇歸結の悲嘆と同じ、明かに同時の作なり。

重經昭陵

草昧英雄起。　謳歌曆數歸。　風塵三尺劍。
社稷一戎衣。　翼亮貞文德。　丕承戢武威。
聖圖天廣大。　宗祀日光輝。　陵寢盤空曲。
熊羆守翠微。　再窺松柏路。　還見五雲飛。

杜集の舊本、二詩を並べ擧ぐ、故に諸說多く二詩を同時の作なりとし、前篇に於て亂を傷みたれば、更にこの篇を作つて治を望むなりと云へり。然れども已に題して「重經」と云へば斷じて行次の時に非ず、前には曰ふ「寂寥」「流恨」と、此には曰ふ、「松柏」「雲飛」、一悲一喜、今昔の觀を成すもの〻如し、肅宗

長安を收復して後の作なりとするもの當れり、因つて之を用ふ。或は曰ふ「松柏」「雲飛」は哀王孫の「五陵佳氣無時無。」と云へるに等しく、仍ほ希望を抒ぶるの詞なりと、これも亦通ぜざるに非ず、今は專ら浦解に從ふ。

草昧の際、英雄雲の如くに割據して起ると雖も、民みな謳歌して我が太宗を迎へし所以の者は他なし、天命曆數の歸する所なるが故なり、是を以て太宗は能く三尺の劍を以て風塵を掃清し、一戎衣を以て社稷を創立することを得たり、以上四句は專ら太宗を詠ず、以下は則ち口に祖德を述ぶと雖も、神は實に世運を含めり、是れ太宗に黏定して言ふものに非ず、然れども固より作者が裏面の微意此の如きのみ、表面は太宗を言ふものなること論を俟たず。

太宗は能く高祖を翼亮して、終に大位を丕承し、武を偃めて文を修めたり、此の如くに言ひ做して、神は實に後世の子孫が晏安の爲に禍を致せしことに注射す、故らに「丕承」の字を用ひたるは、暗に後代の丕承する能はざりしを示すなり、聖圖の二句も表面に在つては單に太宗に就きて言ふと雖も、裏面の意は、肅宗、長安を恢復して能く祖先の宗祀を日星と共に輝かしむるを得たるは、亦唯一に太宗が聖圖の廣大なるに賴らずんばあらずと云ふに在り、卽ち北征の篇末「煌煌太宗業。樹立甚宏達。」と同意なり。

「陵寢盤空曲。熊羆守翠微。」是れ長安恢復後の昭陵なり、故に氣象前と同じからず、「空曲」は空山の阿と云ふに同じ、熊羆は借つて守陵の兵衞を謂ふなり、「再窺松柏路。」その重經たるを點明す、「還有五雲飛。」一結祥瑞氤氳、中興の王氣、殆ど開國に埒す、是れ肅宗の英武か、抑、亦太宗の精靈長へに在るなり、作者が深幸とするの意自ら見ゆ。

曰はく草昧、易の語なり（屯象傳「天造草昧」）、曰はく謳歌、孟子の語なり（萬章・上）、曰はく翼亮、尙書の語なり（益稷「股肱喜哉」及び「股肱良哉」を指すか）、曰はく丕承、孟子の語なり（滕文公・下）、用ふる所、爾雅典厚の文字ならざるは無し、故に經史の用ひて詩に入る、絕えて斧鑿の痕を見ず、他人をして之を道はしめば未だ拙滯を免れずと、明の何景明は評したり。又、鍾伯敬は云ふ、陵廟の作、典古悲涼、功業を說けども竹帛の氣なく、神靈を說けども松柏の氣なしと、この評極めて冷雋なり、此種の作、若し初唐に在らしめば、已に功業を說く、必ず竹帛の氣を帶ばんと要す、已に神靈を說く、亦必ず松杉の氣を離れざるなり、少陵の特異の處、亦就いて以て悟るべし、今人鍾譚を說くものは、之を鬼魅視して始めて甘心す、然れども渠が評語の警峭の處は、每に人をして嗟賞せしむるものあり、鍾譚が詩歸、明末を風靡す、故に淸初の諸家口を極めて醜詆し、以て一頭地を出さんとす、若しその餘唾を拾うて唯〻排擊を事とせば、この人已に錢虞山・朱秀水（彝尊）輩がために瞞過し了せられし也。

王閬州筵奉酬十一舅惜別之作

萬壑樹聲滿。千崖秋氣高。浮舟出郡郭。
別酒寄江濤。良會不復久。此生何太勞。
窮愁但有骨。羣盜尙如毛。吾舅惜分手。
使君寒贈袍。沙頭暮黃鶴。失侶亦哀號。

代宗の寶應元年、少陵が依る所の嚴武は入朝し、西川の徐知道反して蜀の成都大いに亂る、故に少陵已むことを得ず、禍を避けて梓州に入り、その明歲、廣德元年、更に閬州に之く、この詩は則ち閬州の作なり。王閬州は卽ち閬州の刺史、十一舅は杜の親故、王は杜と交誼極めて厚き者、杜の閬に之きしも全くこれに賴らんと欲したるなり、故に十一舅のために別筵を設けしものと見ゆ。本集五言古詩に、閬州東樓の筵に十一舅が書州に赴くを送るの詩あり。この篇蓋し同時の作にして、想ふにこの別筵、先づ船に乘じて郭外に出で、終に東樓に飲餞したるものなるべければ、この詩は舟中、彼の作は樓上にて成りしものならん。詩起四句、別筵を虛寫し、中四句別況を虛寫し、結四句賓主を實點す、惜別の情は語語に見はれたり。

先づ景語を以て始む、萬壑の樹聲、千崖の秋氣、極目蒼茫不盡の意あり、詩家は最もこの起手を爭はんと要す。舟を浮べ郭を出で、酒を擧げ餞と爲す、王閬州の盛情感ずるに餘あり。然れども流離患難の際、骨肉相倚つて、僅かに相慰藉す。而して今や忽ち別れざるを得ず。則ち此の如きの良會は終に復た久しうすべからず。この生の勞頓一に何ぞこの甚だしきに至れるや。我、窮愁の域に沈淪して、爾來但〻骨を餘すのみ。而して成都の亂後、群盜尙ほ毛の如し。則ち獨り一身の苦のみならず、世の亂も亦此の如きあり、この身を以てこの世に處し、又この別を爲さざるを得ず。聲淚の俱に下るを覺えざるものあるを見るなり。吾舅は分れんことを惜しむ、故に惜別の作あり。王閬州はこの心を諒す、故に綈袍の贈あり、沙頭日暮れて黃鶴哀號す、彼亦是れ失侶の悲ある乎。我の中心、亦洵に何を以てか懷を爲さんや。この四語、舅の留詩を點清し、王閬州の主誼を帶表し、又失侶の黃鶴を以て自ら酬別の意を況す、情到り筆到り、神到り氣到る。然れども是れ少陵が家常の茶飯、于鱗の此等を取りて却つて「投贈哥舒開府二十韻」「奉送嚴鄭公入朝十韻」「謁先

主廟」「喜聞官軍臨賊境二十韻」「有感五首」等の大作を遺せしは、未だその解を得ざる所なりとす。

春歸

苔徑臨江竹。茅檐覆地花。別來頻甲子。
歸到忽春華。倚杖看孤石。傾壺就淺沙。
遠鷗浮水靜。輕燕受風斜。世路雖多梗。
吾生亦有涯。此身醒復醉。乘興卽歸家。

春歸とは春日成都に歸るの義なり、廣德二年の春、嚴武再び蜀を鎭して成都の亂將に平がんとす。故に杜も亦草堂に歸り再び之に依りしなり、起四句は敍事、中四は寫景、結四は遣情なり。

臨江の修竹、綠に苔徑に蔭し、覆地の落花、紅を茅檐に點ず、是れ卽ち所謂浣花草堂なり。曾て永く此に居らんことを願うて、兵塵の及ぶ所、勢ひ難を避けざるを得ず。終に此に別れて梓閬の間に飄泊したり、爾りしより來、甲子頻に換り、已に二年を徒過して、今漸く歸り到れば、忽ち復た春光の爛漫たるに遭ふ、以上所謂敍事にして春歸せし所以の經歷を述ぶるなり、草堂の景、亂を經しと雖も、依然として恙なし、是に於て藜杖に倚つて、孤石の嶄巖たるを看、酒壺を傾けて淺沙の明淨なるに就けば、遠鷗は水に浮んで、心靜

かにして驚かず、輕燕は風を受けて、態斜にして人に近づく、宛として舊主人の歸來を識るものに似たるなり。以上寫景、遠鷗の二句、古人嘖嘖として稱歎す、螢花叢話に云はく、老杜の詩好んで受の字を用ふ。「池光不受月。」「輕燕受風斜。」の類是れなり、東坡尤も「輕燕」の句を愛し、以爲らく燕風を迎へて低く飛び、乍ち前み、乍ちしりぞく、却つて受の字に非ざれば形容する能はずと。楊德周も亦之を詠じて盡きず、之を味はうて餘ありと云へり。沈歸愚は謂ふ、鷗燕の性情形態「靜」の字「斜」の字を以て傳出すと。浦起龍は謂ふ、上句の妙は「靜」の字に在り、下句の妙は「受」の字に在りと、見る所各〻小異ありと雖も、この一聯の虛字を運用したるを激賞するは則ち一なり。

「世路雖多梗。吾生亦有涯。」言ふこゝろは今、蜀郡の亂は漸く平らぐと雖も、世路の梗塞猶ほ多し。杜陵の故園に歸つて、優游年を送らんことは、固より望むべきに非ず。然れども吾が生は亦已に涯あり、若し梗塞全く除くの日を待たば、只〻恐らくは河の淸むを待つが如くならんのみ。故に今且つ蜀亂略〻平らぎたるを幸として、他鄉と雖も聊か自ら安んじ、醒醉興を遣り、吾意の適する所に隨うて家を爲さんと欲すとなり。無可奈何の極、すなはち放曠の詞を爲して自ら慰む、甚だ樂しむもの〻如くにして、その意は反つて極めて沈痛。

江陵望幸

雄都尤壯麗。望幸歎威神。地利西通蜀。天文北照秦。風煙含越鳥。舟楫控吳人。未枉周王駕。終期漢武巡。甲兵分聖旨。居守付宗臣。早發雲臺仗。恩波起涸鱗。

江陵は肅宗の上元元年に於て荊州を以て、南都と爲し、更に江陵府と名づく、代宗の廣德元年に到りて、吐蕃の兵猖獗を極め、終に入つて長安を侵し、西京再び陷る、代宗出でて陝州に幸し難を避く、この時少陵は蜀の梓州に在り、天子の巳に陝に幸して、更に江陵の南都に幸せんとするの議あるを聞き、この詩を作りて、早くその議を果たさんことを希望す。蓋し江陵は蜀の東隣なり、若し天子の此に駕を移すあれば、少陵蜀に居て乘輿に趨瞻するに易し、葵花傾日の精誠、自ら當に然るべきなり、題して「江陵望幸」と云ふものは、江陵の土地を代表して車駕の此に幸せんことを望むの意、獨り少陵一人の私衷のみに非ざるを形はしたり、舊注多く身江陵に居て幸を望むと解せるは非なり、詩前半は江陵の形勢、後半は望幸の本意、先づその形勢を盛んに鋪陳せるは、車駕の來幸を促す所以なり。

首句は前半を領し、次句は後半を領す、是れ全篇の大綱なり、江陵は荊南の雄鎭、改めて南都と爲りしより、規模一層の壯麗を加へたり、而して今や復た車駕來幸の議あり。之を聞くものみな踴躍盼望し、欻然として更に一倍の威神を添ふるを覺ゆ、抑〻江陵の地利たる、西は壤を巴蜀に通じ、その天文の星宿は北の方遙かに秦中の分野を照らし、東南は則ち江漢に沿うて吳越の地に臨む、故に渺渺たる風煙、越國の鳥を含

んで飛來し、片片たる舟楫、吳地の人に由つて控送せらる、形勝の雄なる此の如し、寧ろ天子の眷顧を得るに價せざらんや。前半段

而して此地實は未だ周王の駕を枉げざるなり、周王は未だ駕を枉げざるも、漢武は終に巡幸せんことを期せり、周王・漢武並に借言のみ。この地未だ駕を迎へざるも、天子の意は實に此に來幸せんとせらるゝに在るを言ふなり。「未枉」「終期」二虛字に由つて望幸の精神を挑撥し出づ、代宗の陝に幸するや、衞伯玉に才幹ありて重寄に當つべきを以て、乃ち江陵の尹を拜し、御史大夫を兼ね、荊南の節度觀察使に充つ、「甲兵」の二句はこの事を指し、且つ望幸の精神より之を忖度して、特にこの地の居守を宗臣に委ねらるゝものは、天子來幸の意あるに由るものなりとなせり。已にこの擧あり、則ち願はくは早く雲臺の儀仗を發して駕をこの地に枉げ、更に廣く恩波を推して、我の如き涸鱗の車轍の間に喻沫し、斗升の水を得んことを望んで能はざる者を救起せよ。末一句覺えず一身の私衷に入る、之を望むや切に、之を禱るや至れり、その情洵に憫傷すべし。後半段

上元の初、江陵建都の議あるや、少陵大いに之を非とし、「建都十二韻」を作りて盛んにその不可なるを鳴らせり。而して本篇は却つて駕の江陵に幸せんことを望む、大いに矛盾せるものゝ如し、詳かに前後の事勢を考へて、この疑團は始めて氷釋することを得べきなり、蓋し彼の時は長安已に收復して惟、河北のみ未だ平らがず、專意に北向して以て禍本を除かんことを力むるは、實に當時の急務にして、この際に當り都を荊南無事の地に建て、虛に國勢を張りて、民を勞し衆を動かすは、迂疎の甚だしきものなり、因つて建都の議に反對して、意外の慮を生ぜんことを言ひたるなり、本篇の時局は此と異なり、吐蕃方に披猖にして、長安

は胡塵に陷り、乘輿陝中に播越す、乃ちその君をして一歩も遠く危害の地を避けしめんとするは、臣子忠愛の至誠にして、加ふるに自己亦涸鱗轍鮒の窮厄に淪す、安んぞ來幸を盼望せざるを得んや、或はその初心に負くを疑ふものあり、是れ事勢を通觀せざるもの、皮相の見のみ、若しこれを以て少陵を議せば、眞に所謂蚍蜉大樹を撼かすものなり。

代宗の亂を致せしは、非人を信任し老臣を用ひざりしに由る。故に吐蕃一たび闕を侵して、官吏奔散し、車駕供給の資に乏しく、扈從の將士みな飢餒を免れず。已にして魚朝恩の營に幸し、詔を下して兵を徵すも、諸將、小人の讒構を怕れて至る者あることなし、當時形勢の危殆なる想ひ見るべし、陝中に幸し行在に達するに及んで、太常博士柳伉の上疏を用ひ、讒人程元振の官を削りて以て天下に謝す、是に於て諸將始めて安く、郭子儀終に衆軍を合して吐蕃を擊ち、長安を克復することを得たり。因つて子儀を以て西京の留守とす、西京已に復す、復た遠く南幸するを用ひず、故に江陵巡幸の議は玆に息みたり、大典の詩解本篇「甲兵分聖旨。居守付宗臣。」を以て郭子儀の西京留守たるを指すものとす、若し此の如くなるときは本篇の望幸は甚だ謂はれなきの事となるべし、從ふ能はざるなり。

奉觀嚴鄭公廳事岷山沱江圖

沱水臨中座。岷山赴北堂。白波吹粉壁。
青嶂插雕梁。直訝杉松冷。兼疑菱荇香。

雪雲虛點綴。　沙草得微茫。　嶺雁隨毫末。
川霓飲練光。　霏紅洲蕣亂。　拂黛石蘿長。
暗谷非關雨。　丹楓不爲霜。　秋城玄圃外。
景物洞庭傍。　繪事功殊絕。　幽襟興激昂。
從來謝太傅。　丘壑道難忘。

泡水にして中座に臨む、故に白波は粉壁を吹けり、岷山にして北堂に赴く、故に青嶂は雕梁に挿めり、是れ實に嚴鄭公が廳事に掛くる所の岷山泡江の圖なり、姑く畫を認めて眞と做して、この水この山直ちにこの北堂の中座に來るかと疑ふ、既に他の畫手の眞にせまるを刻狀して、兼ねて我が詩句をして活動せしむ、即ち杜が古詩「奉先劉少府山水障歌」の起手「堂上不合生楓樹。怪底江山起煙霧。」と同一筆法にして、一篇の意匠は此に在るなり、嚴鄭公は嚴武なり。

「直訝杉松冷。」以下の十二句、毎句山水を分寫す、杉松は是れ山、菱荇は是れ水、雪雲は是れ山、沙草は是れ水、嶺雁は是れ山、川光は是れ水、洲蕊は是れ水、石蘿は是れ山、暗谷は是れ山、丹楓は是れ水、玄圃は是れ山、洞庭は是れ水なり、而して曰はく「直訝」、曰はく「兼疑」、曰はく「虛點綴」、曰はく「得微茫」、曰はく「隨毫末」、曰はく「飲練光」、曰はく「霏」、曰はく「拂」、曰はく「非關」、曰はく「不爲」、數虛字を運用し

てその畫意を隱逗したるも、仍ほ明かにに是れ畫なりと言はずして、玄圃洞庭に比例し、形容語を借りて之を一束す、字面の表には絕えて畫圖たることを露はさゞるなり。仔細に之を尋繹して始めて知る、杉松の冷かなるは山の眞境なり、而して直ちに之を訝れば、即ち山の畫境なり、菱荇の香しきは水の眞境なり、而して兼ねて之を疑へば即ち水の畫境なり、雪雲の點綴せるは山の眞境なり、而して實は虛なり、即ち山の畫境なり、沙草の微茫たるは水の眞境なり、而して纔かに得たり、即ち水の畫境なり、毫末は筆なり、練光は絹なり、嶺雁にして筆に隨ひ、川蜺にして練に飲む、豈にその物即ち是れ畫に非ずや、毫末練光一は以て雁影の微細を狀し、一は以て水光の激灩を況して、轉た畫意に關合する所以のもの此の如し、即ち霏と曰ひ拂と曰ふ、亦豈に畫手點染着色の工を言ふものに非ずや、谷逕の暗き、若し眞境ならば或は當に雨に關するなるべし、畫境たるが故に斷じて雨に關せざるなり、楓葉の丹きは、眞境なれば固より霜降のためなり、畫境たるが故に、明かに霜のためならざるなり、然れば字字句句は是れ畫にして、又、字字句句その畫たるを明言せず、首段に於て「臨」「赴」「吹」「挿」と云へる四虛字の神理を搖曳して以て一大段と爲す、眞に極奇極巧極微極靈の文字と謂ふべきなり。

「繪事功殊絕。」此に至りて始めて畫圖たるを點睛し、「幽襟興激昂。」此に至りて始めて奉觀の意を點睛す、因つて謝太傅を以て嚴鄭公に擬し、その丘壑の情を以て鄭公が身上より、山水の上に拍合せしむ、章安句適にして、行文浪靜かに風恬なるが如し、是を鋪陳排比と曰ふ、長律を誤まつて排律と云ふはこの一體あるに坐す、卷首に於て之を辨じたるが如し、杜陵にして之あるは、適、その才の洪纖盡く具はらざる無きを見る、後人專意に之を攻めば、則ち淪して小家數に入り、終に雕蟲篆刻の譏なき能はず、是れ學者の尤も辨ぜざるべ

からざる所なり。仇兆鰲は云ふ、昔人此詩を論じて宋人詠畫の祖とせり、但、その山水を分寫せるは亦謝靈運が始寧墅を過ぐるの詩に本づく、杜は用ひて以て畫を詠ず、更に較、詳細精工なるのみと、是れその淵源を明かにするなり、又、胡夏客は云ふ、起聯は莊重にして、接聯は精警に、收語は穩足なり、これ最も入格の篇なりと、所謂入格とは後世の所謂排律に似たるを以てその格に入ると爲すもの、長律に混ずるに試律の格を以てするものに非ずと謂はんや。若し乾隆帝がこれを評して精嚴流麗、點睛の處は虛字に在り、讀者宜しく之を細玩すべしと云へるに至つては、至當の論、嘴を容るべきなし。

乾隆の御批又謂ふ、少陵の心は國家に繫げり、往往にして題に因つて闌入す。今嚴武のために題畫して此に及ばざるは、蓋し志將に遠引せんとす、故に語は旁及せざるなりと。これ本篇が少陵の常作に似ず、絕えて國家の事に關係したるものなきがために辯護したるものゝ如し、然れども詩人の意境は正に廣し、たとひ少陵が忠君愛國の至誠なりとも、豈にその一言一動、細となく大となく、盡くみな宜しく國家の事に關係すべしといふべき耶、渠と雖も豈に必ず情を山水に怡ましめんと欲するなき歟、渠と雖も豈に必ず風月に留連するなきを保せん歟、若し必ず此の如くならざれば則ち少陵に非ずとせば、是れ少陵を以て村夫子視するものなり、一經自ら守るの腐儒視するものなり、題畫は自ら是れ題畫なり、國家の事は自ら是れ國家の事なり、その題に由つて闌入するものあるは、之を作るとき適、百感胸臆に過りて、復た言に形はすに止むを得ざるものあるを以てのみ、經常一樣の時に在りて畫山水に題す、その家國の事に及ばざるは論勿きなり、何ぞ必ずしも復た遠引の志の有無を問はん、乾隆の批語は持平の定案多し、然れども亦時にこの腐論あり、是れ沈德潛等が一種門戸の見に感化せられしものにして、渠が錢謙益の人と爲りを惡むの餘、その集を燬して世

に行はしめず、甚だしきは德潛が撰定せる別裁集に於てすら、その錢・吳等明の遺老を收むるを嘱りて、痛罵毒呰を加へたる如き、齊しく已甚の行を免れざるは、職として此に由るなり。

冬日洛城北謁玄元皇帝廟廟有吳道士畫五聖圖

配極玄都閟。憑高禁籞長。守祧嚴具禮。
掌節鎭非常。碧瓦初寒外。金莖一氣旁。
山河扶繡戶。日月近雕梁。仙李盤根大。
猗蘭奕葉光。世家遺舊史。道德付今王。
畫手看前輩。吳生遠擅場。森羅移地軸。
妙絕動宮墻。五聖聯龍袞。千官列雁行。
冕旒俱秀發。旌旆盡飛揚。翠柏深留景。
紅梨迥得霜。風箏吹玉柱。露井凍銀床。

身退卑周室。　經傳拱漢皇。　谷神如不死。
養拙更何鄉。

この詩本選に在つては杜詩の最後に錄すと雖も、實は杜の集中近體の開卷第一首たり。朱鶴齡が考ふるところに由れば、詩中五聖云云の事實は玄宗の天寶八載閏六月の事なるを以て、この詩は當に天寶八載の冬の作なるべし言ふ、これ或は當に然るべし。玄元皇帝廟は老子の廟なり、唐の世老子を以てその祖なりとし、皇帝の諡號を贈り、祭祀の隆を極む、按ずるに封演が見聞記に唐の高祖の武德三年晉州の人吉善なるもの、羊角山に行きて白衣の老父を見る、曰はく吾がために唐の天子に語れ、吾は是れ老君にして卽ち汝が祖なりと、高祖之を信じ廟をその地に建つ、是れ唐の老子を崇祀せる始めなり、高宗の乾封元年、岱岳に行幸の還途、親しく老君の廟に詣で、追尊して玄元皇帝と曰ふ、是れ老子に帝號を加ふるの始めなり、玄宗の時に及んで、老子を尊信する最も厚く、老子の文、河上公の舊注時に不經に涉るものあるを以て、帝親ら之が注を作り、學者をして校習せしめ、天下の學官に令して之を朝廷の考試に用ひしむ、又、史記の列傳に伯夷を冠とせるを以て、勅してその次を改め、老子の傳を開卷に置かしめ、又、兩京の諸州に制して、所在に玄元皇帝の廟を建てしむ、天寶元年に至つて、改めて太上玄元皇帝宮と名づけ、二年更に長安に在るものを改めて太清宮と曰ひ、洛陽に在るを太微宮と曰ひ、其餘各處に在るを紫微宮と曰ふ、この詩は洛城北と云へば、卽ち太微宮に謁したるの作なり、天寶八載閏六月、玄宗太清宮に謁し、玄元皇帝に封號を册して聖祖大道玄元皇

帝と曰ひ、又高祖・太宗・高宗・中宗・睿宗の五帝に大聖皇帝の號を加へて廟中に配饗す、これ卽ち五聖の事なり、唐世老子を國祖とする由來大抵是の如し、故に少陵がこの作亦老子の功德を敍述し、反覆申詳す、是れその國體を貴ぶ所以にして、洵に集中鉅麗の冠冕たり、李因篤曰ふ、此篇乃ち公が開手の長律、鳳翔初めて舒べ、九苞煥采あり、宜なりその一世に雄視するやと。是れこの詩の開卷に在るより立論したるものにして、未だ開手の長律なりと斷言するの其當を得たるや否を知らざるも、于鱗の移して之を最後に置きしは洵に何の故なるを知るに苦しむなり。詩は四句を以て一意を易ふ、獨り「畫手看前輩。」以下の一解八句を以て一段としたり、蓋し意は玄元皇帝の廟に謁するに在りと雖も、吳道子が五聖の像尤も人目を動かすものあるを以て特に意を加へて之を寫したればなり。

首四句は全篇の總冒なり、その廟貌・祀典、尊と稱し祖を追ふの意、四句中に畢具せり、配極とは北極に配するの意、廟洛城の北に在るが故にしか云ふなり、玄都は老子の居る所、老子の道德、玄を以て最上の至理とす、故に老子廟を謂うて玄都と爲すなり、閟とは深閉の意、廟の森肅なる一字を以て之を形容したり、漂高は廟の位置なり、禁鑰は以て往來を防止する所のものにして我國の俗に「竹矢來」と謂へるに同じ、廟の四面は之を繚するに禁鑰を以てし、妄りに人の出入するを禁ずるなり、守祧は廟祝なり、周禮にこの官名あり、掌節も亦周官の名、唐の時玄元廟に令丞各、一員を置く、然れば周官を借つて以て令丞を分指したるなり、廟は國祖を祭れるを以て特にこの官を置き、その歲時の具禮を嚴重ならしめ、併せて非常の災變を鎭護せしむるなり、廟の大概此に見ゆ、故に以下は層を逐うて之を分敍したり。

「碧瓦初寒外。」一句略〻時序を點じ、題面の多日と云へるに一照して、下文別に之に應ずるものあり、然れ

ども文勢は廟貌より一順に說下す、唯、廟を形容するの詞と做して見るべきなり、碧瓦にして天宇初寒の外に超出す、その高迥の氣象想ふべし、而して金莖の銅柱と一氣に相旁ふ、その連亙の宏敞なる亦知るべきなり、故に京畿の山河は盡く前に朝宗して繡戸を扶擰し、天上の日月も亦下に光臨して雕梁に接近す、以上四句は廟制の盛を言うて上段「配極」「憑高」の意を申するなり。老子は生れて能く言ひ、李樹を指して曰はく、此を以て吾が姓と爲さんと、唐は李姓なり、老子を尊んで祖と爲すは實に此に本づく、故に「仙李盤根大。」と云ふ。漢の武帝は猗蘭殿に生れたり、帝王の生所なるを以て借つて唐の歷代の帝宮を謂ふ、錢謙益は猗蘭は武帝の故事たるを以て、專ら玄宗を借稱するなりとす、然れども已に「奕葉光」と云へば玄宗一人を指したるものに非ず、又、この句單に玄宗を指すとせば、後の「今王」は贅冗たるを免れざるの觀あり、故に從はず、史記の列傳に老子を載すと雖も、その世系もと甚だ明白ならず、因つて「世家遺舊史。」と云へり。錢は史記の之を列傳に載せて世家に載せざるを言ふものなりとす、これ又從ふ可からず、說は後に見ゆ、「道德付今王。」とは玄宗尤も老子を崇信して、手づからその道德經を注釋せられたれば、爲に語を設けて老子の神靈殊に今皇の聖明に感じ道德の玄理を授與したりと云ふなり、以上四句は老子を崇祀する緣由を書し、以て首段「守祧」「掌節」の句に應じたり、首段の意此に至りて申明せざる所なし、故に下文はその廟中の畫に及ぶ。

朱景玄が畫斷に、吳生東都玄廟の五聖千官を畫がく、宮殿冠冕、勢ひ雲雷を傾け、心は造化を奪ふ、神品の上に居れりとあり、少陵が見る所は卽ちこの畫なり、正にその畫の神妙なるを言はんと欲して先づ之を畫がきしものゝ傳より始む、筆地綽綽乎として餘態あり、曰はく畫手は是れ我が前輩の吳生にして、夙に擅場の

譽あるものなりと、吳生は吳道子なり、玄宗召して宮中に入り、名を道玄と改めしめ、每にその畫を觀て咨嗟して曰はく、吳生の畫は筆を下して神あり、張僧繇の後身なりと、その激賞せらるゝ此の如し、擅場と推す所以なり、その畫がく所の森羅萬象、みな地軸を移運するが如く、是を以て妙絕の名、宮墻の內外を喧動せり、道子曾て地獄變相の圖を作る、渠が一世の傑作と稱す、森羅の句此を指すものに似たり、地軸を移すとは大抵筆造化を奪ふの意なり、宮墻の語漸く逗して中廟の畫に入る、故に之に接して五聖云云と云ふ、今廟中の畫を觀るに、五代の列聖龍衮の袍を聯ね、千官の從臣雁行の序を列す、帝王の戴く所の冕旒は光彩俱に秀發し、千官が捧ぐる所の旌旆は勢色盡く飛揚して、宛としてその端嚴整肅の狀を親睹するが如し、道子の畫手に非ざるよりは、爭でか此あるを得んや、以上の八句卽ち旒中の畫を正寫するなり。

「翠柏」の四句はこの游の冬日たるに就き、廟中の物よりその景を帶言す、その線索の伏する所は遠く「碧瓦初寒」の一句に在り、是れ已に說明したるが如し、翠柏、紅梨、風箏玉柱、露井銀床、みな廟中の有る所二三の虛字に斡旋せられて、乍ち森爽の氣を帶び、活動して寒候の風色となれり、句法は岷山泡江圖とその揆を一にす、「深留景」とは陰森の中に日光を見るなり、「迥得霜」とは梨子霜の迥氣を得て始めて紅熟せるなり、風箏は廟檐に掛くる所の風鈴なり、今俗に紙鳶を謂つて風箏と爲せるは本篇の義に非ざるなり、時正に寒峭、氷柱四檐に垂れ、風鈴と相敲動して聲あり、露井は無屋の井なり、銀床は轆轤を飾るに銀を以てしたるものなり、寒意は凍の一字に於て之を見る。

結四句は歸つて玄元皇帝に到り、老子の道高邁なるを頌揚す、「身退卑周室。」とは老子周の柱下の史と爲り、周德衰へたるを知り、乃ち青牛に乘じて去る、是れ周室を卑しとして身を退きたるものにして、老子の見

識の高を言ふ、「經傳拱漢皇。」とは老子の道德經傳へて漢代に至り、河上公出でゝその奥旨を文帝に授く、是れその經傳はりて漢皇をして拱手して聽かしめしものにして、老子の教法の遠きを言ふなり。その本文に曰はく「谷神不死。是謂玄牝。」と、王逸は注して谷神とは谷の中央に谷なきものを謂ふ。形なく影なく、逆らふことなく、違ふことなしと。然れば谷神不死とは老子が經中の甚深微妙不可思議の第一義なり、又、老子は常に拙を養ふを以て大宗旨と爲す、この兩句の意は、老子の谷神にして、果してその言ふ所の如く、永劫不死不滅のものなりせば、その神靈は定めて永くこの壯麗の廟中に鎭坐せらるゝなるべし、拙を養ふを以て主とすと雖も、この廟にして外更に何の鄉に向つて去ることあらんや、その命意此の如し。壯麗の廟宇は養拙の主義に反對するが如きことのあるを以て、ために之を辯護し、以て國體を完うしたるなり、然るに語尾稍〻過勁に似たるを以て、終に之を諷刺の詩なりとするの說を滋生し、聚訟の紛起するを致せり、今その說の重なるものを後に擧ぐ。

錢謙益は全くこの詩を解して、諷諫の微詞なりとす、故にその箋に曰はく、「配極」の四句は玄元廟の宗廟の禮を用ひて不經なるを言ふなり、「碧瓦」の四句はその宮殿の踰制たるを譏るなり、「世家遺史記。」とは史記の世家に列せざるを謂ふ、開元中に勅して列傳の首に升すとも之を世家に升す能はず、蓋し微詞なり。「道德付今王。」とは玄宗が親しく道德經を注し、及び玄學を置けるも、而も未だ必ずしも道德の意を知らざるを謂ふ、亦微詞なり、「畫手」以下は吳生の畫圖を記す、晁旋旌旆、耳目を炫燿す、見戲に近きを譏るなり、老子の五千言、その要は清靜無爲にして國を理し身を立つるに在り、この故に身退けば、則ち周衰へ、經傳はれば、則ち漢盛なり、たとへ死せざらしむるも、亦當に名を藏し拙を養ふべし、安んぞ肯へて人に憑り形を降して妖と爲り神と爲り、以て世主の崇奉を博せんや、「身退」以下の四句、一篇諷諭の意、總べて此に見はると。

浦起龍は此詩を頌揚の體を得たるものとす、故にその解に曰はく、本篇は字字典重にして句句高華なり、事に據りて直書し議論を參へず、純ら是れ頌の體なり、而して之を細繹するに、「配極」の四句は亦鉅典に似たり、亦悖禮に似たり、「碧瓦」の四字は亦壯觀に似たり、亦踰制に似たり、「盤根」「奕葉」は亦綿遠なるに似たり、亦矯誣なるに似たり、「遺舊史」は亦反挑するに似たり、亦實刺するに似たり、「付今王」は亦同揆に似たり、亦假訊に似たり、紀畫の處も亦尊崇するに似たり、亦戲に涉るに似たり、「谷神」「何鄉」と云へるも亦呼吸接すべきに似たり、亦神靈依らざるに似たり、而も讀み去つて毫も圭角なし、佳と爲す所以なり、錢箋は語語指斥せりとす、意は是ならざるに非ず、但、學者善く之を會せずして、偏に譏刺の一邊に在りて看去れば、則ち之を失すること遠し、蓋し題は朝廷の鉅典に係る、體は宜しく頌揚すべし、他事の諷諫尙ほ顯陳すべきの比に非ざればなりと。

沈德潛が偶評は云ふ、通體諷を含み、末尤も婉曲なり、老子の學は谷神不死を以て主と爲す、如しそれ果然ならば、方に無何有鄉に拙を養ひ名を藏すべし、豈帝王の崇祀を以て榮とせん耶、詞微にして顯はれたりと、是れ前說を主張するものなり。

乾隆帝が御批は云ふ、「頌揚の體、諸を清廟明堂に擬す、その氣象は之に似たり、唐人の老子を崇祀する、事不經に屬したれば、譏を千古に貽せり、然れども甫は當時の臣たり、推崇固より應に此の如くなるべし、その典重中に飄逸を帶び、精工中に排宕あるは、則ち大手人に異なる處なりと。是れ後說を推擴したるもの

なり、顧ふに浦起龍の解は諷諭の詞に非ざるを辨ずれども、未だ斷じて諷諭の意なしと言はず、因つて此に至つてその詞意倶に無き所たるを顯言したり。

以上列擧する所の說の採擇は、一に之を讀者に放任せんとす、然れども吾、正に錢謙益が唐の老子を祀れるに何等の不平かありて、必ず字字句句之を諷諭なりと附會せるの意を解するに苦しむ。蓋し宋儒の學說一たび出でゝ、儒佛老莊の間、必ず鴻溝を劃し、儒者は佛老を排斥して異端邪說なりとせずんば飽かず、この門戸の見、牢然拔けず、則ち終にこの僻解を下すに至りしもの歟、知らず、事は不經に似たるも、その祖として追崇するに於て何の妨ぐべきなし、則ち少陵唐の臣子として之を頌揚する、亦何の咎むべきかあらんや、乾隆の定說確然として不易なり、吾は盡く之に適從せんとす。

聖善閣送裴廸入京

李頎

雲華滿高閣。苔色上勾欄。藥草空堦靜。
梧桐返照寒。清吟可愈疾。携手暫同歡。
墜葉和金磬。饑烏鳴露盤。伊流惜東別。
瀾水向西看。舊託含香署。雲霄何足難。

前四句は聖善閣、中四句は裴廸と與に聖善閣に登る、後四句は送別なり、聖善閣は洛陽の佛閣なり、雲華高閣、苔色勾欄、藥草は空堦に滋して靜かに、梧桐は返照を受けて寒し、佛寺秋日幽淸の狀掬すべし、この佳景あり、則ち上に淸吟せば自ら疾病を癒すに足る、因つて裴と與に此に登れば、墜葉は蕭蕭として金磬の響に和し、饑烏は啾啾として露盤の上に鳴けり、これも亦閣中の景、然れども上四句は閣に就いてその景色を總領し、これは人に就いてその眼中より見る所の一事一物を寫せり、伊流は水の名、洛陽に在り、故に「東別」と云ひ、瀾水は長安に在り、故に西看と云ふ、裴は今將に東洛陽を去つて西長安に向はんとするなり、雜舌含香は尙書郎の故事、含香署は尙書省を謂ふ、裴もと曾て尙書郎に官す、然れば今の京師に之く、必ず更に身を雲霄の上に致すの榮顯あるべしとなり。

長律は杜に至つて開廓殆ど盡く、故に一たび彼の雄渾偉大の篇什を讀みては、その餘諸人が風景に留連し性情を陶寫したる作、如何に勻整を極むるとも、彼等に較べては甚だ慊然たるの思あり、以下の諸篇を讀むもの、或は當にこの慊あるべし、然れども詩の風韻高趣は却つて又此に在りて彼に在らず、詩を學ぶものは各〻その性情の近き處より入らんと要すと雖も、兩者は斷じて偏廢すべからず、是れ我がさきに所謂根柢興會の別なり、この詩通篇穩妥を旨としたるも、「墜葉」の二語の如きは、宜しく警句として之を摘すべきなり。

早秋與諸子登虢州西亭觀眺

岑參

亭高出鳥外。客到與雲齊。樹點千家小。
天圍萬嶺低。殘虹挂陝北。急雨過關西。
酒榼緣青壁。瓜田傍綠溪。微官何足道。
愛客且相携。唯有鄉園處。依依望不迷。

突兀として起り、一氣に開拓す、氣象濶壯、是れ嘉州が獨擅たり、前半截、力を極めて之を寫す、故に後半截は澹澹描し來り、その節を緩にして以て收む、章法相配し得て更に好し。

亭は高く飛鳥の外に出でたり、故に客の到るや白雲と齊し、この種の落筆、實に爽の思ふ所に匪ず、亭の高き此の如し、則ちその觀眺する所のもの必ず遠、蔥蔥たる樹間に點綴せる千家は小なること豆の如く、穹蒼の天垠、圍繞せる萬嶺は低くして邱に似たり、忽ちにして殘虹の隱滅して、仍ほ陝州の北偶に挂るを認む、因つて而して急雨の今や函關の西邊を過ぐるを知れり。虢州の地は壤を陝州に接して、西函谷の關を望む、二句地名を用ふる者は、虢州の西亭たるを明かにせんとすればなり、我、今諸子と俱に酒榼を携へて青壁に攀緣し、以てこの西亭に登臨す、時正に秋なり、一路の瓜田綠溪の水に沿うて正に熟せるを見る、夫れ瓜は東陵侯の種ゑて以て隱栖したりしものなり、我の如き微官亦何ぞ道ふに足らん、惟〻諸子の清風を愛するがために聊か相携へて此に來り、以て一日盤桓の樂を成すのみ、眺望の遠前述の如くなるときは、千里蒼茫その何

處なるを辨識する能はず、獨り我が鄉園の處あり、我をして依依として望眺を迷はざらしむ、鄉思の切なる以て見るべきなり、瓜田に由つて想うて微官に到り、微官に由つて想うて鄉園に到る、而して上文千家萬嶺、殘虹急雨、照らしてこの依依不迷の望眺中に入る、絲絲此に束して一罅漏なし、何等の完密。

清明宴司勳劉郎中別業　祖詠

田家復近臣。行樂不違親。霽日園林好。
清明烟火新。以文常會友。惟德自成隣。
池照窗陰晚。杯香藥味春。欄前花覆地。
竹外鳥窺人。何必桃源裏。深居作隱淪。

「田家復近臣。」五字劉郎中とその別業とを雙提す、その人は則ち近臣にして、その地は却つて田家に在るなり、行樂して而して親朋に違はず、必ず交游と之を共にす、是れ劉郎中が雅抱、併せて今日會宴の由を見るなり、「霽日」の二句はその時の清明たるを點ず、「以文」の二句は今日の會宴を正寫する所以なり、衙陰晚に臨んで池水自ら照らす、夕陽に映ずればなり、藥草味を助けて春杯更に香し、酒の美なるがためなり、欄前の花は地を覆へども掃はず、竹外の鳥は人を窺うて馴るゝに似たり、この四句極めて田家別業幽寂閒曠の

景を狀す、近臣にしてこの地に居る、その人品言はずして知るべし、故に末又桃源を以て陪と爲し、その仙趣を得たるを美して結としたり、句は毫しも修飾せず、妙處は天眞爛漫たるに在り、「以文會友。惟德成鄰。」論語の語を用ふ、今日より之を見れば未だ甚だ穉氣あるを免れざるに似たり。

祖詠は洛陽の人、開元十二年の進士、少うして王摩詰と吟侶たり、摩詰濟州の官舍に祖詠に贈るの詩あり、云ふ、「結交三十載。不得一日展。貧病子既深。契濶余不淺。」と想ふに亦流落不遇にして極めて時に獲られざるものなるべし。殷璠が詩評に祖詠を謂つて、剪刻省靜にして、思を用ふる尤も苦、氣は高からずと雖も、調は頗る俗を凌ぐ、稱して才子と爲すに足ると云へり、詠の如きは固より亦名家の數、然れども唐一代の詩を尺幅中に選する本編の如きに在つては、未だ必ずしも之をその列に加へざるべからざるものには非ず、五言古詩の崔署に於ける、七言古詩の衞萬・薛業等に於ける、みな此と同例なり、下の鄭審も亦然り。

奉使巡檢兩京路種果樹事畢入秦因詠歌　鄭審

聖德周天壤。韶華滿帝畿。九重承渙汗。
千里樹芳菲。陝塞餘陰薄。關河舊色微。
發生和氣動。封植衆心歸。春露條應弱。
秋霜果定肥。影移行子蓋。香撲使臣衣。
入徑迷馳道。分行接禁闈。何當扈仙蹕。
攀折奉恩輝。

玄宗の開元二十八年正月、兩京路幷に城中苑內に遍く果樹を種ゑしむ、鄭審蓋し巡檢使として種樹の任に當り、事畢つて長安に歸る、因つてこの事を詠歌して、以て天子の德草木に及ぶを見るなり、鄭審の傳は詳かならず、傳へ云ふ、是れ三絕を以て名ありし鄭虔が姪にして、杜少陵の詩に「何人爲覓鄭瓜州。」(解閑)の句あり、その下に今の鄭祕監審なりと自注す、卽ち是れなりと。これに據れば亦開元天寶間の名士、名を少陵の集中に掛くるを見れば、その詩に工なりしは知るべきなり、詩は直ちにその事を述ぶ、甚だ平衍にして出色の所なきに似たり。

聖德より着筆し、接するに時令を以てす、然れども韶華の二字は是れ種樹の根、徒設に非ざるなり、渙汗は天子の明詔を言ふ、易に本づく、鄭玄の注にその號令を散ずる汗の出でて反らざるが如きを謂ふとあり、然れば是れ雙聲の形容語なるも、仍ほ言下に綸言如汗の意を含めるものと知るべし、「千里樹芳菲。」一句題面に入る、陝塞關河は卽ち兩京路にして、餘陰薄く舊色微なりとは、韶華の時節を襯言する所以、時の初春たるに對して舊臘陰寒の氣色全く去りしと云ふなり。正に群物發生の時、宜しく果樹を封植すべし。和氣動き衆心歸すとは美を聖德に歸するなり。「春露條應弱。」は現在に就いて之を想像し、「秋霜果定肥。」は將來に向

つてその成育を期す、この一句なくんば種うる所のもの是れ果樹たるを見はす能はざるなり、「影移行子盡。」春條を承けて之を申し、「香撲使臣衣。」秋果を承けて之を申す。齊しく種樹の人の意中の語なり、已に種ゑ畢つて長安に歸れば、滿路の枝條鮮鮮として兩行に分れ、馳道より直ちに禁闥に接す、未だ種ゑざる時に比べて頓にその觀を改む、故に徑に入つて殆ど迷はんと欲するなり、結句は聖德に應じ、種樹の上に映合して一束す、他日仙蹕の宮を出づるあらば、我必ず扈從して以て一たび果樹を攀折し、雨露の恩輝に霑へるを分つべしとなり、用筆は工ならざるに非ず、只〻種樹聖德上に就いて左右に鋪排し以て一章を組織す、則ち長律の精神を泯却したる者に非ずと謂ふべからざるなり。

行營酬呂侍御　劉長卿

不敢淮南臥。　來趨漢將營。　受辭瞻左鉞。
扶疾拜前旌。　井稅鶉衣樂。　壺漿鶴髮迎。
水歸餘斷岸。　烽至掩孤城。　晚日當千騎。
秋風合五兵。　孔璋才素健。　早晚檄書成。

劉が集中もと自注あり、これに據れば劉時に隨州の太守を以て襄陽の軍に從ふ、呂と同幕に在り、呂の詩、

舟次の賊境に隣り、復た水火の虞ありて征稅に迫らんことを憂ふるの意を示したり、因つてこの作を以て之に酬ゆるなり。

隨州は淮水の南に在り、故に「不敢淮南臥。」と云ふ、汲黯の傳（漢）に武帝黯を淮陽の守と爲し謂つて曰はく、吾、公の重を屈し、臥して之を治めしめんとすと、この句、之を翻用したり、我が敢へて淮南に臥せずして來つて襄陽の軍營に趨く所以のものは、大將の召に應じ左鉞右旄の盛を瞻仰せんとするがためにして、是を以て病を扶けて來つて、轅門の前旌を拜せしなり、「扶病」の二字「臥」の一字より線を引く。

然るに呂侍御の參謀、能く民の疾苦を知り、その井田の租稅を寬にしたるを以て、鶉衣の賤民も亦樂しまざるは無く、大軍の到る所鶴髮の父老皆簞食壺漿して歡迎す、是れ大將のその人を得たるに坐すと雖も、侍御の功實に與つて力あるなり、この二句卽ち自注の征稅に迫るの意を申す、抑〻襄陽の軍營たる、漢江の流に瀕したれば、往往洪水氾濫の憂ありて今や幸に水は歸引し去ると雖も、漂痕は仍ほ斷岸の間に存せり、況んや賊境に近ければ、夜半の烽火忽然として至れば、立刻に延いて孤城に及ぶの懼なきに非ず、是れ亦自注に復た水火の虞ありと謂へるものなり、侍御は能く慮つて此に及ぶを以て、一軍靜肅、以て不時の變に備ふ、晚日は千騎に當れり、軍容の盛を狀す、秋風に五兵を合せり、勢威の張を狀す、五兵は五種の兵器猶ほ五戎と云ふが如し、況んや侍御の才の素より健なる、古への陳琳に比するに足るものなり、早晚頭風を癒すの檄文を草して、以て賊軍の罪を問ひ亂を正すものあるべきなり、孔璋は陳琳の字なり、檄書は討賊に就いて義を見ると雖も、實は暗に起段臥病の意を反挑して相回映す、却つて毫も作意なくして自然に出づるが如し、故に妙なり。

送鄭説之歙州謁薛侍郎

漂泊來千里。謳歌滿百城。漢家尊太守。
魯國重諸生。俗變人難理。江傳水至清。
船經危石住。路入亂山行。老得滄洲趣。
春傷白首情。嘗聞馬南郡。門下有康成。

起句は鄭説、次句は薛侍郎、三句は薛を申し、四句は鄭を申す、「俗變」の二句は薛の歙州、即ち謳歌して百城に滿つる所以、「船經」の二句は鄭歙州に之く、即ち漂泊して千里に來る所以、「老得」の二句は作者が送別の情、末二句は又馬南郡を以て薛に比し、鄭康成を以て鄭に比す、起手に映合する所以なり。

起語は孟子の叟千里を遠しとせずして來るの語（梁惠王上）に取る、來ると云ふものは即ち歙州に之くなり、今夫れ鄭説漂泊の身を以て千里を遠しとせずして歙に之くものは何ぞや、薛侍郎が政績嘖嘖としてその德を謳歌するもの百城に滿つるが故に、慕うて之に赴くのみ、漢家の政は太守を尊と爲す、侍郎が治の如きは之に當りて媿なきなり、魯國の學は諸生を重んず、鄭今漂泊すと雖も、必ずその棄つる所と爲らざるべきなり。

沈約が詩の自序に、新安の江水至つて清しと見ゆ、新安は歙州なり、歙州の土俗變じ易く、その地に宰たるもの往往治め難しと稱す、而して新安の水は、則ち至清なりと傳ふ、薛が治績も亦この水の如く、尤も至清の名あり、宜べなり、謳歌の百城に滿つるや、鄭は今やこの江水に沿し、水程には則ち船危石を經て住まり、陸行には則ち路亂山に入つて行く、薛が清名を慕ふに非ずして、豈に能く漂泊この千里行路の難を辭せずして來らんや、その薛を寫すは則ち鄭を寫す所以にして、鄭を寫す筆筆薛を離れず、綜貫羅縷の妙を極めたり、尤も妙は江水至清の悟已に歙州に切にして、亦薛が治績に喩へ、兼ねて文脈を「船經」云云に引く、八面玲瓏穿透せざる無きに在るなり。

鄭已に歙に之きて薛に依る、則ち宜しく老いて滄州の趣を得るに庶幾かるべし。「滄州趣」の句上文山水の景語より一轉して之を開き、縱横擒縱す、妙言ふべからず、而して我は則ち如何、この別離に臨んで白首傷春の情に堪へざるなり、斗然として束ねて自己が送別の情緒に入る、兎起り鶻落つるの觀あり、昔者馬融の南郡に太守たるや、その門下に鄭康成あり、康成は鄭と同姓なり、然れば鄭の薛に於けるは猶ほ康成の馬融に於けるが如き聲譽あるべし、是れ鄭のため賀すべくして、而して白首傷情の我、則ち益〻その況遇を羨むに付きて自ら悼み、この別離に依つて更に悲抑に堪へざるものあるなり、惜別は是れ一層、他を羨むは是れ一層、自ら悲しむは是れ一層、多く語を着けざれども、三層の意筆端に宛轉廻生す、五言の長城、是に於て乎その溢美に非ざるを知る。

中唐の長律、錢起・盧綸みな長卿と相埒す、起が「湘靈鼓瑟」の作、所謂「曲終人不見。江上數峰青。」の如きは試律に屬すと雖も、亦千古に傳誦してその神韻を激賞する所のものなり。元・白が滔滔一千言、厭ふ可きものなきに非ざるも、香山が「東南行」「游悟眞寺」の諸作の如き、開闔變化未だ少陵を

して獨り美を前に擅せしめざるものあり、微之が豔體の諸作に至つては、才調集採つて以て一格に備ふ、溫・李の新聲を開くに於て尤も瀏覽せざるべからざる者たり、溫・李にして下、長吉(李賀)・樊川(杜牧)、以て皮(日休)・陸(龜蒙)に至る、三唐の變是に於て略〻之を盡すことを得、而してこれ並に于鱗の棄てゝ顧みざる所のものなり。

富山房百科文庫

—26—

唐詩選評釋

上

定價八十錢

昭和十三年八月十日印刷
昭和十三年九月一日發行

著作權所有
檢印

著者　森槐南

著作權者　千葉市登戸五丁目百〇五番地　森健郎

發行者　東京市神田區神保町一丁目三番地　合資會社　富山房

代表者　富山房社長　坂本嘉治馬

印刷者　東京市小石川區久堅町一〇八番地　君島潔

發行所　東京市神田區神保町二丁目三番地　合資會社　富山房

電話神田二一七一—八番
振替東京五〇一番

（共同印刷株式會社印刷）

新刊書目

〔1〕
萬葉代匠記（一）
武田祐吉校註
全五六五頁
定價九十錢 〒十二錢

萬葉研究が先づ代匠記の續硫から出發すべきは言ふを俟たない。茲に契沖著精選木代匠記を良心的に覆刻すると共に、初稿本中の卓說をも掲げ、脚註の欄に於ては傳來諸本の異同、其後の研究等今日迄の萬葉研究の成果を集めて此一書に凝縮した。全七卷のうち第一卷には豐穆・卷一・卷二を收め、卷頭校訂者の懇切な代匠記の解說及契沖傳を掲ぐ。

〔8〕
全註 金槐和歌集
川田順校註
全二六八頁
定價五十錢 〒六錢

金槐集の歌の一々に就き、その本歌先行歌類似歌を調査して併せ掲げた點既刊金槐和歌集と全く行き方を異にする。又卷頭「解說」に於て實朝の人及び作品を論評し、「全註後記」は此研究の到り得たる結論である。卷末に「貞享本・類從本の異同」及所載歌全部の索引を附す。

〔9〕
列强現勢史・ドイツ
大類伸著
全四〇二頁
定價八十錢 〒九錢

列强現勢史は八册より成る最も新しい書下しの歷史である。今日に重點をおき、何故今日かくあるかを五十年の過去より說き起した新鮮な方法を取る。こゝにトップを切つたドイツ篇は獨墺合邦迄を其內容にもち、哲學文藝その他現代ドイツ百般の事象にも詳しい。插畫多數。

〔10〕
大科學者の歩める道
（ローベルト・コッホの生涯）
ウンゲル著
宮島幹之助
石川錦次共譯
全二九四頁
定價六十錢 〒六錢

細菌學の鼻祖として又結核菌の發見者として全人類の恩人たるローベルト・コッホの生涯を描いた傳記小說である。たのしみ乍ら讀めて享ける利益の最も多いのは傳記小說であるが、本書の如きはその尤なるものといへる。

〔11〕
役の行者
（附、神變大菩薩傳）
坪內逍遙著
河竹繁俊解說
全二五三頁
定價五十錢 〒六錢

役の行者は坪內博士の劇作中第一位に推さるべきもの、改作による二種の「役の行者」及「神變大菩薩傳」と其映畫化の準備に拓れた「影繪役行者」の自畫、並に博士がこの劇作に用ゐられた行者に關する古文獻の一切を收めた。

〔12〕
ジオコンダの微笑
オールダス・ハックスリー著
林正義譯
全一九四頁
定價四十錢 〒六錢

「ジオコンダの微笑」を始め、「半どん」「蠅のトンネル」「親切な名付親」等の諷刺に充ちた短篇に、「何故國にゐないのか」「眼鏡」「旅にもつて行く本」の隨筆及支那日本等への「東方紀行」などを收む。卷末附するところのオールダス・ハックスリー人及作品一は譯者の力作である。

〔13〕
ゲーテ箴言集
ゲーテ著
石中象二譯
全二〇〇頁
定價四十錢 〒六錢

ゲーテのやうな偉人の言葉は常に新しい。彼がその生涯になしたよき言葉は概ねこの集にある。これは美しく編まれたいはば「ゲーテ論語」であり、讀む人の胸奥に輝れる珠玉の文字である。

〔14〕
若松賤子集
若松賤子著
全一八〇頁
定價四十錢 〒六錢

半襟の柄を撰ぶやうに、言葉を吟味してつくり上げた異國人情の物語。我國にキリスト教文學ありとせば、この集こそその尤なるべく、我國に少女小說ありとせば、これぞ絕好の佳作である。

〔15〕
新訂 植物生態美觀
三好學著
全一九一頁
定價八十錢 〒六錢

彩色版・寫眞版多數を挿入した美しい本。植物の生態美觀をその道の書宿によつて理路整然と、しかも興趣津々の中に說かれた珍らしい本。科學者の筆としてまさに異色あるもの。

〔16〕
名曲解題
邦樂舞踊辭典
瀧美清太郎著
全三四三頁
定價七十錢 〒九錢

邦樂と舞踊の專門辭典といふのみでも我國唯一の存在である。將來と雖も恐らく無二の存在であらう。近時ラヂオの普及につれて、此方面の知識は如何に無關心であらうとしても尙且必要なるを否めない。卽ち特に清鑑を待つ所以である。卷頭に多數の寫眞版を掲げ、邦樂舞踊の詳しき沿革を記す。索引完備。

〔17〕
西行法師全歌集
——附・西行法師の生涯——
尾山篤二郎校註
全三九一頁
定價七十錢 〒九錢

題して全歌集といふも、西行作と稱せられる散文の盡く僞書なることの明かにされた今日、これはまさに西行法師全集といふに値する。山家集は勿論、「異本」を掲げて之との出入を訂し、聞書集同藩集・南宮歌合・諸集撰入歌等を全收したが、又西行の歌にして勅撰集等の歌集に入るものは、夫々頭註を用ゐて明かにした。其集のみにみえるものは別に之を掲げ尙「西行法師の生涯」は西行傳として機多の新說に富む。

〔18〕
西國立志編
スマイルス原著
中村正直譯
柳田泉校訂
全七二頁
定價四十錢 〒九錢

明治の時代を創り上げたといはれる人々にして、西國立志編を讀まなかつた人はなく、これを讀んで刺戟を蒙らなかつた者もない。スマイルス原著の自助論、江戸川聖人といはれた啓宇中村博士の翻譯により日東隨一の修養書となる。明治以來これほど大きな影響を人に與へ且實際的な效果を現はした書は外になかつたが、又、我が近代傳記文學の先驅として、偉人傳集成として、且は又初期翻譯のスタイルを代表するものとして、今なほ讀んで興趣のくめども盡きぬものがある。

〔19〕
國民性十論
芳賀矢一著
久松潛一校註
全四三頁
定價三十錢 〒六錢

日本人の國民性に就て眞摯な考察をした最初の本である。「忠君愛國」「祖先を崇び、家名を重んず」「現世的、實際的」「草木を愛し、自然を喜ぶ」「樂天洒落」「淡泊潔白」「纖麗纖巧」「清淨潔白」「禮節作法」「溫和寬恕」の十論であつて、的確な論據による何人をも首肯せしむるに足るべき獨善ならぬ實證的國民性論である。日本精神研究の呼聲高き今日、故人の衣鉢を繼ぐ久松博士に校註を乞ひ、新に祥に上せて江湖に送る。

〔20〕
ハムレット
（シェークスピヤ戲曲集）
坪內逍遙譯
日高只一註
全二〇六頁
定價四十錢 〒六錢

シェークスピヤのハムレットはまた我が坪內博士のハムレットである。これは單なる翻譯とみるべきものではなく、また翻譯の到り得る至高の妙所に達したものである。このことは原作者と譯者とが同じ偉大さに立つ場合にのみ可能である。今新版を作るに當つては、博士の高足日高教授を煩はして詳密な註釋及解說を加へ、研究書としても完璧を期したことを誇としたい。

〔21〕 **兒童の世紀**　エレン・ケイ著　原田實訳　全二八八頁　定價五十錢　〒六錢

近世教育史上に光芒を放つエレン・ケイ女史の名著である。女史のこの著は戀愛と結婚の神化、性慾の淨化を説くと共に、生れる子、育せる子の親を擁護し、權利と個性の尊重とを主張熱論し、二十世紀の教育に一大轟踐を與へ、原田教授の譯一度出でて我教育界に大きな波紋を描いたが、今また改修の筆を揮つて定譯「兒童の世紀」を成す。

〔22〕 **世界童謠集**　西條八十　水谷まさる共譯　全四一二頁　定價八十錢　〒九錢

全世界の秀れた童謠といふ童謠が「光のお部屋」から「青いお部屋」まで八つの部屋に分類して收められ、密るにこの國一流の童畫家諸氏の麗筆を以てし、顏然詩畫一體の妙境を拓いてゐる。我子のために良書を撰ぶ人の過してならぬ善本として自信を持つて推奬する。

〔23〕 **植物學語彙**　山下助四郎著　全三五六頁　定價七十錢　〒九錢

植物學上用語が多岐を極めてゐることの不便不利益は、斯學に從ふ人達の痛感されてゐるところである。本書は之等の人々のために一々彼此對照するの勞苦を惜くするやうに編まれたもので、日英獨の對譯、及び名用語に對する解說とが甚だ適切に按配されてゐる。

〔24〕 **悲劇 オルレアンの少女**　シラー著　藏原古一譯　全一九七頁　定價四十錢　〒六錢

これは愛國文學の隨一である。羊飼ひの少女ジャンヌ・ダルクが、神託を奉じて祖國の急に赴き、天晴外敵を斥けて母の國佛蘭西を累卵の危きより救ひ、中頃又を交へたゆくりなき敵將との戀に身を焦く苦惱を味はひ、爲に神罰を蒙つて囚はれの苦を嘗め乍らもやがてまた蘇る熱烈な祖國愛に、いましめの鎖を斷つて群る敵中に躍り入り、味方の勢を挽回しつゝ、其身は悲壯な死を遂げる迄詩聖シラーの筆に聽かのゆるみもなく、讀む者をして容易に卷を措く能はざらしめる。

〔25〕 **評釋 一葉小說全集**　樋口一葉著　長谷川時雨評釋　全五五八頁　定價九十錢　〒十二錢

樋口一葉の全作品を一本に收めて、各篇毎に長谷川女史による嚴密な評註釋を加へた。一葉の描いた世界も風俗も、既にその正しい鑑賞の爲には評釋を必要とするやうになつた。一葉の溜息一つ聞き漏さぬ時雨女史の、姉のやうな親身な評釋は、それだけでも讀んでたのしく味はひの深いものである。尙「たけくらべ」は特に文藝倶樂部所載當時の挿繪をも加へてある。

〔26〕 **唐詩選評釋（上）**　森槐南著　關田讓補註　全三九二頁　定價八十錢　〒九錢

萬葉を讀み唐詩選を學べば、東洋の詩心略〻領し得たりとして不可なからう。古來本朝に於ても、唐詩に註する者二三にして止まらずと雖も、森博士に至つて遂に古今卓歩、其後に於ては唯屋上屋を架する者あるに過ぎない。ただ博士の詩學が深遠なる氣り、往々難解の嫌を免れざるため、今新進の人東大支那文學研究室關田學士を煩はして補註を施し、解說、唐詩人列傳を加へ、努めて卒讀を容易ならしめた。

〔28〕 **新訂 日本陽明學派之哲學**　井上哲次郎著　全四三五頁　定價八十錢　〒九錢

現代が後世に傳ふるに足るべき善本を覆刻刊行するのは、本文庫の使命の一つである。本書は明治以降三代を通じて行はれ、その權威は彌が上にも昂揚されつゝあるが、今また齡八十を超えて尙壁譚たる老博士、その後の研究を集めて本書の改訂を企てられ、爲に、全篇朱を以て充たされ、更に文獻の大增補、「高井鴻山」一章の新執筆等、全く面目一新せる新訂版となつた。列傳體の日本陽明學史として、國體學の權威書として、時人の必讀を俟つ。

〔29〕 **復軒旅日記**　大槻文齊著　大槻茂雄校訂　全二七六頁　定價五十錢　〒六錢

言海博士大槻文齊先生が一生涯に試みられた數十度の旅行に於て、逆旅の燈下、矢立の筆に細々と誌された旅日記、辭書學者としての先生の特異な觀察、耳目に觸れるもの一切への仔細な學的考量など、その人爲を知らうとする人達にとつて此上もない好資料である。更に自傳及年譜を加へてこの一卷を玉成する。

〔30〕 **列强現勢史・ロシヤ**　大類伸著　全四〇〇頁　定價八十錢　〒九錢

さきにドイツ篇を出して絕讃を博したが、今またロシヤ篇成つて江湖に見ゆる。ドイツとロシヤとは現下我國民の最大關心事、この二國の現勢を直截に知り得るの書は、これを措いて他にない。尙ロシヤ篇に加へたロシヤ地圖は、外務省岩間徹氏の勞作に成つたもので、我國に於て最も新しく最も正確なるもの、外にアート刷寫眞數葉を加ふ。

〔31〕 **エゴイスト（自我狂）（上）**　メリディス著　繁野天來譯　全四二八頁　定價八十錢　〒九錢

英の大文豪ジョーヂ・メリディスが代表作。全篇に溢る諷刺と、諧謔と皮肉と、逆說と、序論一章、本文五十章の巨篇、讀み去り讀み來つて興の盡きるを知らない。書中貴族ウィロビ・パターンが妻えらびの一件は快活聰明なダラーム嬢、美しくて伸々食へぬところのあるクレアラ、内氣なリチシヤの三人を顯次に綿おろしして我儘一ぱい、自我一天ばりの若殿振舞の、とど心ならずもリチシヤを得て落着するに至る。天來繁野博士、晩年を本書の全譯に傾け、鞠躬の苦心はその天籟をきへ縮めたかといはれるが、漸く稿成つて忽焉長逝、遂に出版をみずして了つた。今遺愛に乞ふて本文庫に收める。

〔33〕 **おらんだ正月**（日本の科學者達）　森銑三著　全三二二頁　定價六十錢　〒六錢

史的人物中より科學者五十二名を拉し來つて、平易な口語文にその傳を敍す。英雄豪傑を傳するもの、これを乏しとせぬが、科學者のみを蒐めて一書に傳するは本書を以て濫觴としよう。加ふるに七十八圖の挿繪あり、肖像・製作品・遺跡等一もあまさず、又口繪の名畫「おらんだ正月を祝ふ人々」は本書の題名の由來を讀者に說明するであらう。

續刊豫告

- 稜威言別　橘純一校訂　橘守部著
- 萬葉代匠記（二）　武田祐吉校註　契沖著
- 今昔物語集　芳賀矢一校訂
- 和泉式部全集　伊藤嘉夫校註
- 源平盛衰記（一）　高木武校註
- 謡曲三百五十番集（上・下）　安藤常次郎校註　野々村戒三校註
- 狂言三百番集（上・下）　安藤常次郎校註　野々村戒三校註
- 芭蕉翁繪詞傳　幸田露伴校訂
- 上田秋成全集（一）　鈴木敏也校註
- 國文學史十講　島津久基校註　芳賀矢一著
- 竪琴草紙そのほか　本間久雄校註　山田美妙著
- ふる郷　柳田泉校訂　田山花袋著
- 敵討　平出鏗二郎著
- 市川團十郎の代々　伊原青々園著
- 講述 大乘起信論　望月信亨著

- 妙法蓮華經　二宮守人譯註
- 法句經　立花俊道譯註
- 佛典解題（印度部）　小野玄妙　辻森要　共著
- マハー・ヴンサ（大史）　平松友嗣譯註
- 佛陀の生涯（佛所行讃）　馬鳴著　平等通昭譯註
- 莊子　高田眞治校註
- 大學・中庸　高田眞治校註
- 詩經　橋本循校註
- 唐詩選評釋（下）　森槐南著　森田穰補註
- 增補 世界文化史　エイチ・ヂ・ウェルズ著　森村豐譯
- ナポレオン時代史（上・下）　箕作元八著　大類伸校訂
- 成吉思汗（アジアの風）　ブラヴディン著　濱中英田譯
- ネルソン傳　サウジイ著　龜井常藏譯
- 歷史の構造　ディルタイ著　樺俊雄譯
- 增訂 哲學史要　ヴィンデルバント著　ハイムゼート增補述　桑木嚴翼譯
- 十九世紀ドイツ哲學思潮　ヴィンデルバント著　岡田隆平譯

K74

希臘悲劇時代の哲學　ニイチェ著　青木巌譯

ハイデッガーの哲學　フィッシャー著　佐藤慶二譯

人間史　エリオット・スミス著　西村眞次譯

ラ・ロシュフーコー箴言集　内藤濯譯

三つの物語（聖ヂュリアンの物語そのほか）　フローベール著　中村星湖譯

トリスタンとイソルデ　佐藤輝夫譯

佛蘭西詞華集　諸家

現代歴史　フランス著　小林龍雄外譯

佛蘭西戰話集　小林龍雄外　新庄嘉章外譯

佛蘭西短篇小說集　後藤末雄外譯

ヘッベル日記抄　吹田順助譯

惡魔の靈藥　ホフマン著　國松孝二譯

ルーマニヤ日記（陣中日記）　高橋健二譯

幼年時代　カロッサ著　石中象治譯

成年の秘密　カロッサ著　高橋義孝譯

美　ヘッセ著　富士川英郎譯

730
X
258

終